

る。内訳は杯身2点、杯蓋細片1点、甗底部細片1点である。杯身(312)はⅡ-2～3段階のもので、底部外面には「×」のヘラ記号がみられる。

土坑62(図38)は1Bトレンチで検出。遺物はⅡ-1～4段階の須恵器が少量出土している。内訳はⅡ-1～2段階の杯蓋が2点、Ⅱ-2～3段階の略完形の杯身が1点(313)、Ⅱ-4段階の杯身1点、Ⅱ-4段階かと思われる甗1点、Ⅱ型式の器台脚細片1点、壺・甗体部破片などが出土している。

土坑65(図38)は1Bトレンチで検出。遺物はⅡ-3～4段階の杯身が1点(314)出土しており、底部内面には当て具痕がみられる。

土坑12(図38)は1Bトレンチで検出。遺物は口縁部が1/4強残存するⅡ-4段階の甗が1点(315)出土している。

土坑34(図38、写真図版63)は1Bと3Bトレンチにまたがって検出。遺物はⅡ-1～4段階の須恵器が少量出土している。内訳はⅡ-1～2段階の生焼けの杯身が1点、生焼け1点を含む杯蓋が7点、脚部破片が1点、Ⅱ-2～3段階の杯身2点(316)、Ⅱ-3～4段階の杯蓋が生焼け1点、略完形1点の計2点、甗3点などである。316の杯身底部内面には当て具痕がみられる。

土坑155(図38、写真図版63)は3Bトレンチで検出。遺物はⅠ-5～Ⅱ-1段階からⅡ-4段階の須恵器が少量と、土師器細片が1点出土している。内訳はⅠ-5～Ⅱ-1の杯蓋細片2点(317)、完形2点(318)と1/2個体の杯身が1点の計3点、甗1点(321)、甗1点、Ⅱ-2段階の生焼け1点を含む杯蓋細片2点、短頸壺1点、Ⅱ-4段階の杯身1点、生焼けの杯蓋細片1点、Ⅱ型式の甗2点(320)、生焼けの甗1点などである。甗体部破片(319)は外面が平行叩きのちかき目であるが、内面の当て具痕が同心円の外側部分を一部放射状に遮る2本の線がみられる。車輪状でもなく、このような当て具痕はこれ1点のみである。

土坑171(図38)は3Bトレンチで検出。遺物はⅡ-1～4段階の須恵器が少量出土している。内訳はⅡ-1～2段階の杯身4点、杯蓋8点、Ⅱ-3～4段階の杯身が3点である。そのほか、文様付きの高杯蓋1点、甗の把手1点、甗体部細片などが少々、土師器細片2点が出土している。高杯蓋(322)は列点と直線で羽状文状に文様を施したものである。これらの文様を施した蓋は大庭寺遺跡では数点みられた。

土坑174(図38、写真図版63)は3Bトレンチで検出。遺物はⅡ-1～2段階の杯蓋(323)1点と、焼土塊細片、炭細片が出土している。323の杯蓋は口縁部に歪みがあり、2/3個体強残存する。

土坑175(図38)は3Bトレンチで検出。遺物はⅠ-5からⅡ-1～2段階の須恵器が数点と、土師器細片3点が出土している。内訳は杯身完形1点、杯蓋3点、無蓋高杯?細片1点、体部細片4点などである。324の杯蓋は小片で、天井部内面に当て具痕が残る。

土坑150(図38)は3Bトレンチで検出。遺物はⅠ-5～Ⅱ-1段階からⅡ-3～4段階の須恵器が数点出土している。内訳はⅠ-5～Ⅱ-1が杯蓋3点、無蓋高杯1点、Ⅱ-2段階の杯蓋1点、無蓋高杯1点、Ⅱ-2段階かと思われる甗が1点、Ⅱ-2～3段階の杯身1点(325)、Ⅱ-3～4段階の杯身が1点などがある。

土坑189(図39)は3Bトレンチで検出。遺物はⅠ-5からⅡ-1段階からⅡ-2段階の須恵器が数点と、土師器細片が2点出土している。杯蓋(326)は1/3個体残存し、稜部は退化した沈線1条で、外面には灰を被っている。Ⅱ-2段階にあたる。

土坑230(図39)は3Bトレンチで検出。遺物は稜部が少し退化して突出度の低い、Ⅱ-2段階の杯蓋

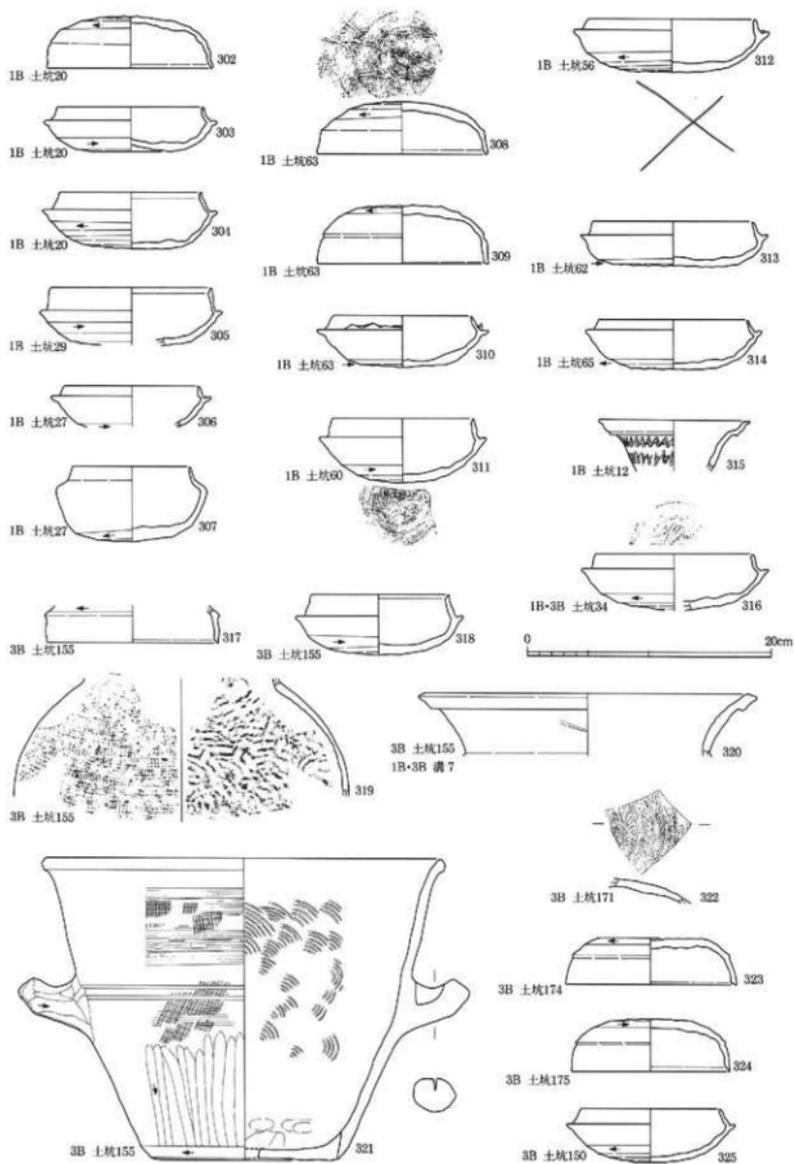


図38 1B, 3Bトレンチ土坑出土遺物

(327) 1点が出土している。

土坑190(図39)は3Bトレンチで検出。遺物はⅡ-1からⅡ-3~4段階の須恵器が少量出土している。内訳はⅡ-1段階の生焼け1点を含む杯身が2点、杯蓋が1点、Ⅱ-2段階の杯身が4点(328)、杯蓋が6点、無蓋高杯が3点、短頸壺細片が1点、Ⅱ-2~3段階の杯身1点、脚部破片4点、Ⅱ-3~4段階の杯身細片1点、Ⅱ型式と思われる碗1点、甕1点などがある。328の杯身は1/5個体の残存である。把手付き碗(329)は直口する口縁部をもち、把手を貼り付けた後、把手部分をヘラにより多角形に面とりの様に削り、仕上げにんでいる。

土坑610(図39、写真図版13・63)は4Bトレンチで、後述の鍛冶関連遺構である土坑612の北西へ約15mのところ検出された。長軸110cm、短軸90cm、深さ約22cmを測る隅円の土坑であり、北辺は円くおさめる。中には須恵器の甕と壺の口縁を組み合わせ、土坑の向きに対してやや西に傾けて、横置きに設置している。須恵器の甕と壺の上半分は削平を受け、欠損しているが、一部は甕内に崩落していた。口縁部の組み合わせは甕口縁部の内側に壺口縁部がおさまっている。土坑の埋土は灰黄色粘質土であり、周辺の地山と非常に近似している。墓としての可能性が非常に高い土坑と考えられるが、周辺に同様な土坑は無く、単独で存在している。口径24.0cm、器高45.5cmの大甕(331)は焼成良好で堅く緻密であるが、口径15.3cmの壺(330)は焼成不良で、軟質である。両方の土器ともに体部外面は縦格子状の叩き後カキ目を施している。甕内面は青海波の当て具痕を残す。壺内面はなでられている。壺は口縁から頸にかけての内面に、縦に細長く2×1cmの範囲で、1mm間隔の交差する布目圧痕?のような痕跡が認められる。甕、壺ともにⅡ-4段階前後のものか。

次に述べる土坑611・612は溝8・110等の区画溝から西へ約35m離れた4Bトレンチ南側で検出されている。

土坑611(図40、写真図版13・64)は4Bトレンチで検出。長軸1.0m、短軸0.8mの円形を呈しており、深さは約12cmを測る。埋土は黄褐色砂質土である。遺物はⅡ-2段階と思われる杯身(332)が完形で1点出土している。口縁部に歪みがあり、底部に別個体の溶着破片がみられる。他に短頸壺かと思われる頸片1点、輪羽口細片6点、魃滓3点、釘?1点が出土している。

土坑612(図40・41、写真図版14・64・65・77)は土坑611の南約2mに位置し、長軸4.8m、短軸1.5~2.5mを測り、西辺は円く収め、東辺は隅円としている。深さは10~20cmを測り、底面はほぼ平坦ではあるが中央やや西側に直径0.8~1.1m、深さ約6cmの浅い窪みを有し、その場所から東にかけては東西方向に深さ約3cmの浅い段差がみられる。埋土は炭化物を含んだ褐色系の砂質土である。鉄滓・輪羽口は広範囲に分布しており、輪羽口はやや東寄りに偏る傾向がある。輪羽口は内径が17~20mmと25~30mmのものに分けることができ、内径5~30mmの外観は裾拡がりとなり、土坑の南東隅から出土している。

遺物は須恵器の杯身、杯蓋、無蓋高杯、高杯蓋、甕、甕?、脚破片などのうち口縁部を含む破片87点、土器では甕3点(333、334)、脚破片1点、鍛冶関係では輪羽口破片多数(図40-336~341、写真図版77)、魃滓破片多数(写真図版77-1351、1352)、鉄釘、焼土塊、窯壁片1点、炭細片、砥石細片1点などが出土している。

須恵器はⅠ-4~5段階からⅡ-5段階までの時期の須恵器のうち、Ⅱ-2~4段階までのものが大部分であり(342~344、346、347、350)、杯身、杯蓋が全体の74%を占める。須恵器の完形品は杯身、杯蓋に数点みられる程度で、破片が多い。345の杯身はⅡ-1段階、348の壺蓋、349の短頸壺はⅡ型式に属すると思われるものである。345の杯身と347の高杯蓋口縁部には焼け歪みがみられる。須恵器甕の

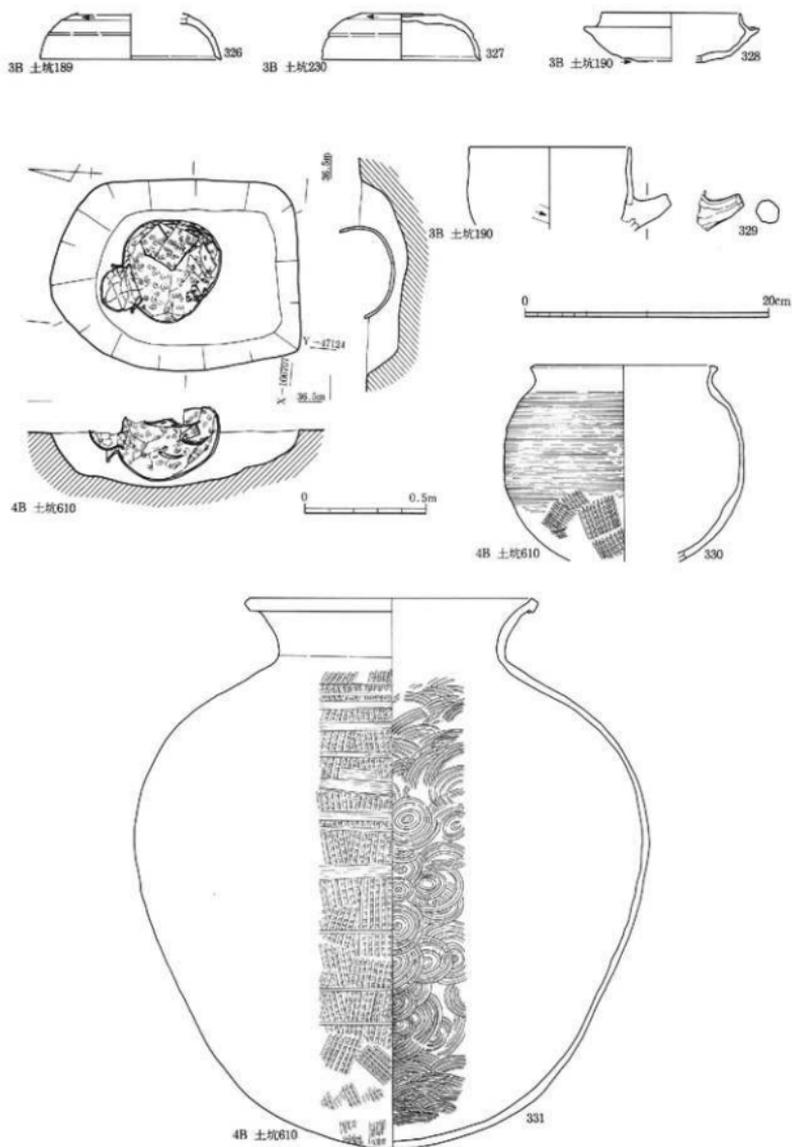


図39 土坑610平・断面図および3B、4Bトレンチ土坑出土遺物

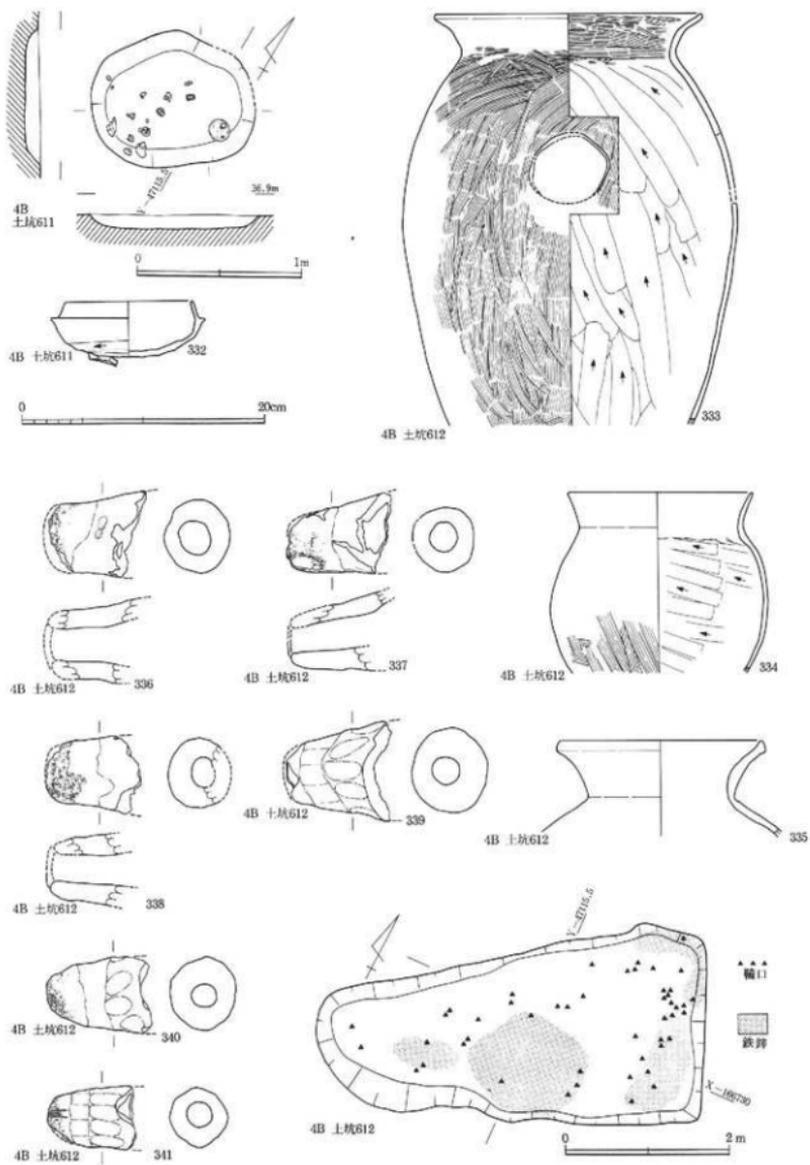
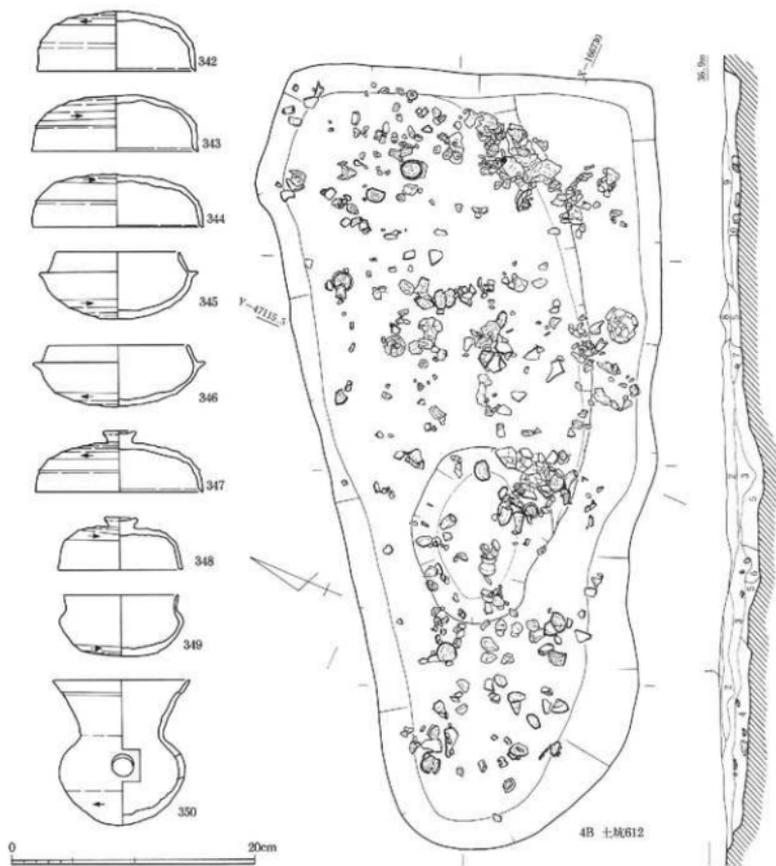


图40 土坑611平・断面図、土坑612遺物分布図および出土遺物



1. 2.5Y6/4 におい黄褐色砂質土
2. 10YR4/6 褐色砂質土(炭含む)
3. 2.5Y/1 黄灰色砂質土
4. 2.5Y/2 緑灰黄褐色砂質土(炭含む)
5. 10YR7/6 暗黄褐色砂質土(炭含む)
6. 2.5Y/4 黄褐色砂質土(炭含む)
7. 10YR5/4 におい黄褐色砂質土(炭含む)
8. 2.5Y6/4 におい黄褐色砂質土(炭多し)
9. 2.5Y5/6 黄褐色砂質土
10. 2.5Y/6 オリーブ褐色砂質土(炭含む)
11. 2.5Y/2 緑灰黄褐色砂質土(炭多し)
12. 2.5Y/6 暗黄褐色砂質土
13. 2.5Y/4 オリーブ褐色砂質土(炭多し)
14. 2.5Y/3 黄褐色砂質土(炭多し)

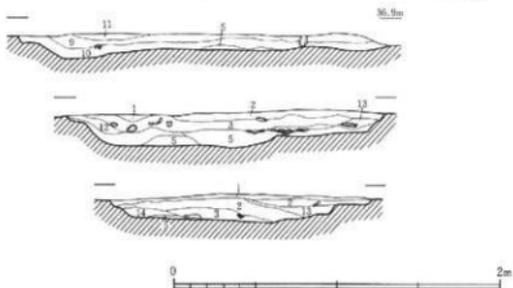


図41 土坑612平・断面図および出土遺物

体部破片1点に熱を受けた痕跡がみられる。

土師器大形甕(333)の体部には径約6cmの二次的な穿孔がある。土墳墓に関係する遺物が混じているものか。

竈羽口や鉺滓には細片が多いが、竈羽口の残りの良いものは20数点あり、鉺滓では碗形状のものが33点みられ、中には一辺約10cmを測るものもみられる。鉄釘は錆の付着が著しいが、残存長4.6cm、幅0.4cmを測る。

土坑611・612は鍛冶工房関連の遺構と考えられるが、土坑内からの出土土器の数量が多く、また、壁面に焼土等が認められないところから廃棄土坑の可能性が高いと考えられていた。しかし、土坑612からは二次的に穿孔された土師器の大甕が1点出土していることから、土坑612については以前にあった土坑(墓?)がなんらかの理由によって壊され、副葬品?の須恵器、土師器が大部分細片化し、大量の鍛冶に伴う遺物とともに、ごみ穴状態の土坑に埋め戻されたものかと推測される。

5. 竈(図42~44、写真図版10・69)

古墳時代の須恵器竈・TG229は、6Aトレンチにおいて検出された。この竈は段丘の緩やかな斜面に築かれている。遺構は大半が中・近世に削平され、辛うじて焼成部の床面と、側壁の一部が残されていた。従って煙道部・燃焼部・焚口の構造は不明である。主軸方位はN-70°-Wにおき、規模は残存長2.8m、最大幅1.8m、側壁高0.25m傾斜角度約13~14°を測る。側壁、床面の遺存状態は良好ではないが、一部で青灰色に還元した貼壁を確認した。

TG229号竈出土遺物はII-2~4段階の杯身50点、杯蓋76点、有蓋高杯2点、無蓋高杯?1点、短頸壺1点、甕8点、横瓶体部破片、脚部破片、窯壁破片であり、杯身、杯蓋が全体の約9割強を占める。甕は口縁、体部破片ともに少ない。口縁部破片の点数は計138点あり、このうち生焼けは4割を占める。杯蓋は退化した稜部が僅かに残るものと、稜部の無いものがあり、両方ともに同じ位の割合でみられる。杯身や杯蓋で内面に当て具痕を留めるもの(433、427、428、439、452、454~459)が目立つ。また、杯蓋と杯身のなかには各1点ずつであるが、外面に平行叩きを残すものがみられる(435、452)。

464の短頸壺は体部外面にカキ目を施したもので、体部に別個体の叩き目が僅かに溶着している。462の有蓋高杯はかなり焼け歪んでおり、杯部がひしゃげている。

ヘラ記号を有するものは13点あり、「一」、「×」、「×」、「川」の4種類みられる。「一」のヘラ記号は杯蓋、杯身、杯蓋または杯身不明のものにそれぞれみられる。ヘラ記号を有する口縁部破片は8点で口縁部残存の全体の6%弱を占める。

ヘラ記号を有する器種は杯身が1点、杯蓋が6点、杯身か杯蓋不明が5点、甕が1点である。杯蓋の天井部外面にヘラ記号を有するものは3種類(418、433)あり、そのうち「一」が4点と最も多い。杯身か杯蓋か不明のヘラ記号は「一」が3点、「×」が2点である。468は甕頸部内面に縦3本の線を引いたヘラ記号である。

6. 落ち込み(図45・46、写真図版10・42・69・70)

落ち込み9(図45-469~477、写真図版69)は1B・2Bトレンチにまたがり南側で検出。遺物は須恵器ではII-1~5段階の杯蓋、甕、脚台が少々、土師器では甕1点が出土している。II-2~4段階の杯身、杯蓋が大部分を占める。473の杯身は底部内面に当て具痕がみられる。477の脚台は内面に叩きの当て具痕、外面に平行叩きの痕跡が残り、壺の脚台が。

落ち込み58(図45-478~487、写真図版42・69)は3Aトレンチ中央部南側で検出されており、南側

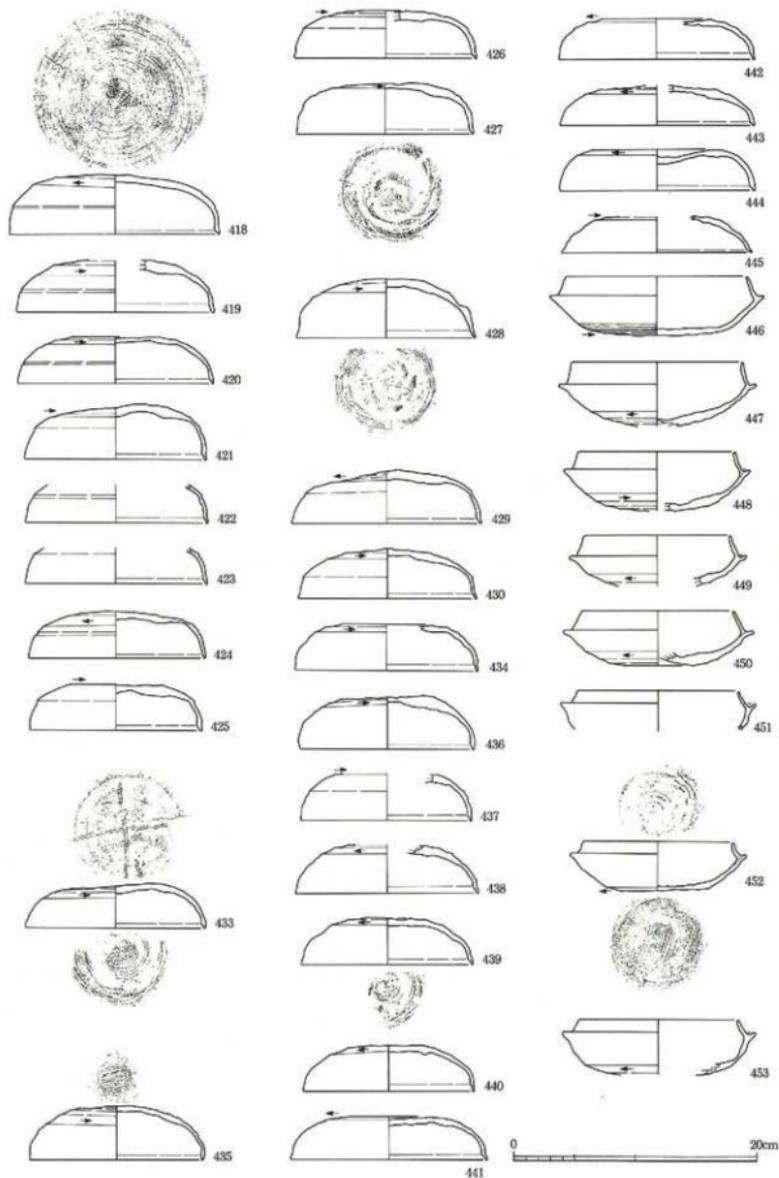


图43 TG229出土遗物

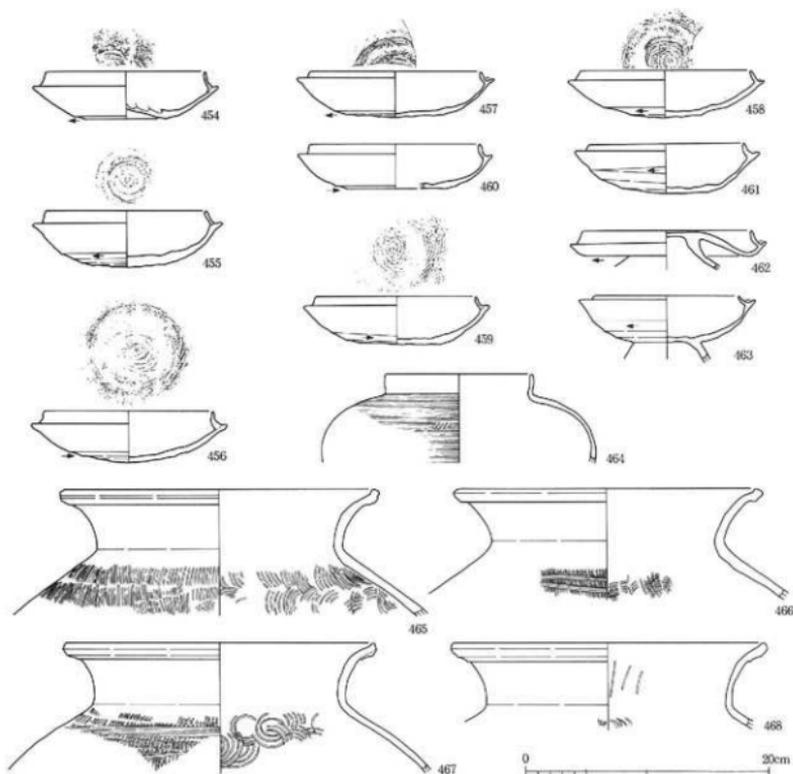


図44 TG229出土遺物

の8世紀の落ち込み55に切られている。深さ10cmを測り、埋没時期は7世紀前葉と考えられる。出土遺物にはI-5?からII-5~6段階の杯蓋、杯身、高杯などが少々ある。II-5~6段階が主に見られる。杯蓋にかえりのついたものは認められなかった。他には壺、甕、III-2段階の脚台と埴2点、土師器細片が出土している。487は肩部にボタン状の粘土を貼り付けており、2ヵ所に残存するが、推定では4ヵ所にあったものか。487の受け口状の口縁部外面には羽状の刻み目がみられるが、全周するものか不明である。487はIII型式の壺か。

落ち込み6 (図45-488~492、写真図版70) は1Bトレンチ南端において検出され、深さは約10cmと浅い。埋土は褐灰色砂質土であり、埋没時期は6世紀中葉である。ここからはI-3~4段階の杯蓋が2点と、II-2~4段階の杯蓋、杯身が主にみられ、他に甕、鉢などが出土している。

落ち込み3 (図46-493~497、写真図版10・70) は1Bトレンチ北東で検出。建物12のピットにより切られている。遺物はII-1~4段階の杯蓋 (493)、杯身 (494、495)、短頸壺 (496)、甕 (497) が少々、他、甕、器台が各1点出土している。甕には「×」のヘラ記号を有するものが1点みられる。495の

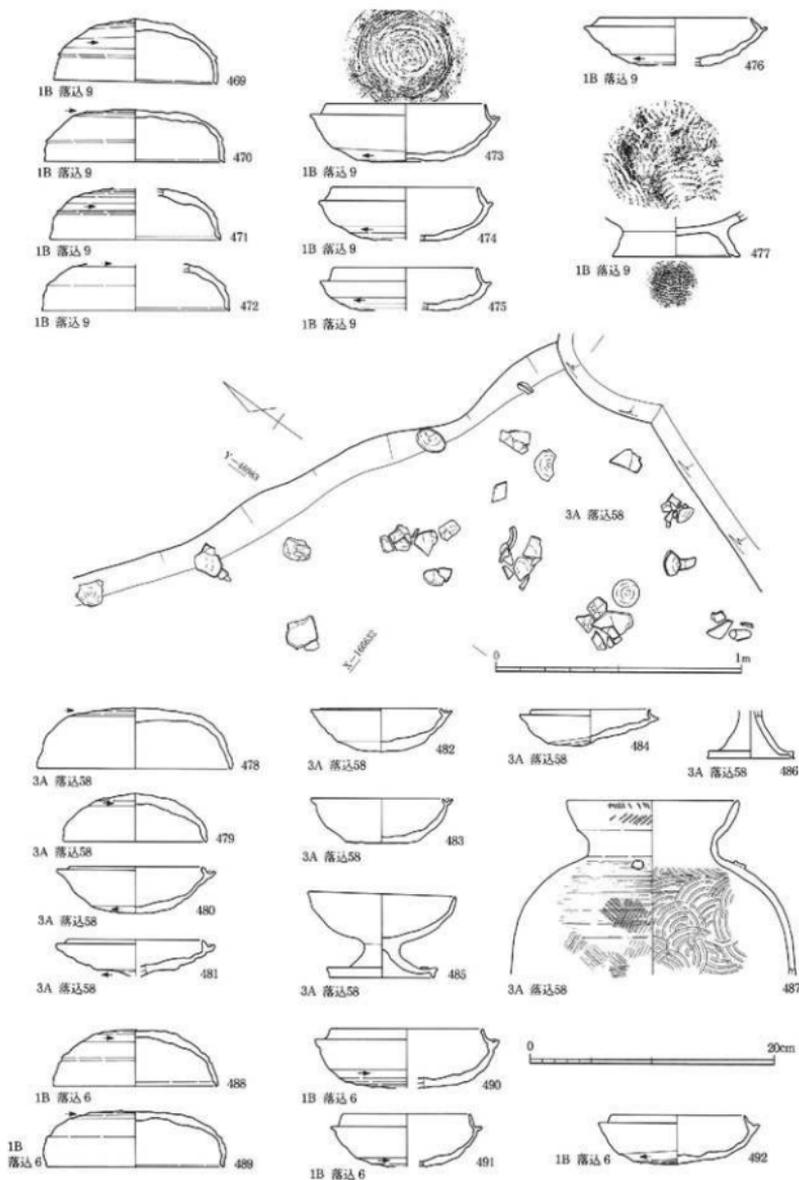


图45 落ち込み58平面図および落ち込み6, 9, 58出土遺物

杯身は底部外面に「一」のヘラ記号を有する。

落ち込み4（図46）は1Bトレンチ中央よりやや北側で検出。ここからはⅡ-2段階の杯蓋（498）、杯身（499）が数点と甕が1点出土している。

落ち込み5（図46）は1Bトレンチ中央よりやや南側で検出。遺物はⅠ-5～Ⅱ-1段階からⅡ-4段階の須恵器が20点弱出土しており、主にⅡ-2～4段階のものが多い。杯身（500）、有蓋高杯（501）鉢？、甕？、土師器の甕1点などが出土している。

落ち込み10（図46、写真図版10）は1Bトレンチ西側中央部で検出された。長さ約7m以上、幅約1mを測り、深さは10cmと浅い。中世の溝により一部が切られている。遺物はⅠ-5からⅡ-2段階の杯蓋（502）、杯身（503～505）、甕（506、507）が少量出土している。

落ち込み22（図46、写真図版70）は3Bトレンチ南端で検出し、トレンチ外へ続く。遺物はⅡ-1？からⅡ-5段階の須恵器が少々出土しており、Ⅱ-3～4段階のものが大半を占める。器種は杯蓋（508）、杯身（509）、台付鉢（510）、すり鉢（511）がみられる。509の杯身底部外面には「一」のヘラ記号がみられる。

落ち込み23（図46）は3Bトレンチ南東で検出。遺物はⅡ-1～4段階の杯身（512、513）、杯蓋が計40点出土しており、他にはⅡ-6段階かと思われる甕や脚台が数点と、Ⅳ-2段階の杯蓋片1点がみられる。

7. 包含層、その他出土遺物（図47～53、写真図版71～77）

4Bトレンチの谷埋土、6Aトレンチの埋没谷埋土から出土の遺物は、古墳から奈良時代のものがまぎらまぎらみられる。それらの中でも、古墳時代に属すると思われる遺物を抽出した。また、包含層より出土した遺物で、特徴的なものも併せて掲載した。

初期須恵器の特徴を示すものが僅かではあるが、6Aトレンチの埋没谷埋土やB、C地区の包含層から出土している。6Aトレンチから出土の初期須恵器は526の樽形甕、517、598、600、604の甕や壺、632の器台である。その他、縄文文の破片が24点と少量だが、包含層その他の遺構から出土しており、出土地点を図47に表してみた。4Bから5C・3Cトレンチにかけての谷およびその周辺からの出土が多い。遺構出土の縄文文の破片は土坑4点、溝2点、落ち込み1点であるが、いずれも体部細片ばかりである。

土師器は少量だが出土しており、6Aトレンチの埋没谷埋土からは甕の破片が11点認められた（602、写真図版106-603）。甕の破片は細片のみで、図化したのは井戸23出土の1点を含めて3点である。

包含層、その他から出土の古墳時代と思われる遺物を、図48～53に示した。図48～514～図51-606は6Aトレンチ、図51-607、608は3Aトレンチ、図52-609、610は1Bトレンチ、図52-611～613は2Bトレンチ、図52-614～636は3Bトレンチ、図53-637～641は4Bトレンチ、図53-642は1Cトレンチ、図53-643、644は3Cトレンチ、図53-38～43は3Aおよび2～4BトレンチのPit出土遺物である。

6Aトレンチでは、図48-514～519は最終礫層、図48-520～図49-553は灰黒色粘土または黒色粘土の礫混合層（段状4段目礫）、図49-556～図50-583は黒色粘土礫混合層、図50-584～図51-591は灰黒色粘土礫混合層、図51-592～596は灰黒色粘土礫混合層（段状3段目礫）、図51-597～603は灰黒色粘土礫混合層（段状2段目礫）であり、これらは図15では粘土質シルトで土層断面に表示されている層からの出土遺物である。

図48-521、522は杯身底部外面に叩き目を有し、521の内面には当て具が残る。

533の杯身には杯蓋が着着している。図48-534の杯身外面には「フ」状のヘラ記号を有する。図48-528

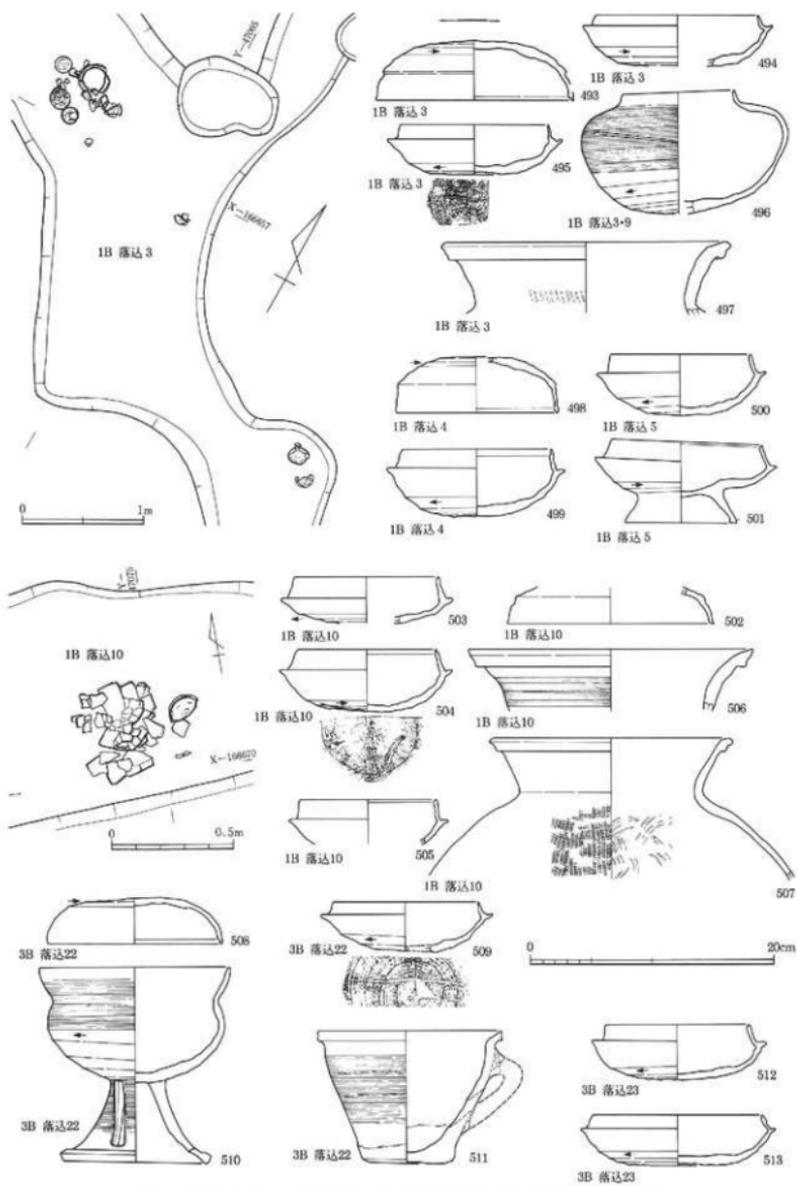


図46 落ち込み3, 10平面図および落ち込み3, 4, 5, 10, 22, 23出土遺物

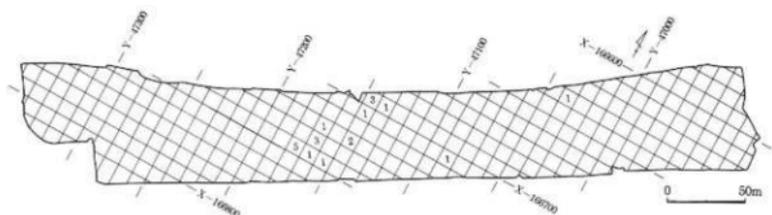


図47 縄蓑文地区別出土点数

の焼成不良の甕口縁部内面にはヘラ記号（写真図版105）があり、頸部外面にはヘラ記号と紛らわしい後世の傷がみられる。図48-531の甕体部破片と思われる把手には、先端部にヘラ状のもので刺突された痕跡と把手上部に浅い溝状の筋がみられる。図48-536の高杯？は杯底部に焼成前の孔がみられる。図49-548は底部の斜がれ落ちたすり鉢である。570・574の甕頸部外面には「フ」状の、571・572の甕頸部外面には斜めに平行する線のヘラ記号が、573の甕頸部外面および606の甕頸部内面には鳥足文状の、575の甕頸部内面には3本の平行する線の、605の甕頸部外面には「く」状で上下に挟まったヘラ記号が施されている（写真図版105）。585の杯身内面には「一」状のヘラ記号がみられる（写真図版105）。

図49-555は滑石製の紡錘車で、底辺に鋸歯文を線刻している。

1Bトレンチからは直径約5cmの須恵質の当て具が1点出土している（図52-609）。当て具は、きのこ状をした先端部が残っており、その表面は灰を被っているが、指でなでられ、滑らかである。つまみの部分の根元は直径約2cmである。610はミニチュアの壺で体部に焼成前穿孔の1孔を有する。

2Bトレンチ出土遺物では、図52-611はひすいの勾玉で、透光性の撮影によると石質の違いにより、穿孔部から一条の筋がのびているように見えるが、実際には筋は刻まれていない。表面中央の外側と、図化していない方の面である裏面頭部には研ぎ残し部分が少しみられる。勾玉の穿孔はまず裏面からなされ、次いで表面から2度にわたり、孔を少し大きくしている。尾の先端部分は平らである。

図52-612、613は紡錘車であり、612が土師質、613が瓦質に似た須恵質である。焼成前に中央部に孔が穿たれている。

3Bトレンチ出土遺物では、図52-614の杯身内底部に一部赤色物質が付着している。図52-617の高杯蓋には櫛描による列点文が施されている。図52-629は丸く細長い湾曲した把手が斜がれて残ったもので、腕の把手が不明である。図52-633は高杯の杯部内面にT字状のヘラ記号が描かれている（写真図版105）。図52-634は蛸壺の把手部分がやや扁平につまみ出されている。

4Bトレンチ出土遺物では図53-638、639の甕頸部外面に「一」と「フ」を組み合わせたようなヘラ記号がみられる。図53-640、641は土師器の壺、甕である。2点ともに内面はヘラ削りを施している。

1Cトレンチ出土の図53-642は甕の口縁部から頸にかけての外内面にヘラ記号を付けられたもので、外面には斜めに「一」が1本（破片のため2本か3本になる可能性も考えられる）、内面には鳥の足跡状のヘラ記号がみられる（写真図版105）。

3Cトレンチ出土の図53-643の短頸壺は、口縁部がゆがみ、肩部に蓋の溶着痕と底部に別個体の破片が僅かに付着している。図53-641は壺蓋と思われるもので、杯蓋状に紐孔のあいた突起物が2ヵ所につけられている。

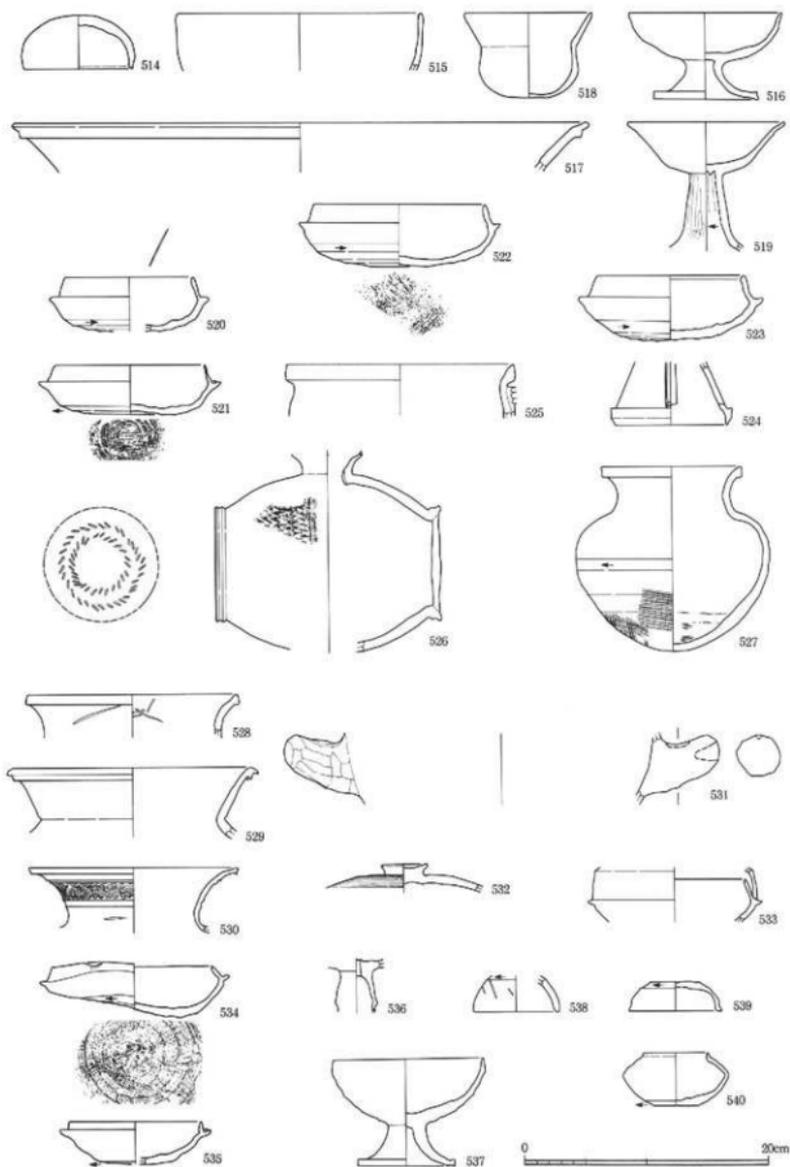


圖48 包含層出土遺物

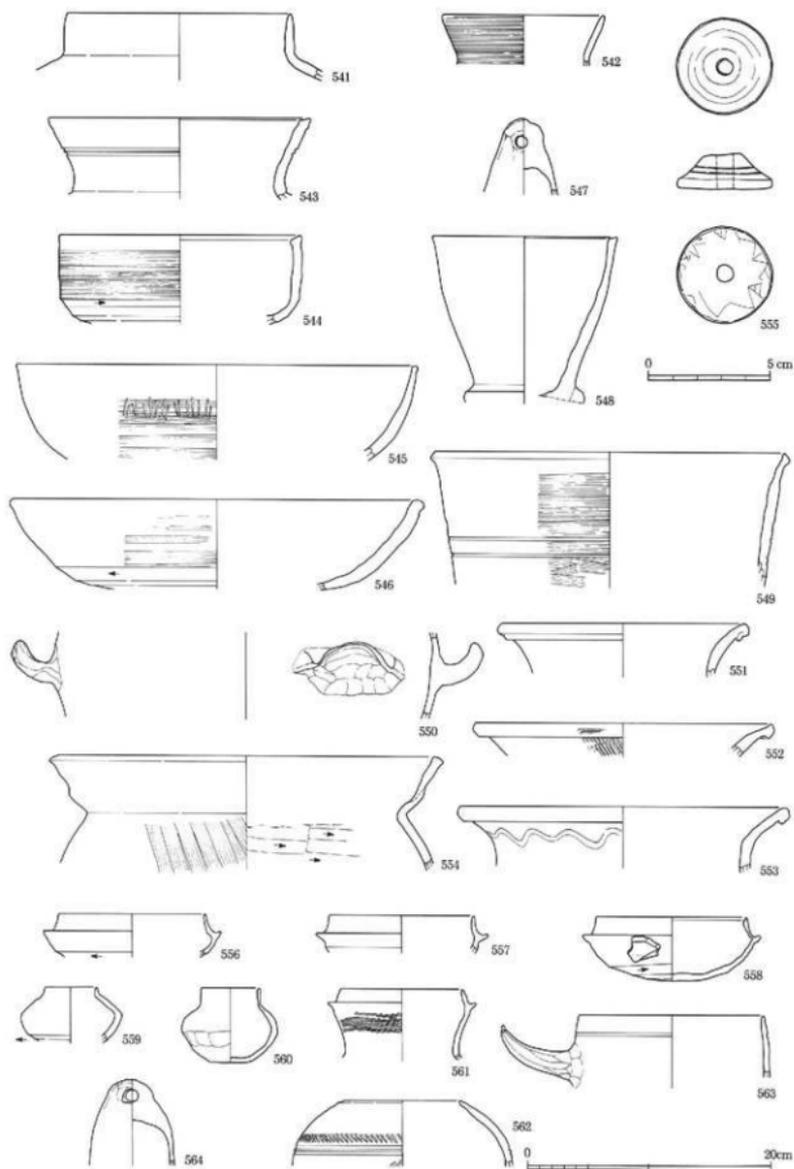


图49 包含层出土遗物

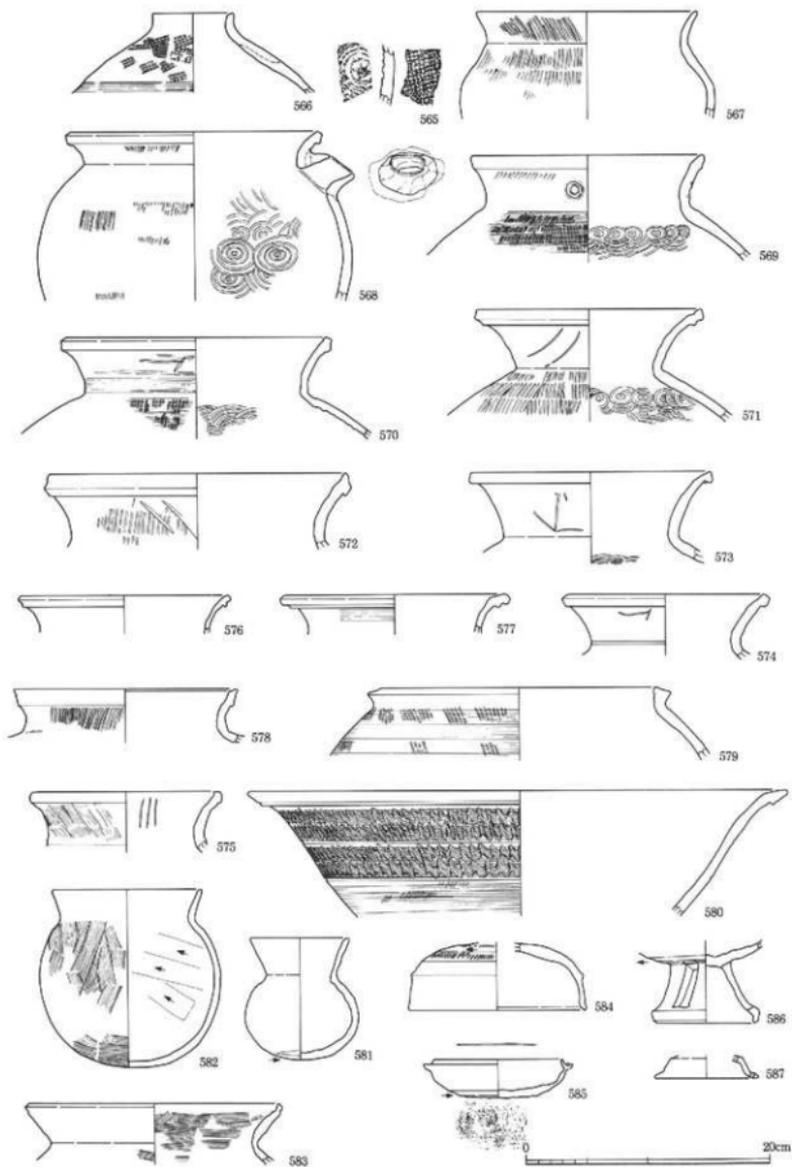


图50 包含層出土遺物

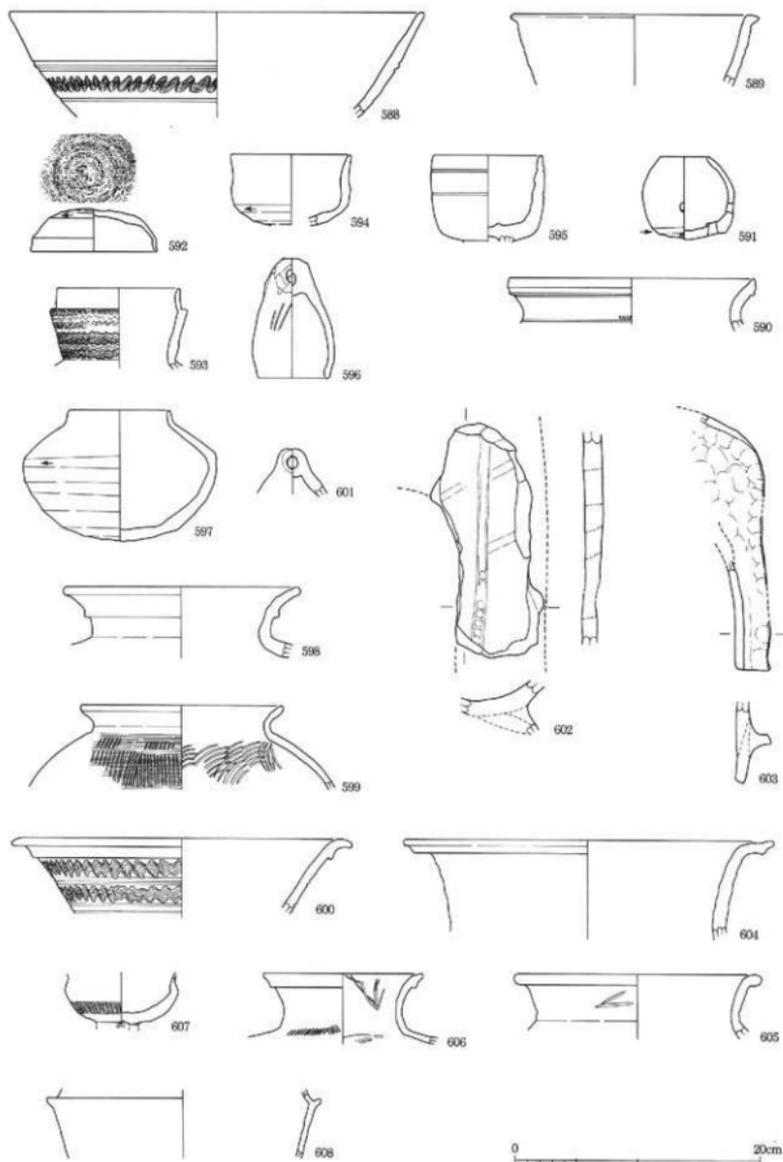


圖51 包含層出土遺物

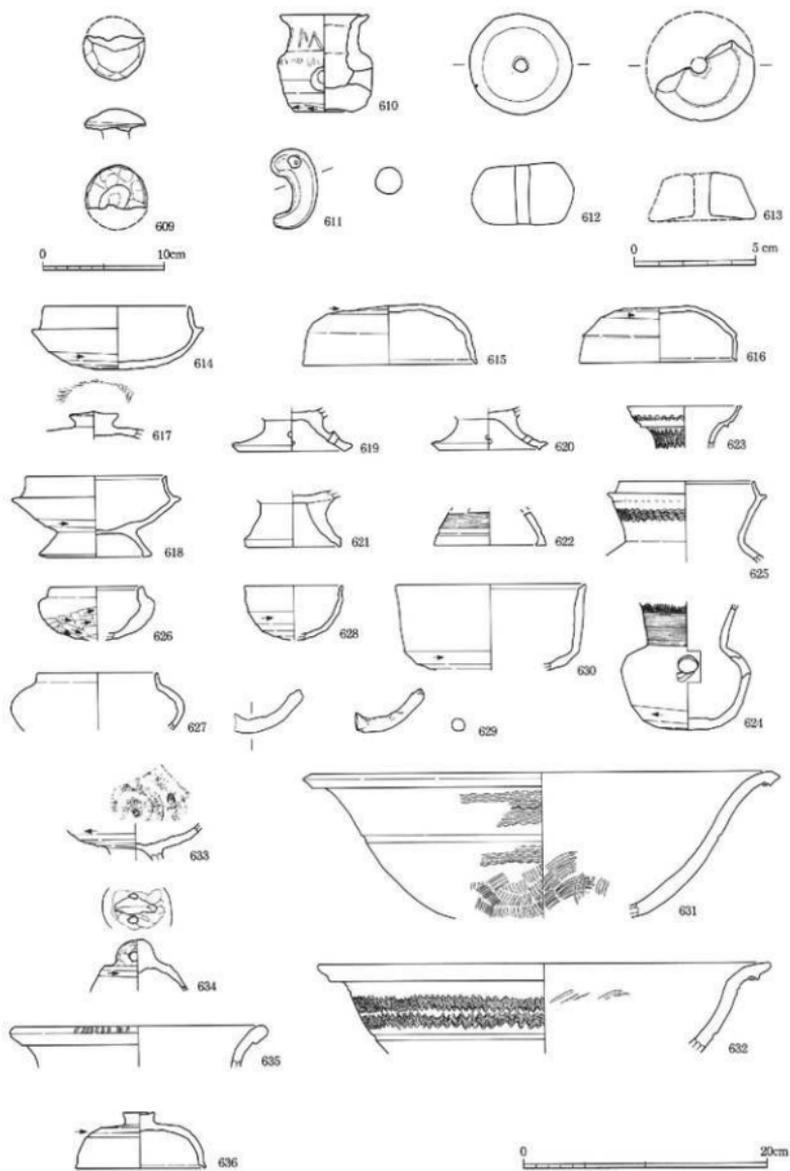


图52 包含层出土遗物

図53-38~43はAおよびB地区のPit出土遺物である（写真図版51）。

38は奈良時代の建物41のPit2331掘り方から出土した杯蓋である。口縁部および体部に偶然ついたものか、ヘラ記号状のものか、焼成前の細い筋状の痕跡がみられる（写真図版105）。

39は建物33のPit1933に切られたPit1932出土のものである。杯蓋として図化したが、杯身の可能性もある。

40は3Bトレンチの落ち込み23よりも下層のPit2268より出土の小型短頸壺である。

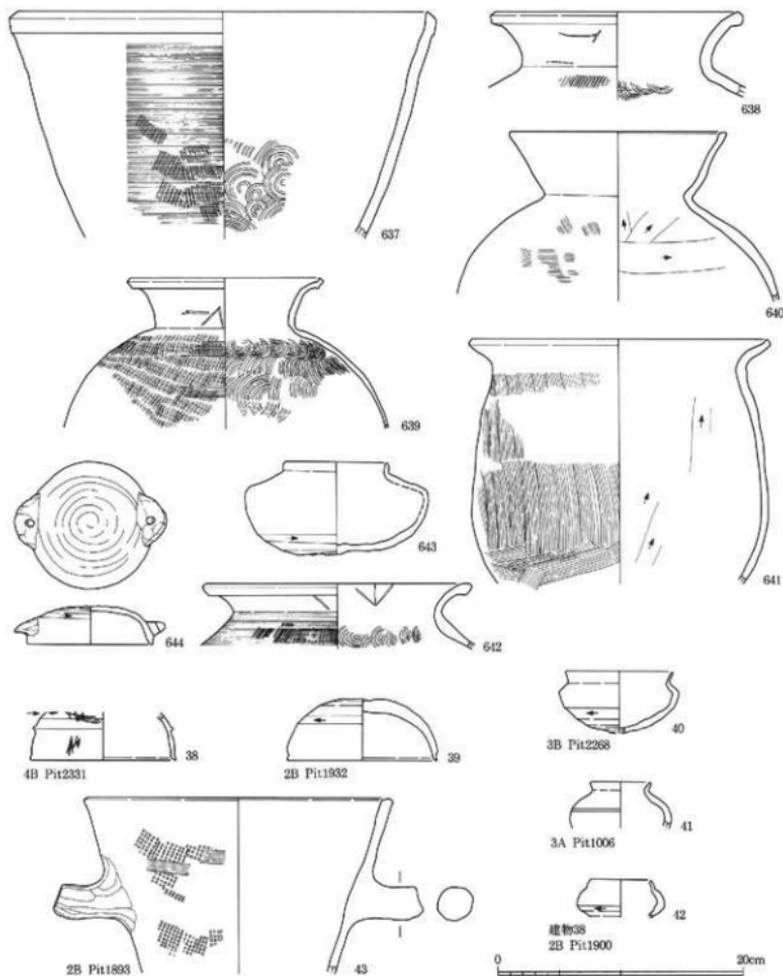


図53 包含層、その他出土遺物

41は平安時代の建物18の南西角にあたるPitの近くに位置するPit1006から出土した小型の短頸壺である。

42は奈良時代建物38のPit1900より出土した。小型の短頸壺であるが、子持ち器台の破片か。

43は奈良時代建物38の北西に隣り合うPit1893出土の甗である。把手は直線的にほぼ横方向につけられ、その断面は円形状である。体部には格子印きの後、一部カキ目が施されている。

第4節 飛鳥～奈良時代

飛鳥から奈良時代にかけての遺構には、建物、柵、道路状遺構、井戸、溝、密集型土坑および土坑、窯、河川、落ち込みがある。

1. 建物・柵・道路状遺構・Pit (図54～63、表3・4、写真図版21～29・78)

奈良時代の建物は図54にみるとおり、A・Bの両地区にまとまっている。それらの特徴は表3に記した。これら建物群については、第3章第8節3.において、建物間の重複関係、建物方向の検討によって、A～G群にグルーピングされている。ここでは建物、Pit他出土の遺物のみ記述する。

A群〔方位N-16°-E〕とされているのは、図55・56掲載の建物10・37、落ち込み8、溝55・87・88・90である。

建物10 (図55、写真図版21・22)は2A・3A・5Aトレンチにまたがって検出。建物のPit413からは須恵器の高台付き杯破片が1点(645)出土している。Ⅳ-2～3段階のものと思われる。その他には、Ⅱ-2～6段階の杯身、杯蓋、甗、器台などの破片が少々出土している。

建物37 (図55、写真図版22)は3A・2Bトレンチにまたがって検出。建物のPitからはⅡ-1～6段階の杯身、杯蓋、甗、高杯脚などが少量と、土師器の甗体部片が僅かに出土している。

建物10・37の東側に位置する、3Aトレンチで検出された道路状遺構の溝87・88・90 (図56・74、写真図版21・29)からは、Ⅲ～Ⅳ型式の須恵器が出土しており、Ⅱ型式のものも少々みられる。器種は杯身、杯蓋が主であるが、鉄鉢形土器、甗などもみられ、他には土師器、埴、平瓦の破片なども極僅かに出土している。

溝87 (図56)は3Aトレンチの南西に位置し、南北方向にのびる。遺物(図74)はⅡ-1からⅢ段階の須恵器少量と土師器が僅かに出土している。須恵器はⅡ-2～4段階の杯身、杯蓋が主である。土師器は甗が数点と、図化していないが、8世紀代の高台付きの杯が1点ある。777の杯身は土坑79出土破片と接合した、Ⅱ-3段階の杯身である。

溝88 (図56)は溝87の東側に平行してのびる。出土遺物(図74)はⅡ-1～Ⅳ-2段階のものが少量と、土師器の鍋破片が1点出土している。778、779はⅢ-3～Ⅳ-2段階の杯身である。

溝90 (図56)は溝88の北側に連続して続くかのように南北にのびる。出土遺物(図74)はⅡ-2～Ⅳ-2段階のものが若干あり、Ⅱ-2～4とⅢ-3～Ⅳ-2段階のものが目立つ。780～783はⅢ-3～Ⅳ-2段階の杯身と鉄鉢である。786は土師器高杯の杯部破片で、平城宮Ⅱ期に属すると思われるものである。784、785は土師器甗で、784の甗は口縁端部が上方に極僅かに肥厚し、外面には縦方向のハケ目、内面には縦方向のナデが施されている。785の甗は口縁端部が上方に肥厚し、外面にハケ目、内面に斜め方向の削り後ナデが施されている。

落ち込み8 (写真図版21・22)は2Aトレンチで検出。ここからはⅡ型式の杯身か杯蓋か不明の細片と、甗?体部細片が出土している。

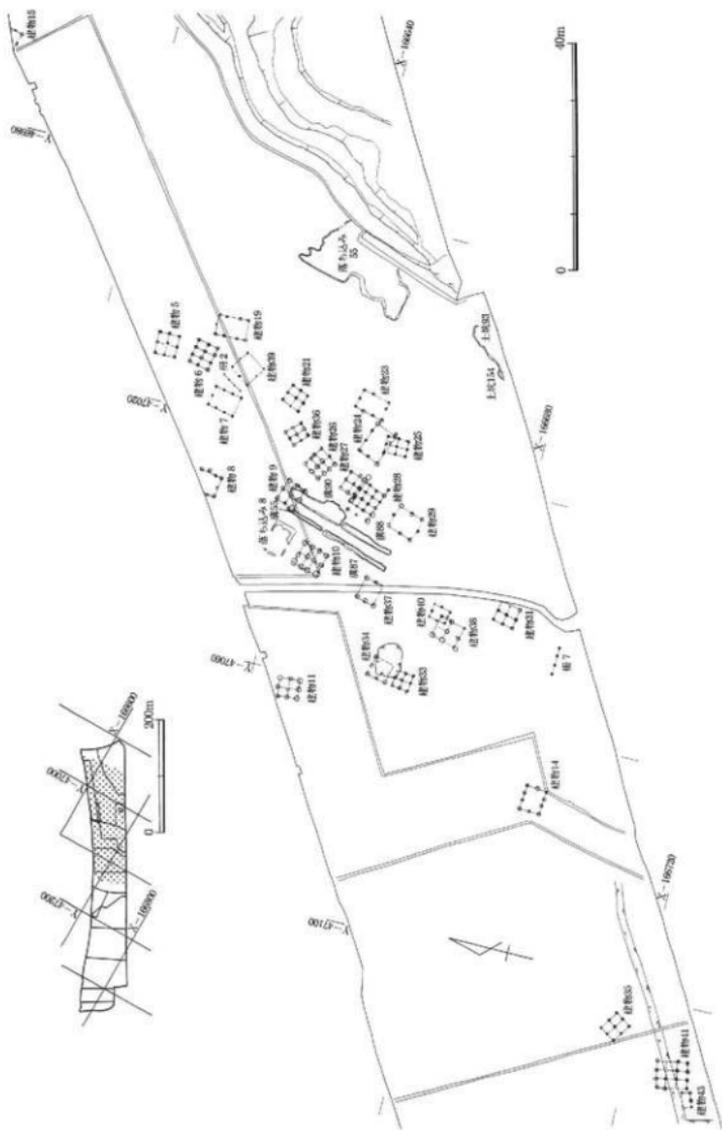


図54 奈良時代建物群

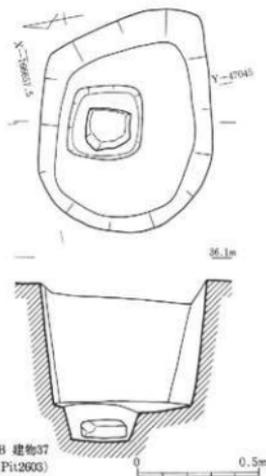
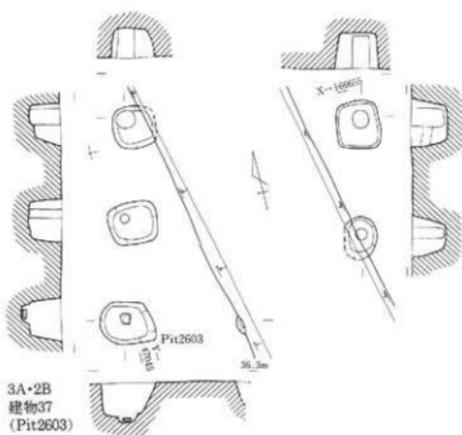
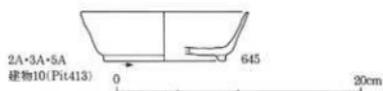
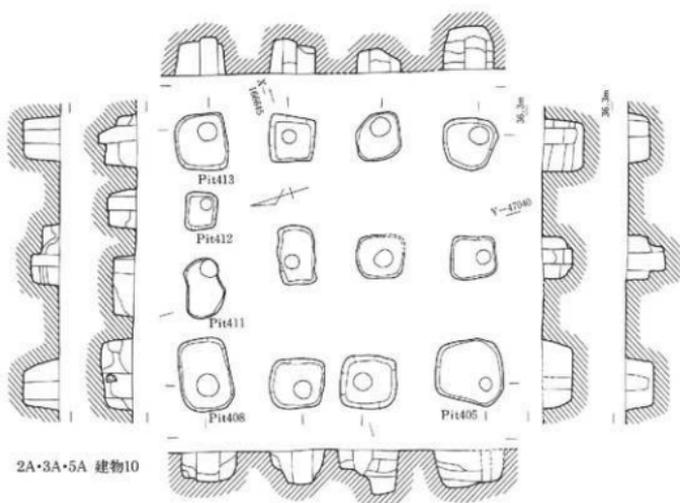


図55 建物10, 37, 建物37(Pit2603)平・断面図および出土遺物

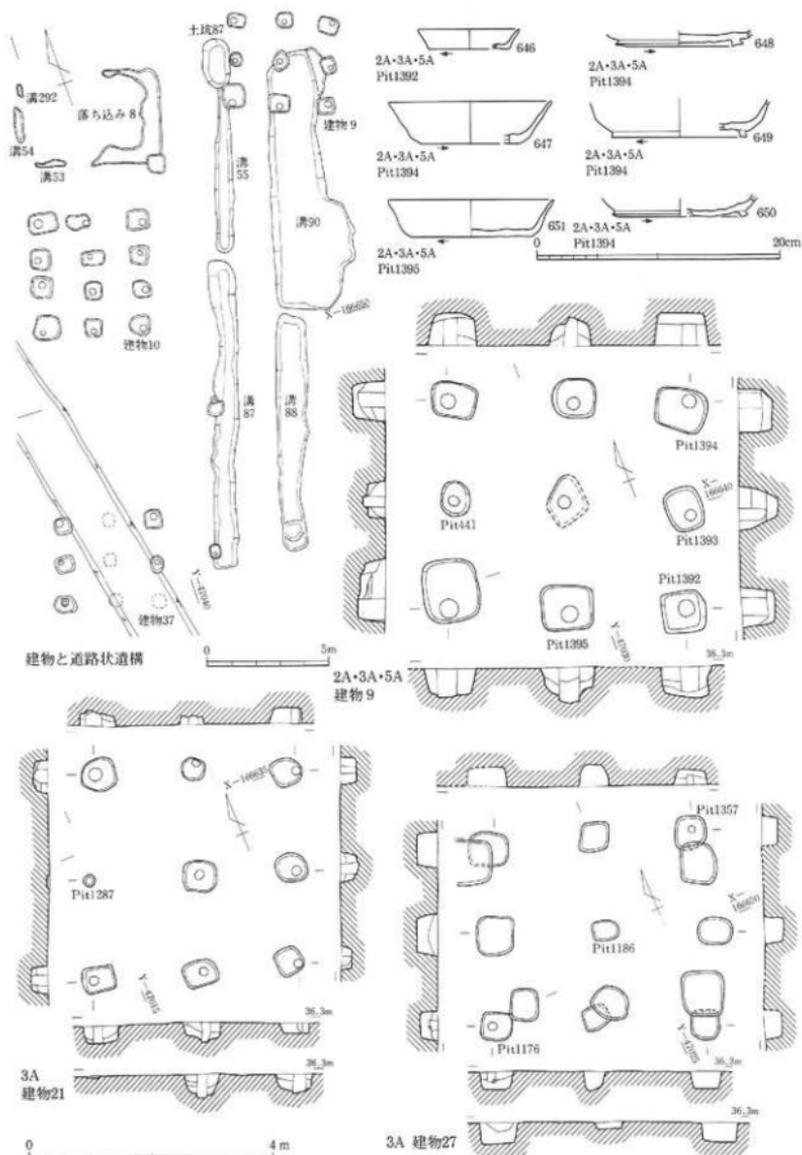


図56 建物・道路状遺構平面図、建物9, 21, 27平・断面図および出土遺物

B群〔方位N-22°-E〕とされているのは、図56の建物21・27である。

建物21（図56、写真図版23）は3Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-5～6段階の杯身、杯蓋や時期不明の甕？体部細片が僅かに出土している。

建物27（図56、写真図版23）は3Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-1～6段階の杯身、杯蓋や時期不明の甕？体部細片、器台細片などが少量出土している。

C群〔方位N-20°-E〕とされているのは、図56～58の建物9・24・28・29である。

建物9（図56、写真図版23）は2A・3A・5Aトレンチで検出。建物のPit1392からは須恵器の杯身（646）が、Pit1394からは杯身の高台のあるもの、無いもの両方の杯身（647～650）が、Pit1395からは杯身が1点出土している。いずれもⅢ-2～3段階のものが。その他、建物9からはⅡ-1～6段階の杯身、杯蓋、高杯脚、甕、有蓋壺、器台細片などが少量出土しており、土師器では甕や埴の細片が僅かにみられる。

建物28（図57、写真図版23・24）は3Aトレンチで検出。建物のPit1123からは須恵器杯身（652）と土師器杯（653）が出土しており、653は暗文がみられる。Ⅲ-3～Ⅳ-1段階に属すると思われる。建物28のPitからは、これら以外に、Ⅱ-2～6段階の須恵器の主に杯身、杯蓋などの破片が少々と、土師器の細片が極少量出土している。

建物24（図57、写真図版24）は3Aトレンチで検出。建物のPit1225からは須恵器杯身（654）が出土しており、高台付きの可能性がある。時期はⅢ～Ⅳ段階のいつかは不明である。その他のPitからはⅡ-4～Ⅲ-1段階の杯身、杯蓋、甕？体部細片が少量出土している。

建物29（図58、写真図版24）は3Aトレンチで検出。建物のPit1129からは土師器甕（655）の口縁部細片が1点出土している。その他のPitからはⅡ-1～6段階の杯身、杯蓋、甕？体部破片などが少量と、土師器細片が僅かに出土している。

D群〔方位N-1°-E〕とされているのは、図58・59の建物5・19・25、柵7である。

建物5（図58、写真図版24・25）は2Aトレンチで検出。建物のPitからはⅠ-5～Ⅱ-1段階の高杯脚部破片1点と土師器の細片が1点出土している。

建物19（図58、写真図版25）は2A・3Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-6～Ⅲ-1段階の杯身、杯蓋、高杯脚細片、甕、甕？体部細片が少量と、土師器が極僅かに出土している。

建物25（図59、写真図版25）は3Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-2～6段階の杯身、杯蓋、無蓋高杯細片、甕体部破片、甕？体部破片などが少量出土している。

柵7（図58、写真図版25）は2Bトレンチで検出。PitからはⅡ-2段階の杯蓋、体部細片などが極僅かに出土している。

E群〔方位N-12°-E〕とされているのは、図59・60の建物6・7・8・23・31・40である。

建物6（図59、写真図版24・25）は2Aトレンチで検出。建物のPitからはⅠ-5かと思われる高杯脚細片が1点と、Ⅱ-2～5段階の杯身、杯蓋を主とし、甕？体部破片などが少量出土している。時期は不明だが、須恵器の耳付き壺の肩部破片が1点みられる。

建物7（図59、写真図版24・26）は2Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-1～4段階かと思われる杯身、甕肩部破片、甕？体部破片、高杯脚部破片が僅かに出土している。

建物8（図59、写真図版26）は2Aトレンチで検出。建物のPitからはⅡ-2～6段階の杯身、杯蓋細片が僅かに出土している。

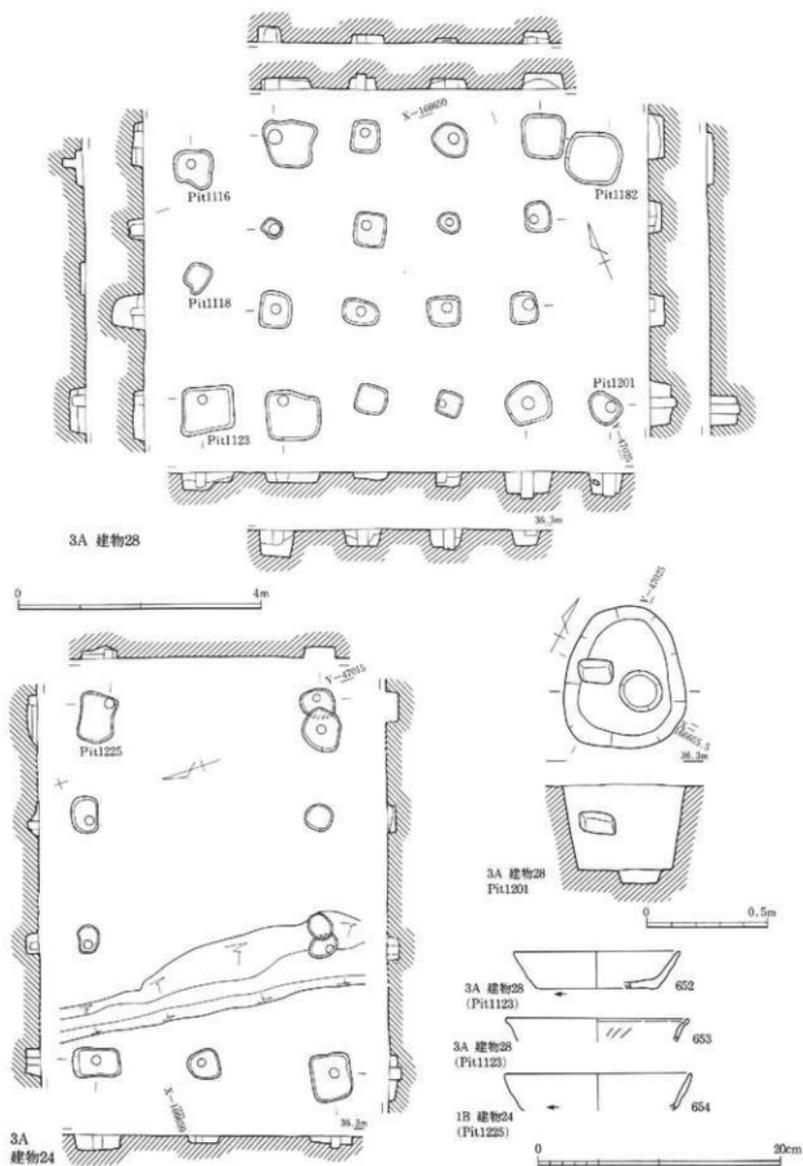


図57 建物24, 28, 建物28(Pit1201)平・断面図および出土遺物

建物23 (図60、写真図版26) は3Aトレンチで検出。建物のPitからはII型式の蓋細片と甕? 体部細片が出土している。

建物31 (図60、写真図版27) は2Bトレンチで検出。建物のPitからはII-2~6段階の杯身、杯蓋を主として、脚部破片1点、壺、甕? の体部破片などを少量と、III~IV型式と思われる壺の体部細片を出土している。他に、土師器の甕かと思われる細片と、籬羽口1点を出土している。

建物40 (図59、写真図版26) は2Bトレンチで検出。建物のPitからはII-1~2段階の杯身、杯蓋以外に、甕? 体部細片などが僅かに出土している。

F群 [方位N-15°-E] とされているのは図60の建物34・38である。

建物34 (図60、写真図版27) は2Bトレンチで検出。建物のPitからはII-4~6段階の杯身が1点と、II-6段階と思われる頸部細片が1点、他に時期は不明だが、甕? の体部細片が少量出土している。

建物38 (図60、写真図版27) は2Bトレンチで検出。建物のPitからはII-1~6段階の杯身、杯蓋を主として、無蓋高杯、高杯脚細片、体部破片などが少量出土している。その他、土師器の甕頸部細片、高杯脚部細片などが僅かに出土している。

G群 [方位N-32°-E] とされているのは図61の建物39・26・35、柵2である。

建物39 (図61) は2A・3Aトレンチで検出。建物のPitからはI-5段階かと思われる高杯脚部破片が1点出土しているのみである。

建物26 (図61、写真図版27) は3Aトレンチで検出。建物のPitからはII-2~6段階の杯身、杯蓋が主で、他に有蓋高杯1点と時期は不明だが器台脚部細片1点、壺、甕? 体部細片が少々出土している。土師器では甕の細片などが極僅かに出土している。

建物35 (図61、写真図版27) は3Bトレンチで検出。建物のPitおよび柵2のPitからは遺物が出土していない。

その他の建物の出土遺物について、以下記述する。

建物15 (写真図版27) は3Aトレンチで検出。建物のPitからは遺物は出土していない。

建物36 (図62、写真図版28) は3Aトレンチで検出。建物のPitからはII-2~6段階の杯身、杯蓋少々と、高杯脚破片、甕体部細片1点、甕? 体部細片少々を出土している。他には土師器の細片が僅かにみられる。

建物11 (図62、写真図版28) は1Bトレンチで検出。建物のPitからはII-1~4段階の杯身、杯蓋を主に、他には有蓋壺頸部破片1点、甕? 体部破片少々を出土している。土師器は細片が1点だけみられる。

建物33 (図62、写真図版27・28) は2Bトレンチで検出。建物のPit1940・1941出土の須恵器の甕(657) は体部外面にカキ目を施し、把手断面は楕円形状で上端部には筋が1条刻まれている。焼成は不良である。建物33のPitからはII-2~3段階の杯身、杯蓋が数点と、壺の脚台かと思われる細片1点、甕? 体部細片が数点みられる。

建物14 (図63、写真図版28) は1Bトレンチで検出。建物のPitからはII-2~4段階の杯身、杯蓋を主に、他には無蓋高杯の杯底部破片1点、不明脚破片1点、甕1点、甕? 体部破片少々が出土している。

建物41 (図63、写真図版28) は4Bトレンチで検出。建物のPitからは遺物が出土していない。

建物43 (図62、写真図版28) は4Bトレンチで検出。建物のPitからは時期不明の須恵器甕? 体部細片1点と、土師器細片1点、焼土塊細片1点が出土している。

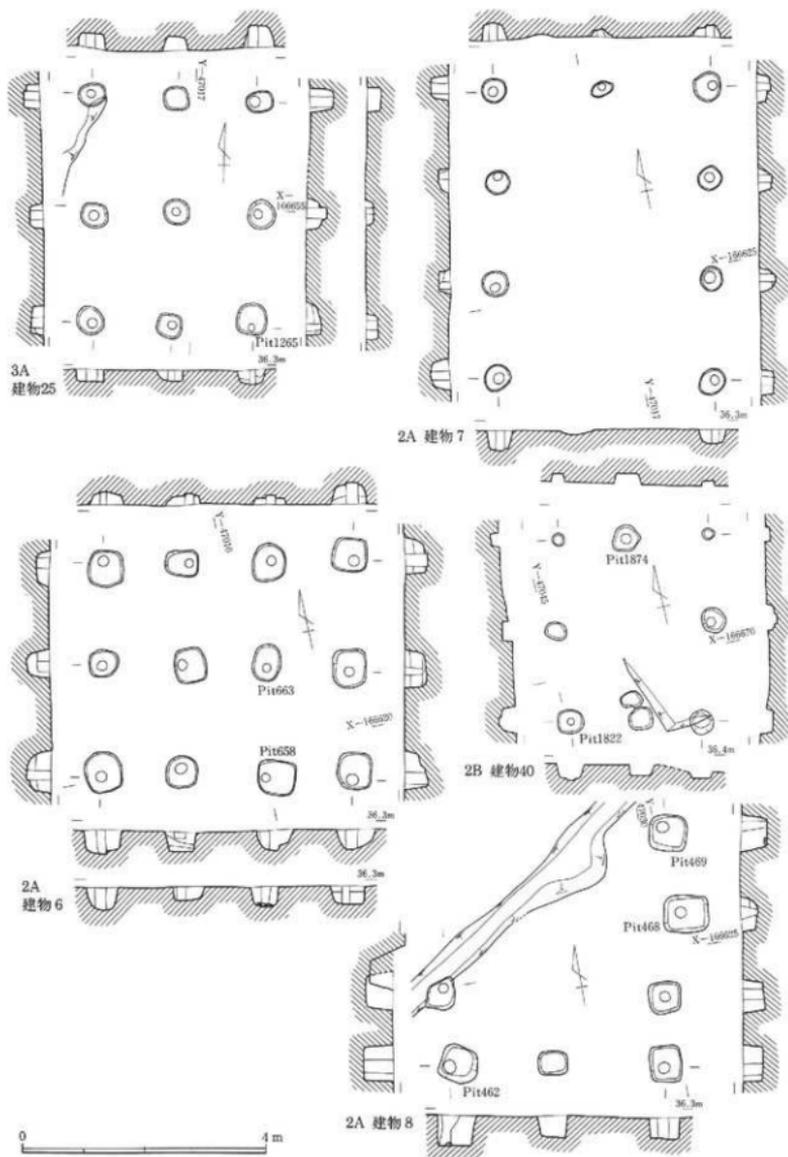


图59 建物5, 6, 7, 8, 40平·断面図

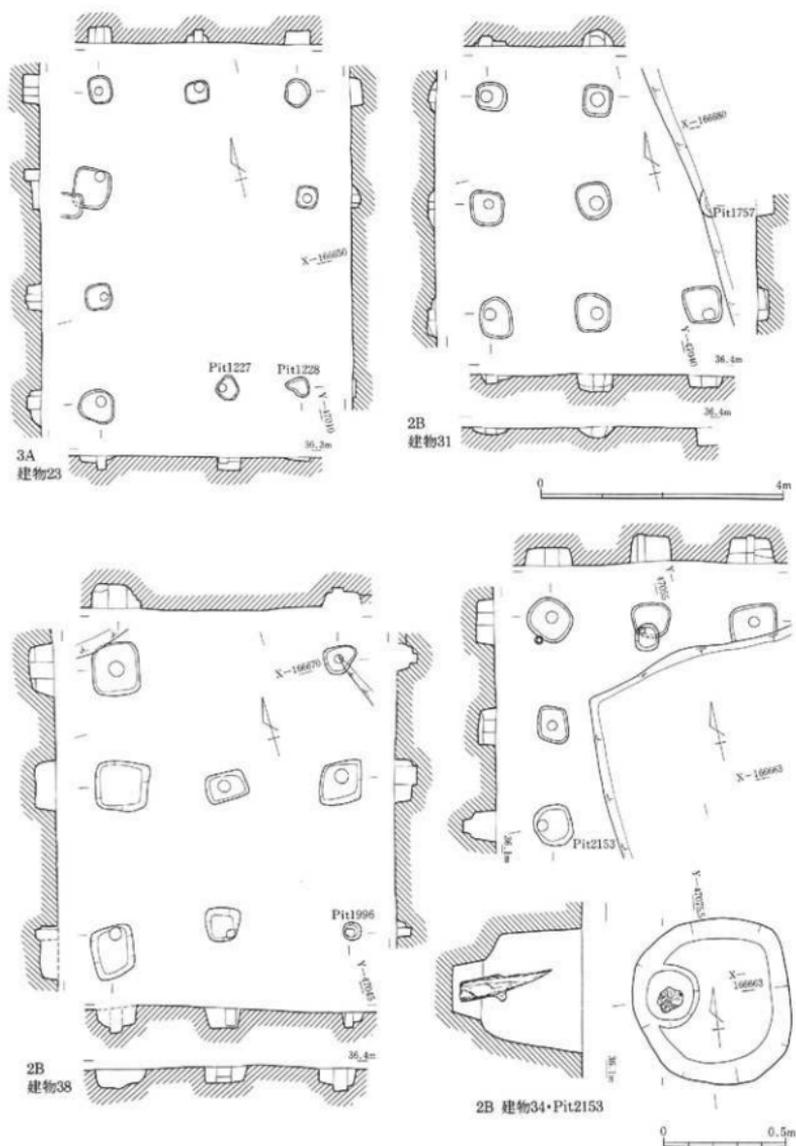


図60 建物23, 31, 34, 38, 建物34(Pit2153)平・断面図

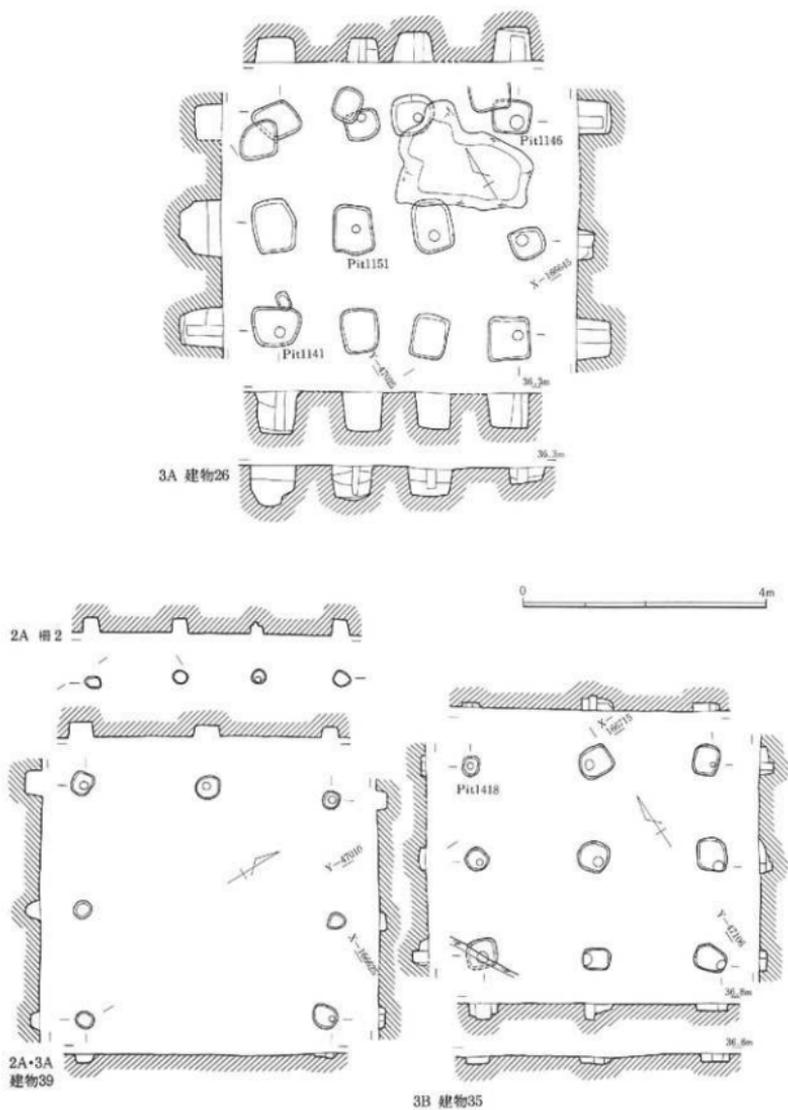


图61 建物26, 35, 39、冊2平・断面図

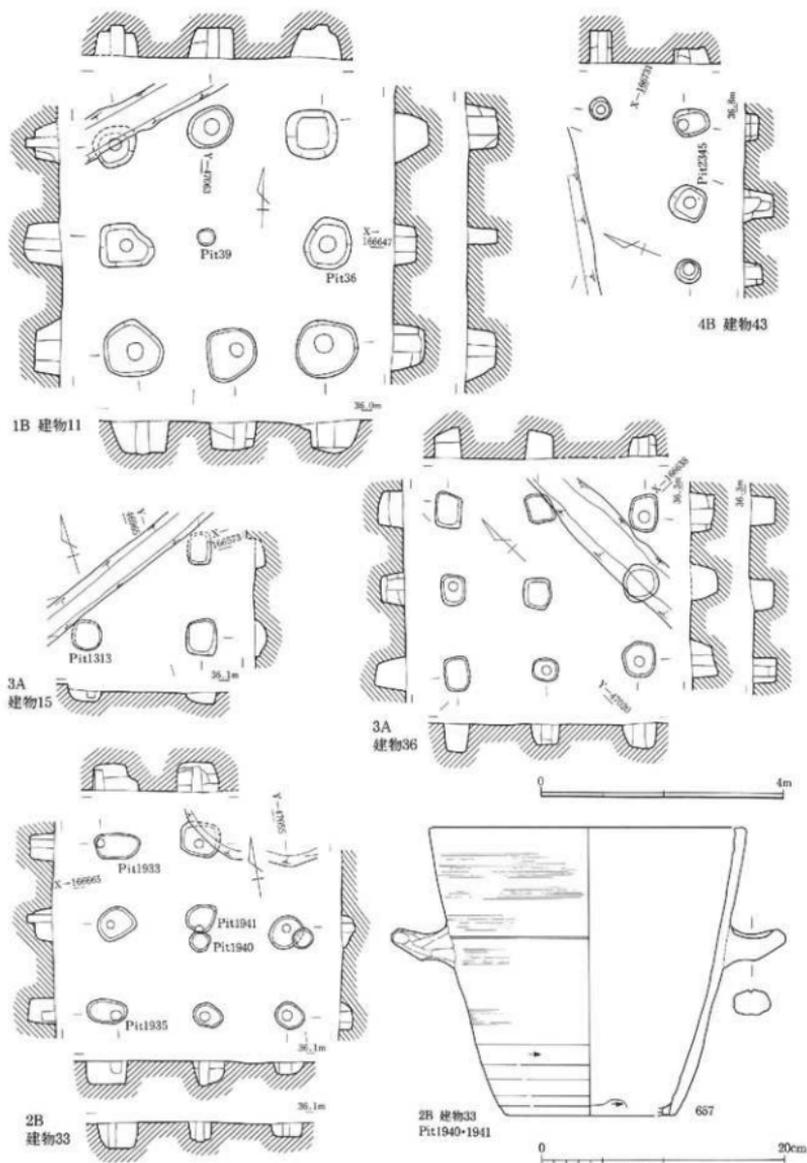


図62 建物11, 15, 33, 36, 43平・断面図および出土遺物

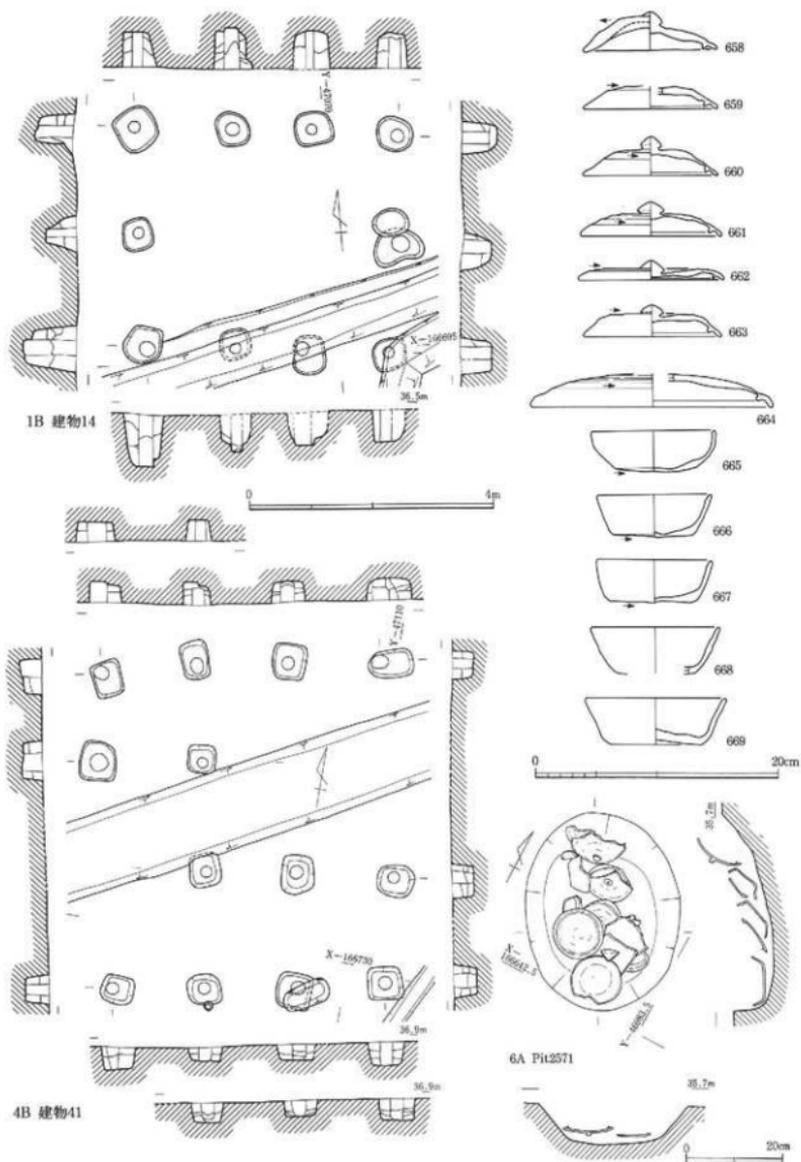


図63 建物14、41、Pit2571平・断面図および出土遺物

表3 奈良時代建物一覧表(1)

建物No.	1/27	規模(間口)	方位	柱間(m)	柱穴径(cm)	深さ(cm)	柱穴平面形	埋土	備考
5	2A	2×2	N-1°-E	北柱跡西~1.9, 1.9 南柱跡西~1.6, 1.94 西柱跡北~1.7, 1.8 東柱跡東~1.76, 1.74 中央柱西~2.1, 1.84	40~60	11~15	円形~方形に近	柱穴: 褐色色粘質土 柱礎: 明褐色粘質土	*柱礎直径14~16cm *pit47の柱礎埋土のみ22cm
6	2A	3×2	N-12°-E	北柱跡西~1.42, 1.34, 1.36 南柱跡西~1.3, 1.58, 1.42 西柱跡北~1.72, 1.82 東柱跡東~1.82, 1.78	46~66	10~40	隅円方形	柱穴: 灰黄色~黄褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*pit68, 663の範囲に平らな礫石 *柱礎直径14~18cm
7	2A	3×2	N-12°-E	北柱跡西~1.78, 1.82 南柱跡北5.4 西柱跡北~1.4, 1.32, 1.48 東柱跡東~1.5, 1.64, 1.68	38~50	14~30	円形~隅円形	柱穴: 灰黄色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱礎直径12~16cm
8	2A	3以上×2	N-12°-E	北柱跡西~1.75, 1.75 南柱跡北2.8 東柱跡北~1.4, 1.4, 1.18	40~72	28~52	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 暗い褐色粘質土	*pit462の柱礎範囲に礫石 *柱礎90の柱穴範囲に石2点 *柱礎直径18~22cm
9	2A・3A ・5A	2×2	N-20°-E	北柱跡西~2.02, 1.9 南柱跡西~1.96, 1.92 西柱跡北~1.64, 1.76 東柱跡北~1.86, 1.5	60~105	46~62	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱穴、柱礎色の建物より大 *pit441柱穴60×50cm、長さ36cmの隅円形 *柱礎直径20~30cm
10	2A・3A ・5A	3×2	N-16°-E	北柱跡西~1.92, 1.04, 1.2 南柱跡西~2.08, 2.0 西柱跡北~1.82, 1.0, 2.0 東柱跡北~1.34, 1.48, 1.5	70~110	40~70	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土(下層に明褐色粘質土ブロックを含む柱穴もあり) 柱礎: 褐色粘質土	*建物同様に柱穴、柱礎穴大 *柱礎直径24~30cm *pit412柱穴50×50cm、柱礎直径20cmと幾よろ小 *pit403柱礎内、pit405柱穴内から石
11	1B	2×2	N-5°-W	北柱跡西~1.6, 1.9 南柱跡西~1.68, 1.4 西柱跡北~1.68, 1.78 東柱跡北~1.6, 1.6	64~100	40~60	隅円方形~円形	柱穴: 褐色色砂質土 柱礎: 褐色色粘質土	*中央のpit39柱穴直径20cm、深さ48cmで他と全く違い小さい *pit39柱礎に石 *柱礎直径18~30cm
14	1B	3×2	N-6°-E	北柱跡西~1.5, 1.26, 1.42 南柱跡西~1.46, 1.08, 1.4 西柱跡北~1.74, 1.9 東柱跡北~1.76, 1.78	50~70	50~84	隅円方形~円形	柱穴: 灰白色~灰黄色砂質土 柱礎: 灰白色砂質土	*柱礎直径20~28cm
15	3A	1以上×1以上	N-16°-E	東柱跡北5 南柱跡北1.9	40~60	20	方形	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱礎は西側のpit1313のみ *柱礎直径14cm
19	2A・3A	3×2	N-1°-E	北柱跡西~1.7, 1.86 南柱跡西~1.5, 1.8 西柱跡北~1.6, 2.2, 1.6 東柱跡北~1.4, 2.4, 1.6	30~60	10~30	隅円方形	柱穴: 灰白~黄褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱穴に灰白~黄褐色粘質土 *柱礎直径14~18cm
21	3A	2×2	N-22°-E	北柱跡西~1.16, 1.64 南柱跡西~1.6, 1.56 西柱跡北~1.74, 1.66 東柱跡北~1.64, 1.52	40~66	18~36	隅円方形~円形	柱穴: 褐色粘質土その下層に明褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*pit1287のみ柱穴直径20cm、深さ4cmと小さい *柱礎直径12~22cm
23	3A	3×2	N-12°-E	北柱跡西~1.64, 1.5 南柱跡西~2.0, 1.3 西柱跡北~1.4, 1.98, 1.72 東柱跡北~1.74, 3.1	36~66	16~28	隅円方形	柱穴: 灰黄色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱礎直径12~18cm
24	3A	3×2	N-20°-E	北柱跡西~1.9, 2.02, .196 南柱跡西~2.06, 2.2, 1.9 西柱跡北~1.74, 2.14 東柱跡北4	30~78	12~22	隅円方形 円形に近いものもあり	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 暗い褐色粘質土	*柱礎直径14~18cm
25	3A	2×2	N-1°-E	北柱跡西~1.34, 1.34 南柱跡西~1.3, 1.3 西柱跡北~2.0, 1.78 東柱跡北~1.84, 1.88	36~60	12~24	円形に近い隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 灰黄色砂質土	*pit1256のみ上層に、灰白~黄褐色粘質土 *柱礎直径14~20cm
26	3A	3×2	N-33°-E	北柱跡西~1.24, 1.0, 1.6 南柱跡西~1.24, 1.3, 1.3 西柱跡北~1.8, 1.78 東柱跡北~1.96, 1.54	50~90	26~70	隅円長方形	柱穴: 褐色粘質土 (下層に明褐色粘質土の柱穴もあり) 柱礎: 今令暗い褐色粘質土	*pit1141, 1146, 1151の最下層に礫石より褐色粘質土 *柱礎直径14~26cm
27	3A	2×2	N-22°-E	北柱跡西~1.7, 1.7 南柱跡西~1.7, 1.7 西柱跡北~1.58, 1.58 東柱跡北~1.58, 1.58	48~66	26~36	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 (下層に明褐色粘質土の認められる柱穴もあり) 柱礎: 今令暗い褐色粘質土	*pit1186柱穴34×44cm、長さ12cmと小 *pit1176, 1357で柱礎確認 *pit1178柱礎最下層に礫石 *柱礎直径14cm
28	3A	3×3	N-20°-E	北柱跡西~1.48, 1.44, 1.4 南柱跡西側のpit11239-6 1.32, 1.32, 1.3, 1.4, 1.36 西柱跡北~1.5, 1.32, 1.5 東柱跡北~1.32, 1.38, 1.62	30~90	16~50	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 (下層に、灰白~黄褐色粘質土の柱穴もあり) 柱礎: 今令暗い褐色粘質土	*pit1265のみ上層に、灰白~黄褐色粘質土 *柱礎直径14~20cm
29	3A	2×2	N-20°-E	北柱跡西~2.2, 2.1 南柱跡西~2.1, 2.1 西柱跡北~2.14, 2.14 東柱跡北~2.1, 2.1	50~70	12~20	隅円方形	柱穴: 褐色粘質土 柱礎: 今令暗い褐色粘質土	*pit1128柱穴(30×44cm)の隅円 *柱礎直径16~20cm *pit1208柱礎内と隣りに約10cmの礫石3点
31	2B	2×2	N-12°-E	北柱跡北1.82 南柱跡西~1.76, 1.82 西柱跡北~1.78, 1.8	46~68	14~30	隅円方形	柱穴: 灰黄色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*柱礎直径12~22cm
33	2B	2×2	N-9°-E	北柱跡北5 南柱跡西~1.44, 1.34 西柱跡北~1.34, 1.48 東柱跡北4.4	40~74	20~48	隅円方形	柱穴: 灰黄色~灰黄色砂質土 柱礎: 灰黄色砂質土	*柱礎直径12~18cm
34	2B	2×2	N-15°-E	北柱跡西~1.48, 1.84 西柱跡北~1.76, 1.66	30~74	28~52	隅円方形	柱穴: 灰黄色~褐色粘質土 柱礎: 褐色粘質土	*pit2153の今令直径10cm長さ38cmの柱礎、柱礎の可能性 *柱礎直径16~20cm

表3 奈良時代建物一覧表(2)

建物No.	トレンチ	規模(間数)	方位	柱間(m)	柱穴直径(m)	深さ(m)	柱穴平面形	埋土	備考
35	3B	2×2	N-33°-E	北柱筋西~1.94, 2.02 南柱筋西~1.7, 2.2 西柱筋北~1.58, 1.54 東柱筋北~1.66, 1.62	28~54	12~28	隅円方形	柱穴: 土に近い黄褐色粘質土 柱底: 黄灰色粘質土	・北西隅のpH1418の634×38cmで覆物は小さい ・柱底直径10~20cm
36	3A	2×2	N-43°-E	北柱筋西~1.38, 1.1 南柱筋西~1.2, 1.2 西柱筋北~1.5, 1.5 東柱筋北~1.6, 1.6	42~60	34~50	隅円方形	柱穴: 灰黄褐色砂質土 柱底: 黄灰色粘質土	・柱底直径16~20cm
37	3A・2B	2×2	N-16°-E	北柱筋3.86 南柱筋西~1.62, 1.64 東柱筋1.88	56~80	54~60	隅円方形	柱穴: 土に近い黄褐色粘質土 柱底: 黄灰色粘質土	・pH2603は柱穴内中央北寄りに深さ14cm掘り181×7cmの扁平な礎石を敷置 ・柱底直径16~34cm ・副柱建物の可能性
38	2B	2×2	N-16°-E	北柱筋3.62 南柱筋西~1.9, 1.94 西柱筋北~2.04, 2.3 東柱筋北~1.92, 2.58	50~80	28~40	隅円方形	柱穴: 黄灰色砂質土 柱底: 黄灰色粘質土	・pH1996のみ一辺30cmの小形の隅円方形の平面 ・柱底直径12~26cm
39	2A・3A	2×2	N-33°-E	北柱筋西~2.0, 1.6 南柱筋西~2.0, 1.8 西柱筋北~2.06, 2.0 東柱筋北~2.0, 2.0	26~40	10~40	円形から隅円方形	柱穴: 明褐色粘質土 柱底: 黄灰色粘質土	・柱底直径10~16cm
40	2B	2×2	N-12°-E	北柱筋西~1.12, 1.34 南柱筋西~1.23, 1.23 西柱筋北~1.46, 1.48 東柱筋北~1.44, 1.62	20~44	8~28	円形		・pH1822, 1874は隅円方形の平面 ・柱底直径12~16cm
41	4B	3×3	N-11°-W	北柱筋西~1.58, 1.48, 1.5 南柱筋西~1.52, 1.52, 1.44 西柱筋北~1.46, 3.72 東柱筋北~1.54, 1.72	46~66	26~34	隅円方形	柱穴: 黄褐色砂質土 柱底: 黄灰色粘質土	・柱底直径18~22cm
43	4B	2×1	N-22°-W	南柱筋西~1.08, 1.26 東柱筋1.38	36~60	20~50	隅円方形と円形	柱穴: 黄灰色砂質土 柱底: 黄灰色粘質土	・pH2346は柱穴抜き取りの遺 ・柱底直径14~22cm

表4 奈良時代櫛一覧表

埋No.	トレンチ	期数	方位	柱間(m)	柱穴直径(cm)	深さ(cm)	柱穴平面形	埋土	柱底直径(cm)
2	2A	3	N-32°-E	北~1.38, 1.26, 1.44	20~28	20~30	円形	柱穴: 土に近い黄褐色砂質土	10
7	2B	3	E-1°-S	西~1.6, 1.66, 1.42	38~46	14~42	隅円方形	柱穴: 土に近い黄褐色砂質土 柱底: 黄灰色粘質土	12~18

Pit2571(図63、写真図版29・79)は6AトレンチのTG228の北東方向に約8mの地点において検出された。長軸40cm、短軸31cm、深さ約8cmを測る。埋土は炭化物を含んだ灰黄褐色砂質土であり、杯身4点、杯蓋8点、高杯1点が一括で出土した。658は完形の杯蓋である。665~667の杯身は口縁部が一部欠損している。それら以外の杯身、杯蓋は残存状況が2/3未満である。杯身、杯蓋658~669のうち、生焼け2点(664、668)以外は全て焼け歪みがみられる。658・660~663、665~667は外面に灰をかぶり、659は内面に灰をかぶっている。665の杯身はII-6段階の杯蓋と区別がつかない、口縁部の内湾して立ち上がる形である。杯身の底部外面は底部不明の668を除いて、全て回転へら切り未調整であり、底部に粘土紐巻上げの痕跡を留める。杯蓋はIII-2~3段階、杯身はIII-1~3段階と思われる。

2. 井戸(図64、写真図版29・79)

井戸21は6Aトレンチの井戸22・23の北側約2.5m離れて位置する甕転用の井戸である。井戸は段丘の3段目を弧状にカットし、さらに段丘4段目の平坦な所を、円形状に掘り窪めて大形の甕を据えている。掘方は段状に掘られ、平面形は不整な円形を呈している。上端部径2.8m、深さ(最大)0.8m、基底部径0.6mを測る。

甕は焼け歪んだ底部に、口頸部を打ち欠いている。また、別個体の大甕の体・底部破片を用い、体部周囲に立てて置き、あたかも基底部の孔を埋めるかのようにして、押さえ貼り付けられている。体部径0.8m、器高0.7mを測る。

遺物(図64)は、残存状態の良い杯蓋と杯身計8点が出土している。杯身の全ては口縁部を上に向

けられていた。670・671はかえりのある杯蓋で、671はかえりが口縁端部寄りにつまみ出された形をなす。672～675は底部から体部にかけてなだらかで、口縁部が少し内湾して立ち上がる形で、Ⅱ-6段階の杯蓋と見分けがつかない。それに対し、676・677は底部から体部にかけて屈曲し、口縁部がやや逆ハの字状に開く。672～677の杯身底部は全て回転ヘラ切り未調整である。杯蓋はⅢ-2～3段階、杯身はⅢ-1～3段階に属すると思われる。670が1/2個体弱残存の破片、671～674が口縁部一部欠損、675～677は完形である。673、675、676の底部と677の口縁部にはひび割れが見られる。670、674～676の外面には重ね焼きの痕跡を留める。671の外内面には灰がかかっており、外面に著しい。673の内面には灰がかぶっている。

この他、須恵器口縁部破片としてⅡ-6杯蓋かⅢ-1杯身が4点、Ⅲ-1の杯身1点、提瓶1点と土師器甕口縁部1点、埴の破片2点が出土している。

678の大甕は外面を平行叩きの後、カキ目を肩部から体部中央にかけては主に横方向に、底部は縦方向に近い斜め方向のカキ目が施され、底部から体部中央にかけてはカキ目以外に、縦方向にのびるヘラ状のもので描かれたような沈線がみられる。内面には同心円文の当て具痕が残る。甕の口縁部を打ち欠いた破面は、摩ったか磨滅したかの様になめらかである。甕の底部は乾燥段階でひび割れし、外内でも特に外面側に多く粘土を貼り足して補修がなされている。

3. 溝 (図65～77、写真図版30・80～91・105・106)

飛鳥～奈良時代の溝は古墳時代の溝と同じく、A・B地区にみられる。

溝57 (図65～73、写真図版30・80～89・106) は2Aトレンチの南端寄りに、方位E-約10°-Sの東西方向にのび、北側に平行して位置する古墳時代の溝58を切る。溝57は東にいくにつれ、やや南に曲がっており、断続しながら約37m以上延びる。幅約0.8～1.0mを測るが、途中約2.0mの幅を有するところがある。断面は西側の肩が垂直気味におち、U字形を呈しながら東側では浅く緩やかにあがっていく。底部の埋土は地山に近い明黄褐色砂質土が堆積し、その上層に褐灰色系の砂質土がみられる。遺構から埋没時期は7世紀前葉から中葉と考えられていたが、今回の遺物整理において、若干時期が下るようである。

出土遺物は大量の杯身、杯蓋と、それに続いて多量の甕、少量の高杯、短頸壺、壺、平瓶、横瓶、埴瓶、甕、器台片、蛸壺、紡錘車、埴などがみられる。土師器は極少量だが杯、甕が出土している。出土遺物の時期はⅡ-2 (図66-688の杯蓋)～Ⅳ-1段階 (図67-727の鉄鉢)まで幅があり、その中で最も出土量の多い時期はⅡ-2～4段階である。Ⅲ～Ⅳ型式と思われるものを列記すると、図65-684の埴、図66-699、700のつまみ付き杯蓋、図67-725～727の鉢、738の長頸壺、図69-749、750の平瓶、図70-759の甕である。

図65-679の蛸壺は外面に別個体の溶着痕があり、把手部分の作り方に特徴がみられる (写真図版106)。この蛸壺は体部を先ず筒状につくり、上端部分に折曲げた粘土紐の両端を挿入し、上端部分を閉じて接合したものである。680の蛸壺には同上の痕跡は認められなかったが、把手接合部の内面に主に2方向から押し潰したような痕跡があり、同じ様な手法によるものかもしれない。図65-683の紡錘車は饅頭形にてづくねで形を整え、上・下および周縁を平坦にヘラで削り取って成形したものである。図65-681、682は土師器の杯、甕である。2点ともに表面が摩耗しており、詳細は不明である。図65-684はやや軟質の埴で、片面に指押さえの痕跡が若干多く認められる。図66-686～714の杯身、杯蓋、高杯蓋のうち、図66-698・703に横棒の間隔は異なるが、「キ」状のヘラ記号が認められた。また、つまみの

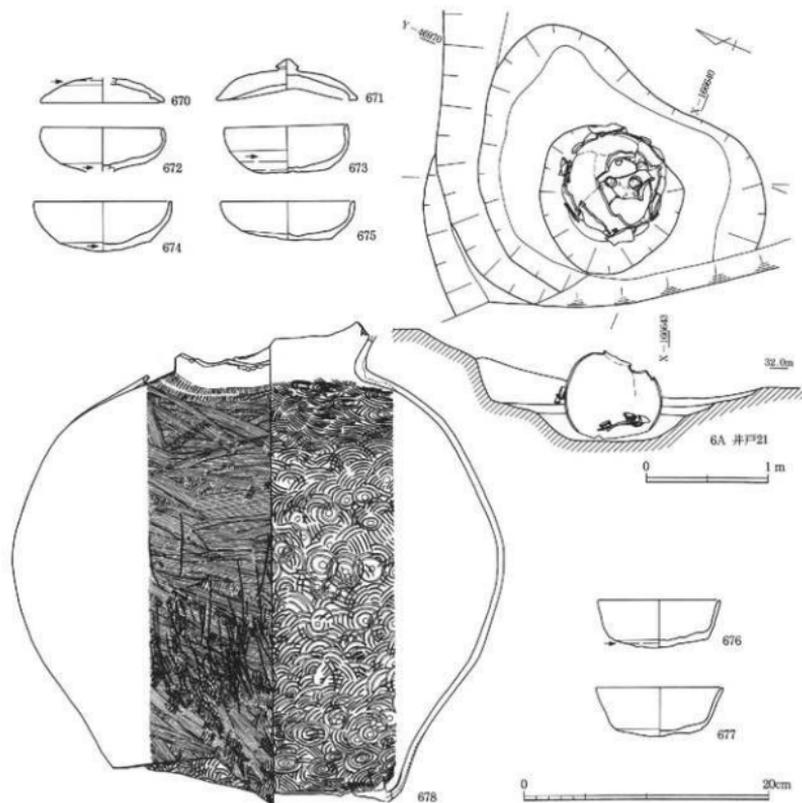


図64 井戸21平・断面図および出土遺物

欠損した高杯蓋(図66-685)は櫛描列点文が施文されている。図66-715~723は高杯および脚である。715の有蓋高杯の杯部外面には溶着痕がみられる。図67-724~727、729は鉢である。724の体部から口縁部にかけては焼け歪んでいる。図67-728は器台の口縁部破片と思われるものである。図67-732は装飾付き壺の甕部分が剥がれ落ちたもので、体部から底部にかけて接合の痕跡を留める。図67-730・731は甕の口縁部が欠損したものである。図67-733は壺蓋のつまみ部分が欠損したものである。図67-734~図68-742は壺である。735の短頸壺外面には蓋の溶着痕がみられる。736は台付き壺の体部破片である。737の壺底部外面にはヘラ記号がみられる。739~742は短頸壺を大形にしたような器形のもので、742は肩部3方に鉤状の把手がついている。図68-743、744は横瓶である。743の長胴の一端には約8 cmの孔を粘土板でふさいだ痕跡を残す。図69-745~747は甕瓶である。745、746は把手部分が半環状になっているが、747は退化して亀の手状をなす。747の体部には別個体の溶着がみられる。図69-748~750は平瓶で、748は口縁部破片と思われるものである。図69-751~図73-774は甕および壺である。壺は頸

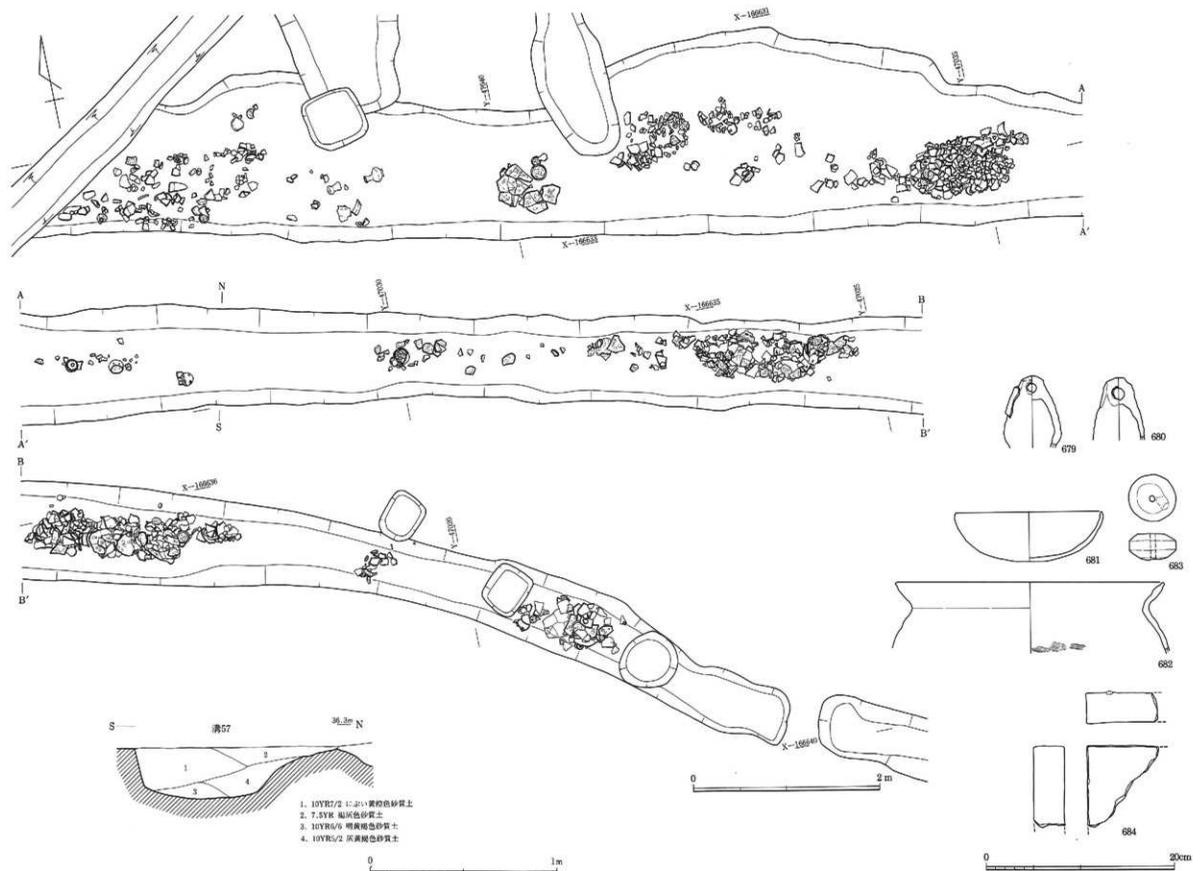


図65 溝57平・断面図および出土遺物

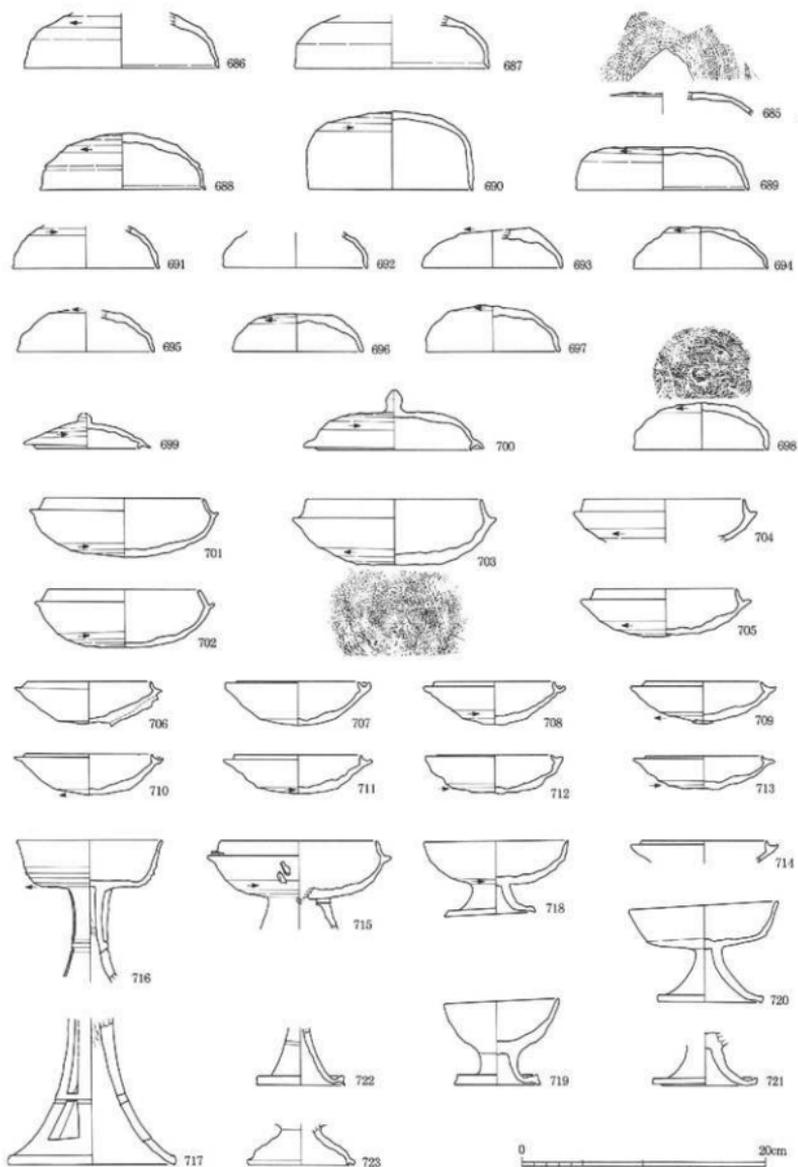


图66 溝57出土遺物

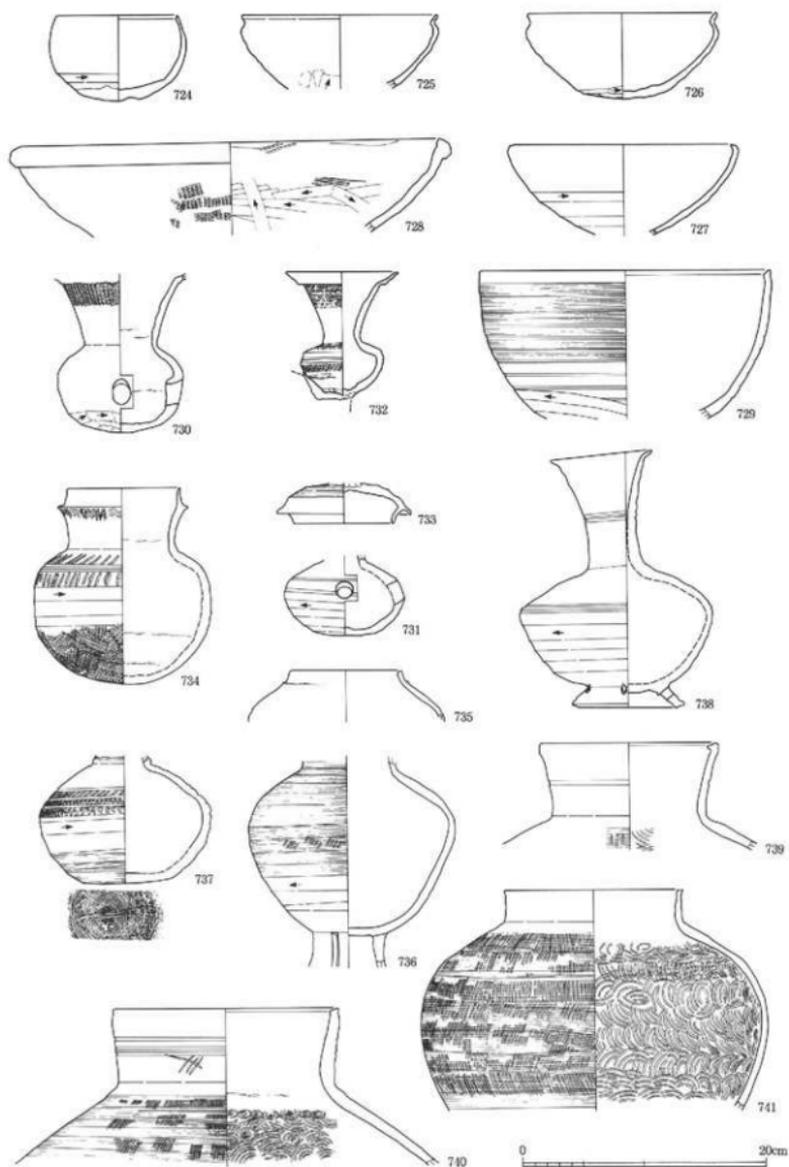
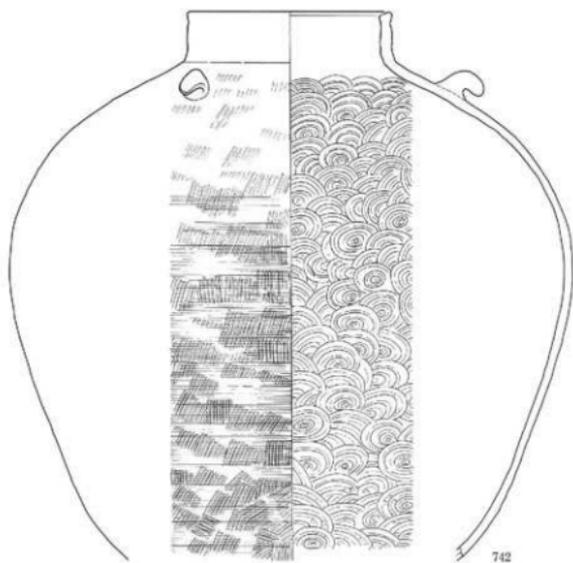
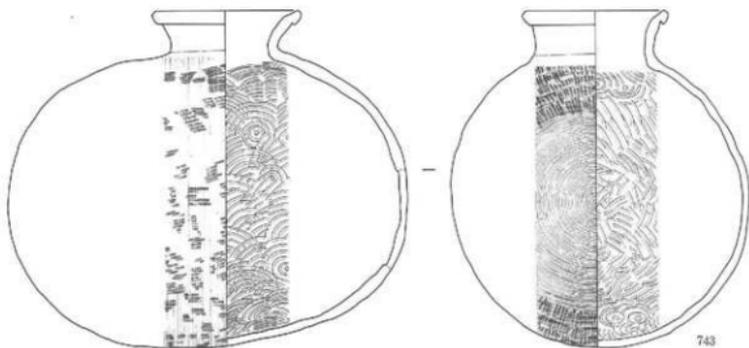


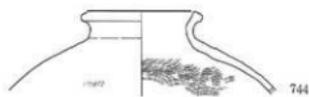
图67 满57出土遗物



742



743



744



图68 溝57出土遺物

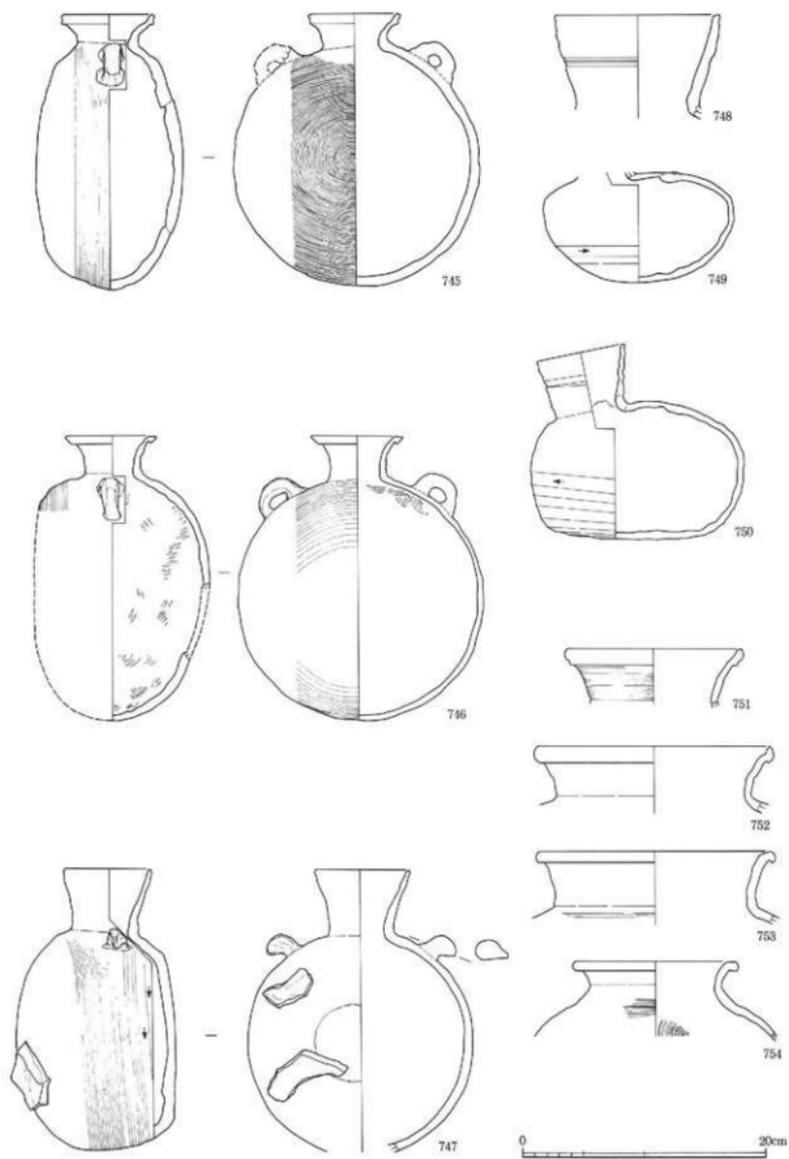


图69 清57出土遗物

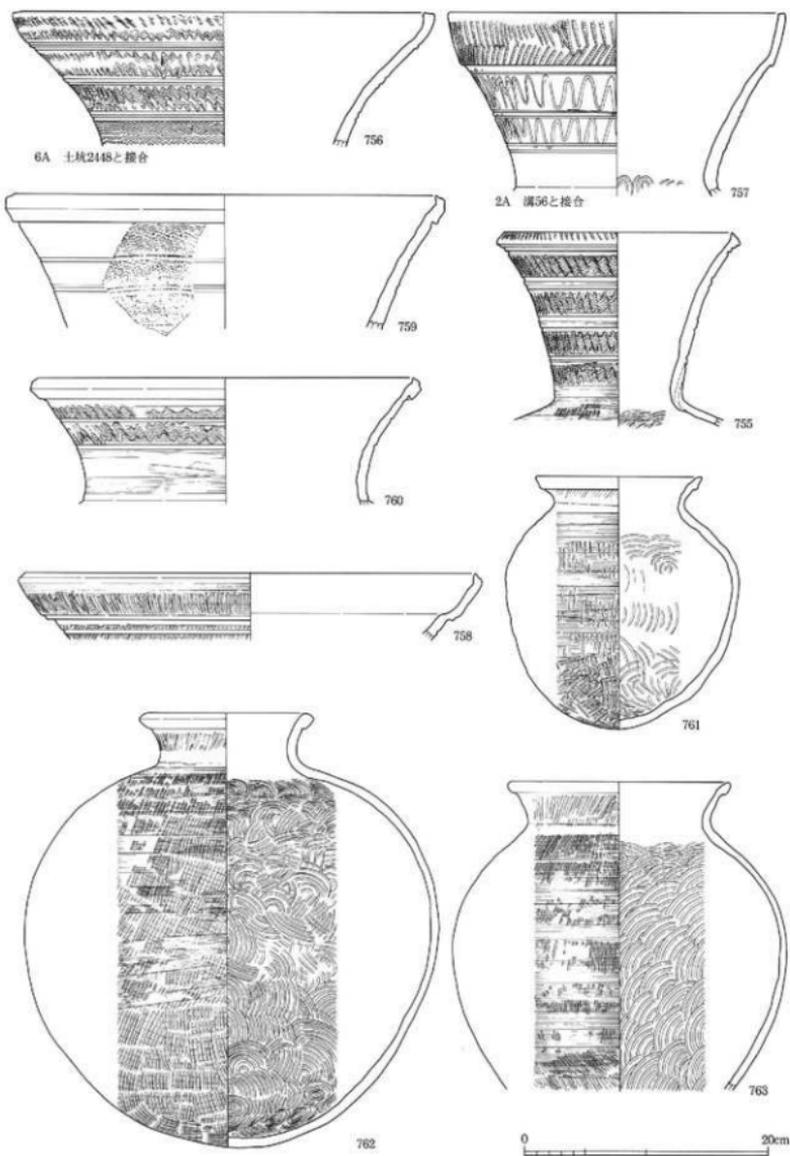
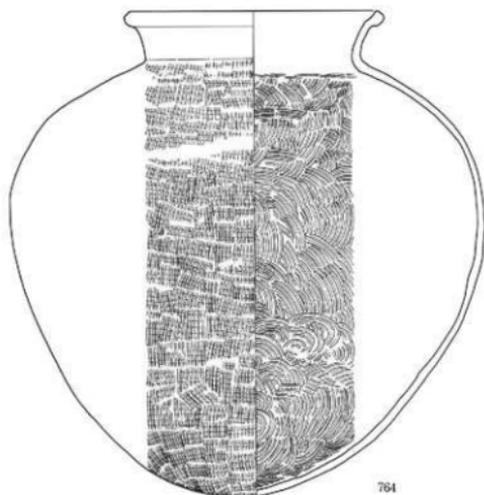
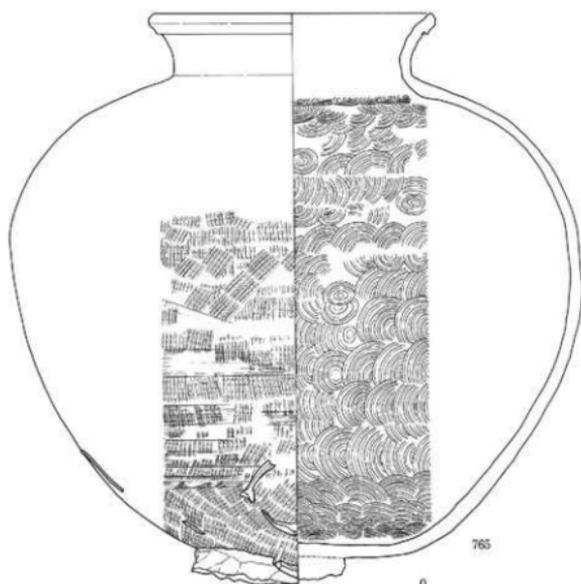


图70 溝57出土遺物



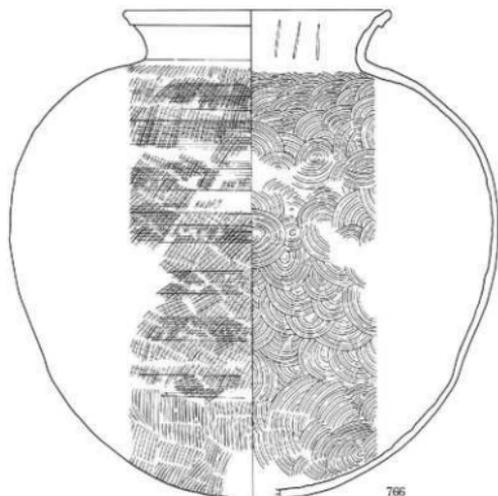
764



765

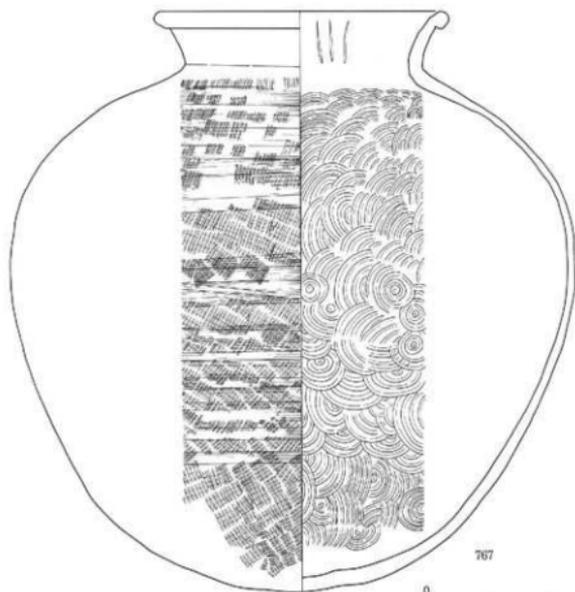
0 20cm

图71 满57出土遗物



2-3-5A 建物9 (Pt11393)と接合

766



767

0 20cm

図72 溝57出土遺物

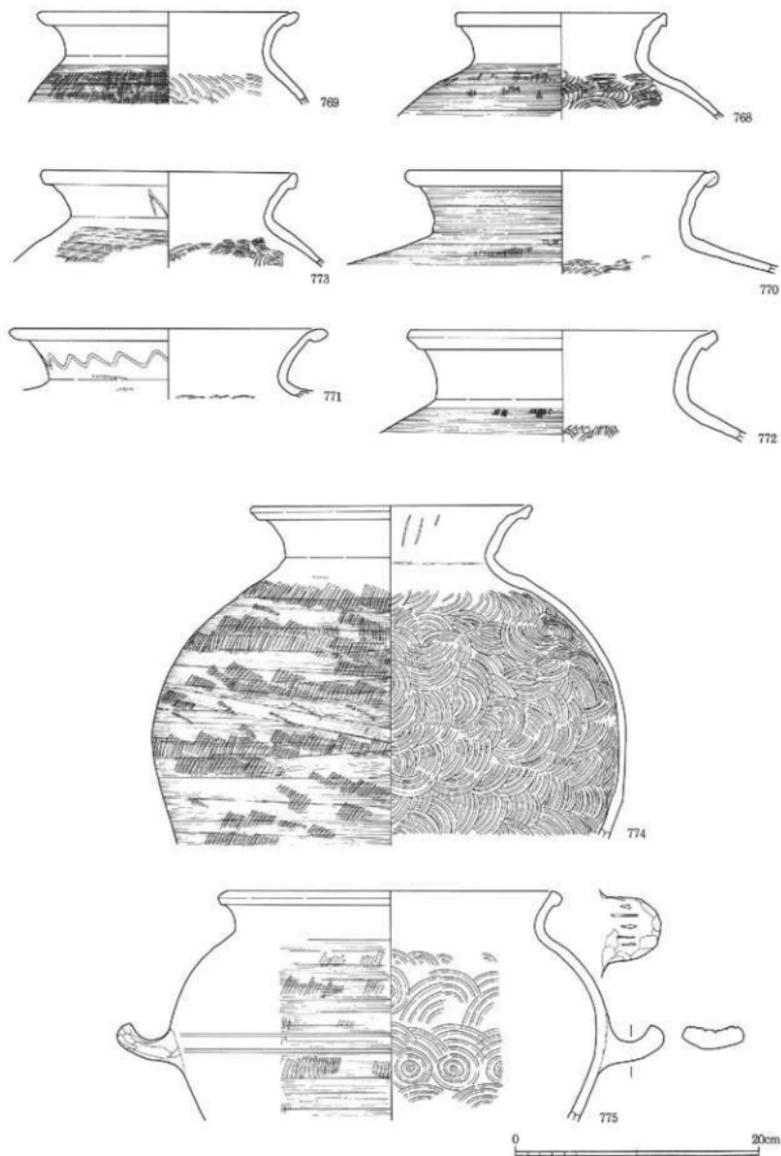


图73 满57出土遗物

部から口縁部にかけて斜め上方に広がり、口縁端部でやや内湾気味におわるものと、口縁端部を拡張したものがみられる。口縁部から頸部にかけて櫛描波状文、列点文、沈線文による装飾が見られる。図70-756は6AトレンチTG228北側の土坑2448出土破片と接合した。図70-757は溝57の南側にある溝56出土破片と接合した。甕は口縁端部が粘土折り返しによって断面形が円ないし楕円形状を呈する。図72-766、767（写真図版105）、図73-774の甕口縁部内面には「川」状、図73-773の甕口縁部外面には「フ」状のヘラ記号がみられる。図72-766は建物9（Pit1393）出土破片と接合した。図70-762の底部には直径12.2cmの重ね焼き痕が、図71-764の底部2ヶ所には直径14.4cm、14.1cmの重ね焼き痕がある。図71-765には底部3ヶ所に窯詰めの際の重ね焼き痕があり、そのうち2ヶ所は直径約14cmの重ね焼き痕である。図70-762、図71-764の口縁部にはひび割れがある。図73-775は焼成やや不良の把手付き鍋である。扁平な把手上面には5本の沈線がみられる。

溝56（図74）は溝57の南側に平行して走り、ほぼまっすぐに約15m伸び、東側の溝65とは一連の溝と考えられ、合わせれば約21mを測る。西端は2Aトレンチ端において南に浅く広がっているが、1B・2Bトレンチの溝17と連なるかは現水路による分断により不明確である。溝56の断面はU字形を呈しており、深さ0.1~0.2mを測り、褐灰色砂質土の埋土をもつ。遺物はII-1からIII-3段階の須恵器が出土しており、II-2~6段階の杯身、杯蓋に続いて甕の占める割合が高い。776はIII-3段階の杯身と思われるものである。

溝87・88・90出土遺物については1. 建物・柵・道路状遺構・Pitの項目で先に述べた。

溝85（図74、写真図版88・89）は3Aトレンチ中央付近東側で、6Aトレンチに近い位置に、北東-南西方向に延びる。出土遺物はII-2~IV-1段階の須恵器が少量と、土師器甕1点、埴1点がみられる。II-4~6段階の須恵器の占める割合が少々高い。787はIV-1の鉄鉢か。788はIV-1段階の長頸壺、789は同時期と思われる短頸壺で、体部上半に火傷がかかっている。790の甕口縁部内面には川の字状のヘラ記号がみられる。

溝14（図75）は1Bトレンチ中央よりやや北寄りに、ほぼ東西方向に走り、溝12・13・15と平行し、溝29および落ち込み4を切っている。出土遺物は須恵器のI-2からIII-2段階までと思われるものが少量出土している。器種はI-2?の短頸壺1点、I-4~5の杯身、杯蓋が各1点、I型式?の鉢1点、II-2?の無蓋高杯が1点、II-3~5の杯身細片が7点、II型式?の甕1点、III-2の高台付き杯身細片1点などが見られる。土師器は細片が僅かに認められた。791はII-4~5段階の杯身である。792は短脚で透かしの無い、II型式の高杯脚である。

溝1（図75-77、写真図版30・90・91）は1Bトレンチ中央部に南北方向に延びる。中央直線部分においてN-5°-Wの方位をもち、北約20mからやや東に湾曲する。幅は約1.0mを測り、検出中央部で1.5mを測るところもある。深さ約0.3m、埋土に褐灰色砂質土をみる。遺物は特に中央部X=166675m付近において集中してみられた。遺物は6世紀から7世紀前葉のものが出土している。須恵器ではI-4~5からIII-1段階のうち、II型式のものが多数を占める。土師器は甕1点と把手1点のみ出土である。図75-793は列点文を刻んだ蓋で、つまみが欠損している。794の高杯蓋内面には当て具痕が残る。795の杯蓋天井部外面には別個体の溶着痕がみられる。795~799、805~807はII-1~2段階に属すると思われるものである。798、800は回転ヘラ切り未調整であり、これらと801はII-5~6段階に属すると思われる。798は溝100出土破片と接合した。802は蓋のつまみ部分が剝落したものか。803、804はIII-1段階に属すると思われる。808、812は高杯脚部破片と思われるものである。809は小形の碗であ

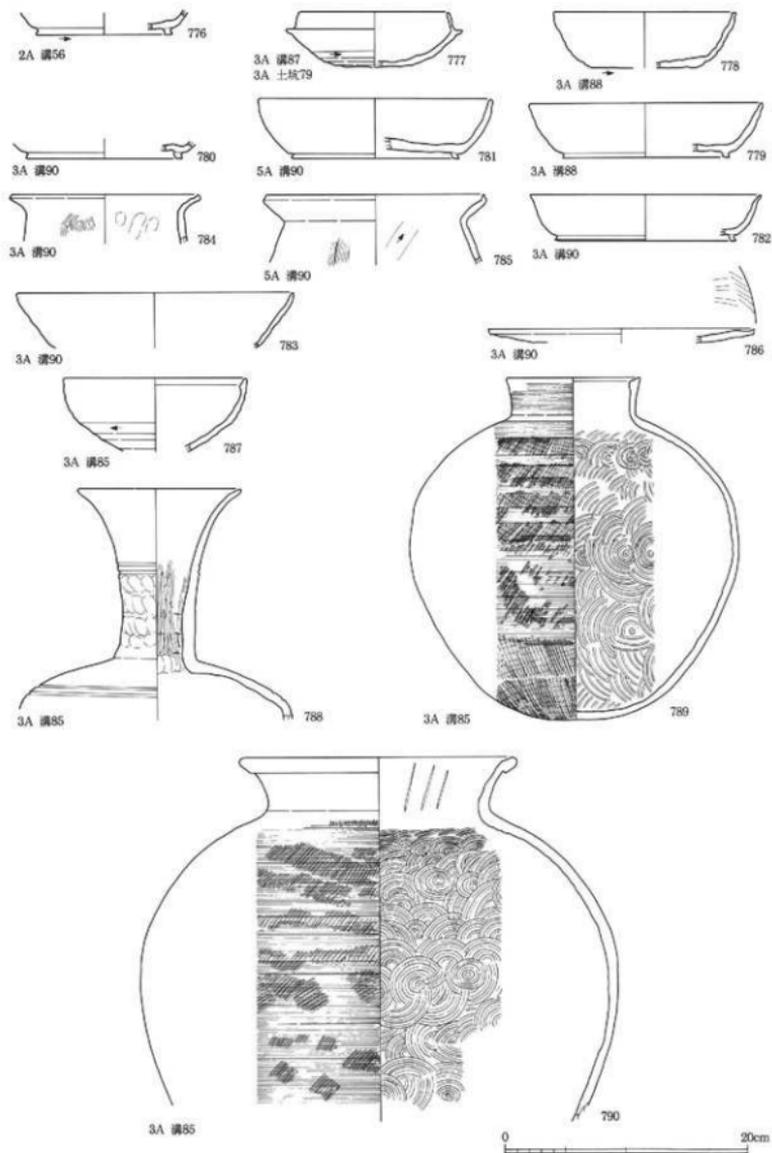


图74 溝56, 87, 88, 90, 85出土遺物

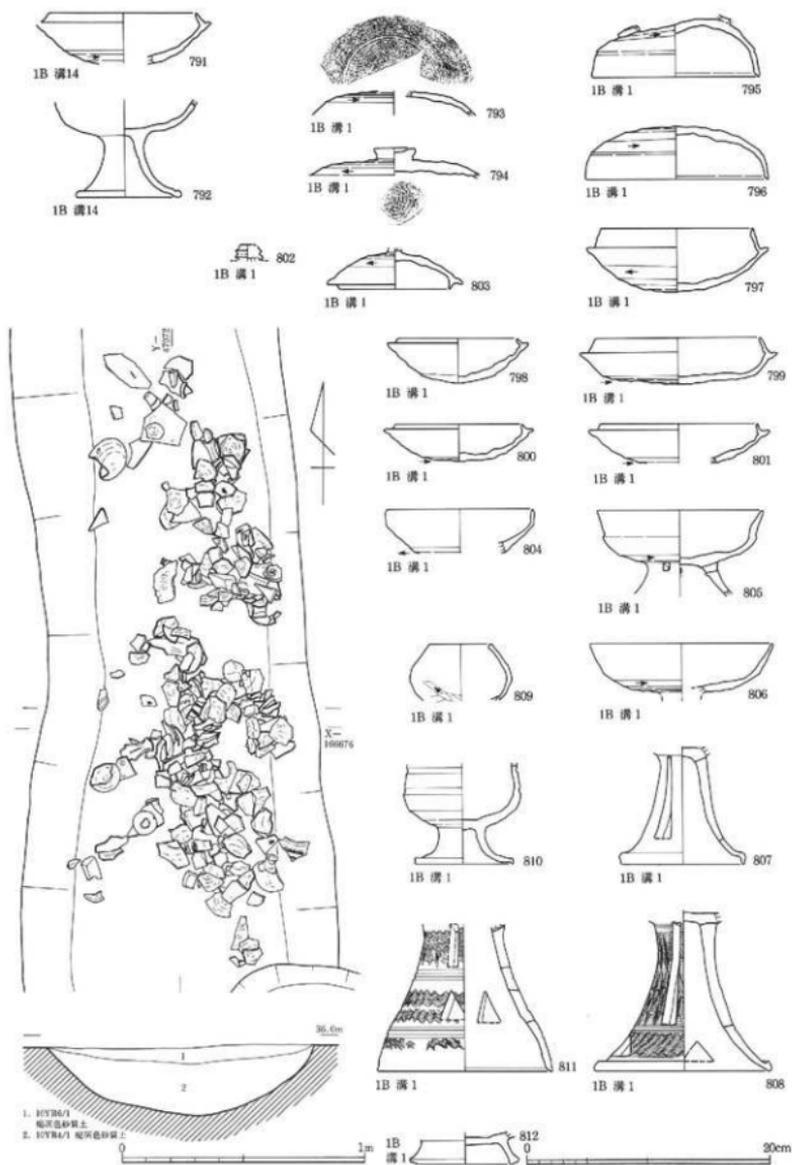


図75 溝1平・断面図および溝14,1出土遺物

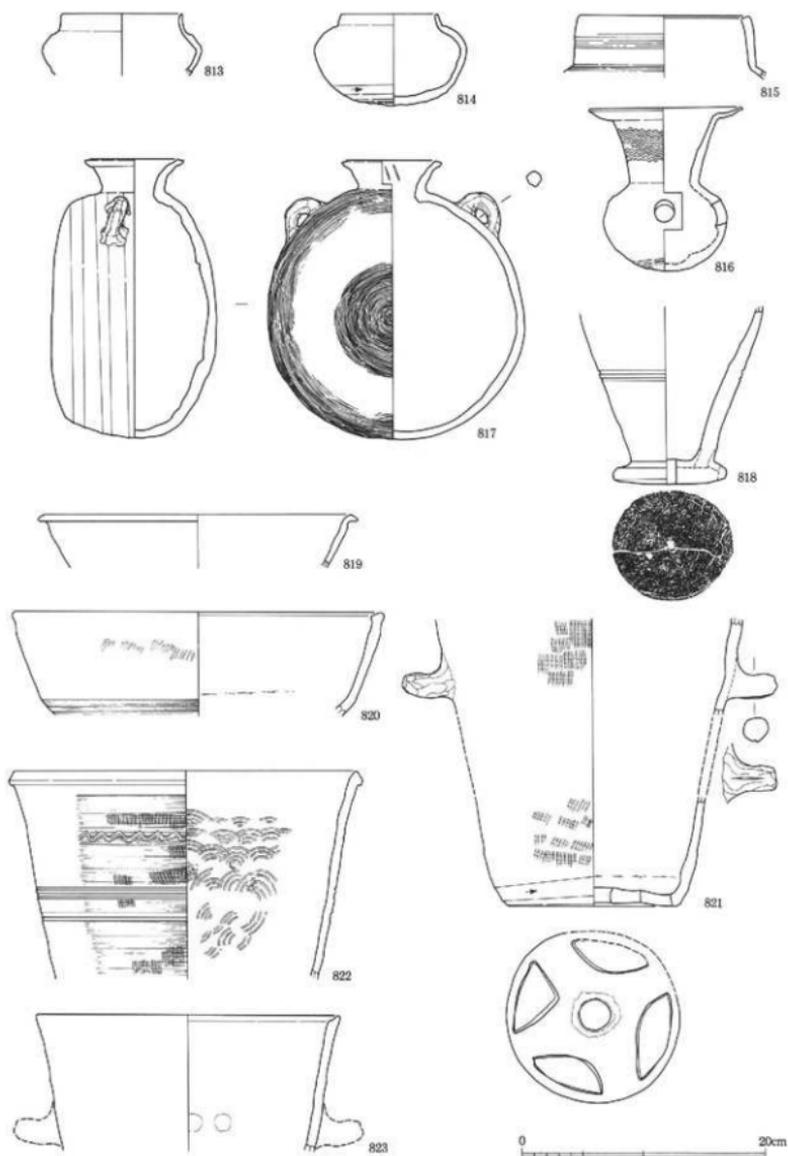


图76 溝1出土遺物

る。810は台付き碗の口縁部が欠損したのか。811は壺の脚台破片か。図76-813~815は短頸壺で、815の頸部にはカキ目が施されている。816はII-1~2段階の甕である。817は半環状に把手をつけた提瓶で、頸部内面に2本の平行する線が刻まれたヘラ記号を有する。818はすり鉢で、底部中央には直径約7mmの孔が焼成前に穿孔されており、底部外面の縁寄りの1/4には布目圧痕状の窪みがみられ、その他の底部外面は一定方向にヘラ削りが施されている。819、820は鉢か。821~823は甕破片である。821の把手下面には1条の沈線が引かれている。822の体部には平行叩きのちカキ目の後、太い沈線1条で波状文が描かれている。図77-824~831は甕である。827、828の頸部外面に「フ」状の、829の頸部内面に「川」状のヘラ記号がみられる。832は不明の体部破片で、内面の当て具痕は中心と中心から2番目の同心円との間に放射状に伸びる線がみられ、車輪状を呈する。833は鉢か不明の粗雑な作りの須恵器で、外面平行叩き、内面は指押さえの痕跡を留める。

溝96(図77、写真図版91)は2Bトレンチ中央部の溝101にほぼ平行して方位E-約40°-Sの東西方向にのびる。長さ18m、深さ0.1~0.3mを測り、断続的に溝209と連なる。埋土は灰黄色砂質土である。

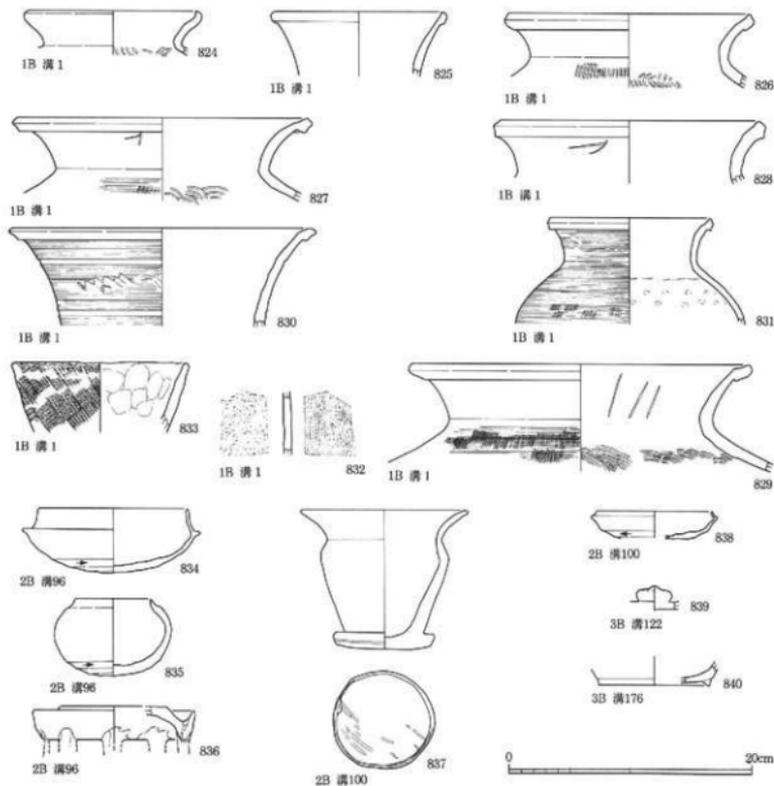


図77 溝1, 96, 100, 122, 176出土遺物

出土遺物はⅠ-3からⅢ~Ⅳ段階のものが若干みられる。中でもⅠ-5からⅡ-4段階の杯身、杯蓋が多い。834はⅠ-5~Ⅱ-1段階の杯身である。835は小形の短頸壺か。836は脚部の欠損した円面甕で陸部分は高く、使用によりその表面はなめらかである。

溝100(図77、写真図版91)は2Bトレンチ中央よりやや南寄りで、溝96を切る。出土遺物はⅠ-2~3からⅣ-1段階の須恵器のうち、Ⅱ型式の杯身、杯蓋の占める割合が高い。器種は他に、高杯、平瓶、甕、短頸壺、甕、甕、甕、器台破片などがある。838はⅡ-4段階の杯身か。受部から立ち上がりにかけて粘土を折り込んで作り出している。837は外反する口縁部をもつすり鉢である。底部周縁にヘラで1条の沈線が引かれている。底部外面にはヘラでなでた際ついたものか、同一方向に筋がみられる。このすり鉢の時期は底部の作り方から、Ⅲ~Ⅳ型式のものか。

溝122(図77)は3Bトレンチ西側に北東-南西方向に短くのびる。出土遺物は839の杯蓋つまみ1点である。擬宝珠の形をなし、Ⅲ型式のものと思われる。

溝176(図77)は3Bトレンチ北側で東西に短くのびる。出土遺物は840の杯身で、高台部分の特徴から、Ⅳ-3~4段階のものか。

4. 土坑(図78)

土坑92(図78)は3Aトレンチ東南端にあり、土坑93を切るが、一端は攪乱を受けて全体形が出ていない。出土遺物はⅡ-2~Ⅲ-2段階の須恵器が少量出土している。器種には杯蓋、高杯脚、甕などがある。841の杯蓋はⅢ-2段階に属する。他に842の甕口縁部もみられる。

土坑93(図78、写真図版92)は土坑92に切られる大きな土坑で、Ⅱ-3~Ⅳ-2段階の須恵器が少量出土している。器種は杯蓋、杯身、長頸壺、甕、鉄鉢などがみられる。843はⅡ-5~6段階と思われる杯蓋で、焼け歪みがみられる。

土坑154(図78)は4Aトレンチ東南端にあり、土坑93と接する。出土遺物はⅡ-4~Ⅳ-2段階の須恵器が極少量出土している。器種は杯身、杯蓋、甕、甕、甕、鉄鉢がみられ、Ⅱ型式のものが多い。845の杯身は高台の特徴からⅣ-2~3段階である。

土坑164は第3節4. 土坑において記述の通りである。

5. 密集型土坑群(図79~103、付図6・8、写真図版15~20・31~37・65~68・77・92~95)

C地区において2661基にのぼる土坑を検出した。「密集型土坑」もしくは「群集土坑」と呼ばれるものである。

1C・3Cトレンチの北側2/3の範囲には深さ10~40cmを測り、埋土に褐灰色粘質土をもつ浅い谷が拡がっており、その谷中と周辺に当該の土坑群が確認された。

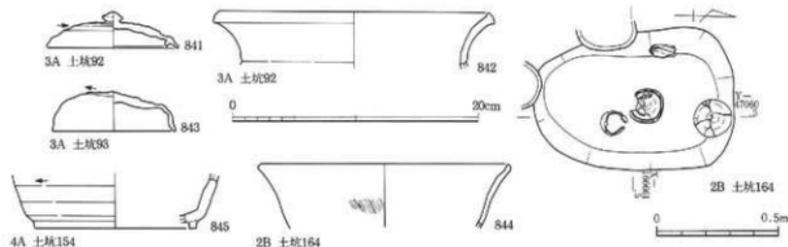


図78 土坑164平面図および3A, 4A, 2Bトレンチ土坑出土遺物

土坑の遺構面はこの谷がある程度埋まった状況で掘削がなされていると考えられるが、この面での検出は非常に困難を来し地山面での検出を行った。谷の肩部周辺では谷検出面において若干の土坑の検出が可能であった。また、2Cトレンチでは西北端において数十基の土坑を検出した。土坑の検出は旧盛土の明黄褐色粘質土、旧耕土の褐色粘質土を取り去り、その下層のにぶい黄橙色粘質土を除去することにより検出された。

1C・2Cトレンチにかけて検出された旧池は北側の五斗池、しょうが池に連なる谷地形を利用して作られたものと考えられ、その造成時に大きく改変したようである。そのため旧池の底部には遺物包含層は残存せず、地山も削平されており、土坑群が1C・2Cトレンチのあたりのどこまで存在していたかどうかは明らかにすることはできない。1Cトレンチ南端から2Cトレンチの南西側にかけては、調査区南側を走る泉北線造成時に包含層のみならず地山が大きく削平されており、遺構の有無を全く確認することができなかった。しかし、土坑群に関しては分布状況より判断してここまで拡がってはいなかったと考えられる。

土坑から出土する遺物は決して多くない。土坑のうち遺物を出土したものは20%弱である。それらの遺物の示す年代は6世紀後半から8世紀後半の間に収まるものであり、遺構が造られた時期を一定示すものと考えられる。遺構・遺物を年代順に配列するという本書の編集方針に従えば、当該土坑群の一部は当然「第3節 古墳時代」で記さねばならないが、6世紀後半から8世紀後半までいずれの時期の土坑もその状況や性格に差異を見出すことが困難であり、また80%にものぼる遺物を出土しない土坑の年代を決定することができないことから、本節においてまとめて記述することとする。

(1) 遺物を出土した土坑(古墳時代後期)(図79～85・93・94・100、写真図版15～20・65～68・77・105・106)

土坑のうち遺物を出土したものは、全体の約20%を数えるのみである。密集型土坑については、(1)どのような遺物がどのような状況で出土したのか、(2)出土遺物自体の状況はどうか(一例えば、完形品か、否か。焼き歪みがあるかどうか)などがもっとも関心のもたれる点である。ここでは、この点に留意して、まず遺物を出土した土坑について整理する。

土坑3023(図79、写真図版18)は7Cトレンチで検出。長径約1.2m、短径約0.6m、深さ約8cm前後を測り平面楕円形を呈す。埋土は黄灰色シルト質粘土。土坑の北側と東端の肩部から完形品の1/3ほどの須恵器杯と蓋の断片が1点ずつ出土。遺物は底面からかなり上位で検出された。

杯身(図81-352)は外面に僅かに灰を被り、II-4～5段階に属する。杯蓋(図81-351)は外面口縁部に僅かに灰を被り、II-4～5段階に属する。

このほかII-4～5段階の蓋杯や壺体部の細片が埋土中から出土。この中には外面に灰の被ったものや、生焼けのものが含まれる。

土坑3013(図79、写真図版17・65)は7Cトレンチで検出。長径1.5m以上、短径0.8m、深さ約11cmを測り平面楕円形を呈する。埋土は明黄褐色シルト質粘土を含む黄灰色シルト質粘土。遺物は土坑の中央から東側にかけて須恵器の蓋片、横瓶体部片、甕頸部片が出土。

図81-353は杯蓋で、3/5個体残存し、天井部外面はヘラ切り後、僅かになでられている。口径が小さく、天井部が丸い点と、ヘラ切り調整が施されていることから、II-6段階に属する。

土坑2994(図79・写真図版17)は7Cトレンチで検出。土坑2977に切られている。現長径約0.7m、現短径約0.2m、深さ約10cmを測る。本来平面楕円形を呈し、全体の1/4程度が遺存。埋土は明黄褐色シル

ト質粘土を含む黄灰色シルト質粘土。土坑の南端部から須恵器の無蓋高杯の杯の破片が底面から約3cm浮いた状態で出土。

無蓋高杯(図81-355)は杯部が1/3弱残存し、透かしは3方に開けられている。杯部にカキ目が施されており、無文である。口縁上端部に一部、木目状の痕跡がみられ、その部分は内側へ潰れた様になっている。乾燥段階で木目が触れた痕か。II-3~4段階に属すると思われる。

土坑3015(図79、写真図版18・65)は7Cトレンチで検出。差し渡しは東西・南北とも約0.9m、深さ約10cmを測る不整形の土坑である。埋土は明黄褐色シルト質粘土を含む黄灰色シルト質粘土。遺物は土坑の東側に多く、底面からやや浮いた状態で出土した。

出土した遺物は、II型式に属すると思われる須恵器の壺口縁部の破片(生焼け)1点、不明脚部2/3個体1点(図81-356)、土坑3006出土破片と接合した杯身1点(図81-354)がある。不明脚部は円形の透かしを3方に穿った短脚で、脚裾部は丸く、下方に僅かに拡張している。時期はII-1段階前後のものか不明である。杯身はII-4~5段階のものである。

土坑2973(図79、写真図版17)は7Cトレンチで検出。長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約13cmを測る東西に軸をもつ楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。遺物は、須恵器の体部片などが土坑の南東部で出土。底面からやや浮いた状態で検出された。

遺物は土坑2974出土の破片と接合したII-4~6段階の杯蓋が1点、I-4~5段階の体部が完形で1点(図81-357)出土している。357は太い頸部に丸い体部をもつ。体部中央には沈線2条の間に横描列点文が施され、その後には円孔が穿たれている。底部内面および肩部外面には灰を被っている。

土坑3036は7Cトレンチで検出。長径が現存長約1.3m、短径約1.0m、深さ約16cmを測る。埋土は明黄褐色粘土を含む黄灰色シルト質粘土。遺物は須恵器破片が数点出土。

遺物の内訳は、II型式の杯蓋か杯身不明が1点、内面に灰を被った鉢か不明のもの1点、甔の把手破片が1点、注口をもった不明土器が1点(図81-358)出土。358は谷埋土出土破片と接合したもので、「く」の字状に屈曲した頸部直下を穿孔し、径約2cmの注口を付けている。肩部外面にはカキ目が施されている。

土坑3012(図79、写真図版17)は7Cトレンチで検出。長径約1.1m、短径約0.6m、深さ約8cmを測る、長軸を南北方向にとる土坑である。埋土は明黄褐色粘土を含む黄灰色シルト質粘土。須恵器短頸壺の口縁部から体部の破片(図81-359)が土坑の南端で底面からやや浮いた状態で出土。359は口縁部が1/5周残存する。口縁部外面にはヘラ記号(写真図版105)があり、内面の同心円凹部には布目の痕跡が認められる(写真図版106)。調整は体部外面に平行叩きの後カキ目が施されている。頸部外面、口縁部上端、口縁部内面の一部に灰を被っており、口縁部上端では焼成前の破損が一部にみられる。II型式に属するものか。また、埋土中からは横瓶や壺体部の破片や土師器細片も出土している。

土坑2991は7Cトレンチで出土。長軸長約2.0m、短軸現存長0.4m(復元長1.2m)、深さ約14cmを測る。埋土は明黄褐色シルト質粘土を含む黄灰色シルト質粘土。須恵器横瓶片が出土。この遺物(図81-360)は俵形の半分にあたる頸部から体部にかけての約1/5個体が残存する。体部には製作時に口縁部であった部分を直径約7cmの円板で蓋をし、体部中央に直径約10cmの孔を明け、口頸部としている。円板で塞がれた内面には指紋が無数に残存する。体部外面には縦格子の叩き目後、カキ目が施されている。内面は円板で塞いだ部分以外に同心円文叩きがあり、極一部にナデがみられる。また、この遺物は土坑2988出土遺物と接合することができた。

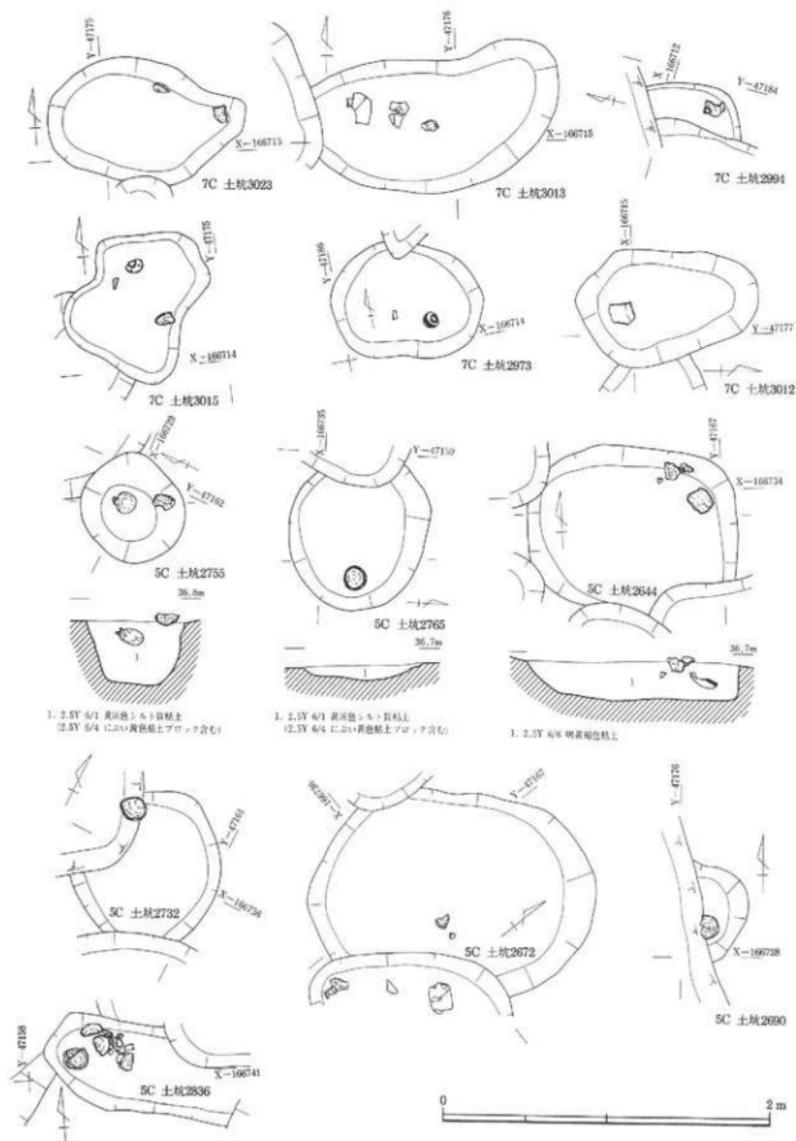


図79 7C, 5C トレンチ土坑平・断面図

土坑2755(図79、写真図版16・65・66)は5Cトレンチで検出。直径0.6m前後、深さ約40cmを測る円形の土坑。遺物の検出状況から判断して、本来さらに深さをもつ土坑であったと考えられる。埋土は、にぶい黄色粘土ブロックや炭化物を含む黄灰色シルト質粘土である。遺物は、土坑上部の中央部から口縁部の欠損した須恵器提瓶が、やや口頸部を上に向けて斜めの状況で出土し、最上部の南東部から杯蓋の破片が出土している。

提瓶(図82-385)は、口縁部が一部欠損しているものの、完形に近い小型のものである。把手は鉤状からさらに退化した形態のものである。口縁部は頸部からそのまま短くのび、端部は少し外傾の平坦面をなす。体部には丸みを持った側にカキ目がみられ、その後、ヘラ記号がつけられている。この面には窯壁?の一部が付着している。体部の裏面は回転ヘラ削りが施されており、自然釉がかかっている。II-4段階のものか。杯蓋(図81-361)は2/3個体残存し、灰赤色を呈する。天井部外面にヘラ記号かヘラの当たりか不明だが「-」状の線が見られる。

土坑2844(図93)は5Cトレンチで検出。一辺2.7~2.8m、深さ約6cmを測る方形の土坑。須恵器杯身や甕の破片が出土。杯身(図81-362)は口縁部細片で、外面に灰を被り、受け部には蓋の口縁端部の溶着痕が残る。II-4~5段階に属する。また、瓦器の細片が1点出土しており、当該の土坑は中世にまで下る可能性がある。

土坑2765(図79、写真図版16)は5Cトレンチで検出。直径約0.8~0.9m、深さ10cm前後を測るやや楕円形を呈す土坑。埋土は、にぶい黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の東隅からはほぼ完形の須恵器杯身が、正位で出土。

遺物は歪みの著しい杯身(図81-363)で、体部外面と受け部から立ち上がり部にかけての外面1/3に灰を被っている。II-4~5段階のものである。

土坑2827は5Cトレンチで検出。長径1.4m前後、短径1.0m前後、深さ27cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。須恵器の杯身1点や甕の細片(生焼け)が出土。

杯身(図81-369)は口縁部小片で、焼け歪みが著しく、外内に灰を被る。

土坑2634は5Cトレンチで検出。直径0.4~0.6m、深さ約11cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。須恵器の杯身の断片が出土。

杯身(図81-371)は口縁部小片で、外面に灰を被る。他に蓋か杯不明破片が1点あり、生焼けである。

土坑2635は5Cトレンチで検出。長径0.9m前後、短径0.4m前後、深さ約17cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。須恵器の杯身の断片が1点出土。

遺物(図81-372)は杯身の口縁部細片で、外面に灰を被り、受け部には蓋口縁端部が極一部溶着している。II-5段階に属する。

土坑2732(図79、写真図版16)は5Cトレンチで検出。直径0.8~0.9m、深さ約11cmを測るやや楕円形の土坑。土坑の北端から須恵器壺の体部の破片が底面からやや浮いた状態で出土。

この遺物(図81-375)は肩がやや張りぎみで、底部が丸みを持つ。肩から底部にかけての約1/2個体が残存し、肩から体部にかけての外面に灰を被っている。形状から、この壺はII型式に属するものか。また、埋土中から杯か蓋の破片が1点出土。

土坑2644(図79、写真図版15)は5Cトレンチで検出。長軸長約1.4m、短軸長約1.0m、深さ約0.2mを測る隅円方形を呈する土坑。埋土は、明黄褐色粘土の1層である。遺物は、土坑の北東隅から、埋土

の中部から上部で須恵器壺1個体の体部片他が出土。

壺(図81-376)はやや肩が張りぎみで、肩と体部の境に沈線を2条施し、底部は少し丸みを持つ。外面には灰がかかっており、溶着痕が数ヵ所みられる。Ⅱ型式のものか。埋土中から壺体部細片3点(生焼け)、蓋か杯か不明の細片2点(生焼け1点含む)も出土している。

土坑2836(図79、写真図版17・65)は5Cトレンチで検出。長軸長1.3m以上、幅0.5m前後、深さ約20cmを測る東西方向に延びる細長い土坑である。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。遺物は西端でまとまって出土。須恵器の有蓋高杯1点、杯身2点、杯蓋1点、平瓶体部1点などの破片がみられる。遺構の底面にほぼ接するように出土したものもある。

遺物は図81-364~368が土坑2836出土のものである。364は外面に僅かに灰を被った焼け歪みのある杯蓋で、口縁部が1/4欠損する。天井部外面は回転ヘラ切り後、雑に回転ヘラ削りを施している。365は底部中央と口縁の一部が欠損した杯蓋である。外面には灰を被り、内底面には直径約5cmの当て具痕がみられる。366は焼け歪みの著しい杯身破片である。図化していないが、同一個体と思われる底部破片の外面に、灰を被り、溶着痕がみられる。367は杯部が少し斜めに傾いた有蓋高杯で、ほぼ完成形である。脚は短く、透かしをもたない。外面に灰を被っている。脚部の接地面には靱圧痕が1つ認められる。364~367はⅡ-4~5段階にあたる。368は平瓶の体部1/2弱が残る破片で、肩が張り、底部は丸みを持つ。肩には沈線が1条施文されている。調整は底部外面が静止ヘラ削りで、肩部外面に灰を被っている。Ⅱ型式のものか。なお、土坑2836出土の平瓶と同一個体の破片が土坑2833からも出土し、接合している。この他、Ⅱ-5~6段階の杯蓋細片などもみられる。

土坑2672(図79)は5Cトレンチで検出。直径1.6~1.8m、深さ約24cmを測るやや楕円形の土坑。土坑のほぼ中央部から須恵器杯身の破片1点、壺か横瓶か不明の体部細片1点(生焼け)が出土。

遺物は杯身(図81-370)を図化した。370は杯身の1/5個体が残存し、外面には灰を被り、受け部には蓋口縁端部が溶着している。Ⅱ-4~5段階にあたる。

土坑2688は5Cトレンチで検出。直径0.3m前後、深さ15cm前後を測る円形の小型の土坑。埋土は炭化物を含む黄灰色シルト質粘土。土坑からは須恵器杯身破片1点と壺体部の細片1点、窯体の断片が出土。

須恵器杯身(図81-373)は細片で、Ⅱ-4~5段階にあたる。

土坑2690は5Cトレンチで検出。直径0.6m前後、深さ数cmを測る円形の土坑。土坑の中央部付近から須恵器杯身が1点、伏せた状態で検出。底面からはかなり浮いている。

杯身(図81-374)は2/3個体残存し、口縁部に1ヵ所、焼成時のものか、ひび割れがみられる。Ⅱ-4~5段階にあたる。

土坑2621(図80・93・94、写真図版15)は5Cトレンチで検出。差し渡し2.0~2.6m、深さ約10cmを測る不整形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。西側の埋土中位から須恵器鉢の断片が出土。

鉢(図81-377)は1/3個体残存し、丸い底部に斜め上方に開く口縁部は端部で平坦面をなし、内傾する。底部から体部にかけての外面には、カキ目が施されている。Ⅱ型式のものと思われる。

このほか埋土中からはⅡ型式後半段階の杯身2点、杯蓋細片1点、Ⅱ~Ⅲ型式にかけての杯身か杯蓋不明の細片が3点、壺か壺の頸部、体部破片が6点、Ⅲ~Ⅳ型式か不明の壺体部細片が1点出土。

土坑2627(図80)は5Cトレンチで検出。長軸約1.9m、短軸約1.6m、深さ約28cmを測るやや不整形の土坑。埋土は明黄褐色粘土のブロックを含む黄灰色シルト質粘土が大部分を占めるが、底部の一部にやや緑がかったシルト質粘土の堆積がみられた。土坑のやや西南部で、底面に接して須恵器壺の口縁部

から体部の破片が出土した。

遺物(図81-378)は口縁部1/4周残存する甕破片で、外面および口縁部内面に灰を被っている。肩部外面には平行叩き、内面には青海波の当て具痕がある。Ⅱ型式に属すると思われる。このほか埋土中からⅡ-2段階の杯蓋破片2点、Ⅱ-3~6段階の杯蓋細片1点、Ⅱ-4段階の杯身細片1点、受け部破片、鉢か甕か不明の口縁部細片1点、横瓶体部片1点、杯か蓋か不明のものや甕体部細片などが少々出土。

土坑2833(図80、写真図版17)は5Cトレンチで検出。直径0.6~0.8m、深さ約13cmを測るやや楕円形の土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の東北部で、底面からかなり浮いた状態で須恵器平瓶の体部の破片が出土。またこの遺物の破片は、土坑2836で少し小さめの破片が出土し、両者は接合することができた(図81-368)。

土坑2770(図80、写真図版16)は5Cトレンチで検出。長軸長約0.7m、幅0.5m、深さ約20cmを測る隅円方形の土坑である。北側長辺の中央肩部で須恵器長頸壺の頸部から体部の破片が1点出土。検出面より上位に遺物が浮いた状態で検出されており、本来検出面上にマウンドの存在した可能性がある。

長頸壺(図81-379)は口縁部と底部が欠損しており、なだらかな肩と体部の境には沈線が1条施されている。外面には灰を被り、肩部に数ヶ所の焼き膨れ、体部にはひび割れが1ヶ所みられる。Ⅱ型式に属すると思われる。また埋土中から外面に灰の被ったⅡ型式の杯身の小片も1点出土している。

土坑2631は5Cトレンチで検出。長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約14cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。須恵器甕の口縁部破片が出土。

甕(図81-380)は短く反外する口縁を端部で外面へ折曲げ、丸く仕上げている。Ⅱ-3段階のものか。なお、380は土坑2643出土のものと同一体である。

また、埋土中からはⅡ-4の生焼け杯身細片1点、Ⅱ-3~6の外面に灰を被った杯蓋細片1点、Ⅲ型式か不明の高杯脚部破片1点、壺・甕の体部細片などが出土している。

土坑2643は5Cトレンチで検出。長径約1.3m、短径約0.9m、深さ約19cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。須恵器は甕の口縁部破片などが出土。このうち甕の破片は土坑2631出土のものと同一体(図81-380)である。

出土遺物は甕以外に、Ⅱ型式の蓋か杯か不明破片7点、外面に灰を被ったⅡ~Ⅲ型式の壺肩部細片が1点、甕体部細片が1点ある。

土坑2628は5Cトレンチで検出。長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約3cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中からは、須恵器甕の口縁部と体部下半の破片をはじめ、須恵器破片が少量出土。遺物はⅡ-4の杯身細片1点、Ⅱ-3~6の杯蓋細片2点、杯身受け部細片1点、鉢か不明の体部細片1点、甕口縁部細片1点、甕体部細片4点、土師器細片2点が出土。図82-381の甕は口縁端部が外面へ折曲げ丸く収められ、調整は外面に縦格子叩き後カキ目が、内面には同心円文叩きが施されている。体部外面の「×」は後世の傷によるものと思われる。Ⅱ-3段階のものか。

土坑2775(図80)は5Cトレンチで検出。直径約0.9m、深さ約21cmを測る円形の土坑。埋土はにぶい黄色粘土ブロックを含む灰白色シルト質粘土。土坑の西南部から横瓶の頸部から肩部にかけての破片が、底面から数cm浮いた状態で出土。

遺物は横瓶破片1点だけである。図82-386は太い頸部で、ほぼ直線的に上外方に開く口縁の端部は、内傾して内側に肥厚する。体部外面には平行叩き後カキ目が、内面には同心円叩きのち一部ナデが施さ

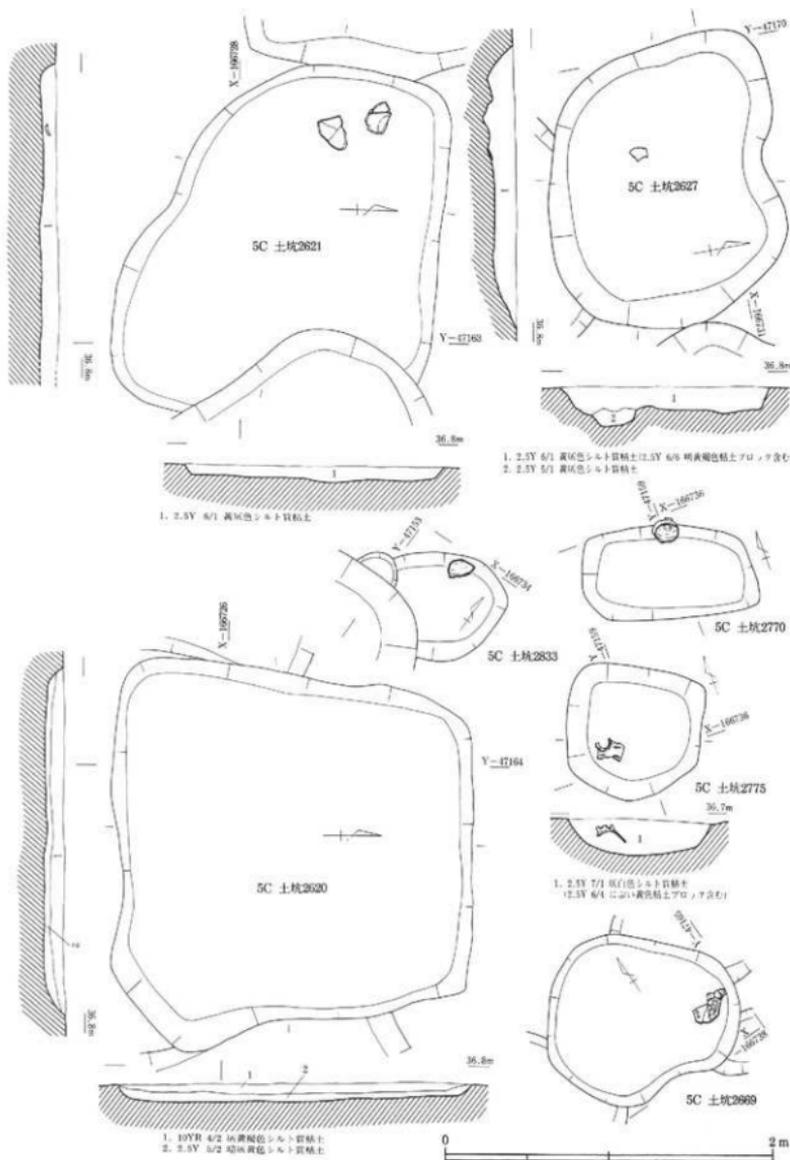


図80 5Cトレンチ土坑平・断面図

れている。II型式のものか。

土坑2620 (図80・93、写真図版15) は5Cトレンチで検出。一辺2.1m前後、深さ約10cmを測る不整形の土坑。埋土は上下2層からなり、上層は灰黄褐色シルト質粘土、下層は暗灰黄色シルト質粘土である。埋土中より、須恵器縄文壺体部細片1点、壺体部細片2点、輪羽口細片1点が出土している。図82-382は外面に縄叩きがみられ、内面は丁寧にすり消している。破片のぐりりは一部を除いて磨滅しているが、再加工かどうかは不明である。河川でローリングを受けた可能性も考えられる。

土坑2669 (図80、写真図版15・77) は5Cトレンチで検出。直径1.0~1.2m、深さ約10cmを測るやや楕円形を呈する土坑。遺物が検出面からかなり浮いた状態で出土しており、さらに深度をもつ遺構であったものと考えられる。土坑の東端から須恵器壺体部の破片が、底面から20cm前後上方で出土。

縄文細片 (図82-383) は外面に縄叩き目を有し、内面は丁寧にすり消している。また、埋土中からは、II-4~5の杯身細片1点、蓋か杯か不明1点、壺底部1点、器台か不明の脚細片1点なども出土している。

土坑2673 (写真図版77) は5Cトレンチで検出。長軸1.0前後、短軸0.6m前後を測る楕円形を呈する土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中から縄文細片が1点出土 (図82-384)。

遺物 (図82-384) は外面に縄叩き、内面は丁寧にすり消している。

土坑1090 (図82、写真図版18・65) は3Cトレンチで検出。長軸復元長3m近く、幅80cm前後、深さ45cm前後を測る東西方向に延びる土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。遺物は土坑の西部から出土。口縁部が欠損した須恵器台付長頸壺は、遺構の法面から脚部をほぼ遺構の底面に接地した状態で出土。蓋杯は正位の状態では底面からやや浮いた状態で出土。

杯蓋 (図82-387) は完形で、少し焼け歪んでいる。口縁部内面には段が退化して沈線が1条巡る。II-3~4段階にあたる。図82-388は口縁部の欠損した台付き長頸壺で、脚部には三角形の透かし1段を3方に穿っている。外面調整は、頸部から体部上半はカキ目、体部下半は回転へ削りを施している。外面および内底面には灰を被っている。II型式に属すると思われる。また、埋土中からはII-2の杯蓋細片1点、横瓶か不明体部1点、生焼けの蓋か杯か不明1点なども出土している。

土坑1238 (図82、写真図版66) は3Cトレンチで検出。長径約2.5m、短径約2.1m、深さ約13cmを測る楕円形の土坑。埋土は4層に分かれ、北側では2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土が1層だけである。その土層より南側は南方へ斜めに土層がずれて堆積し、下層から上層へ順に記すと、灰白色シルト、にぶい黄色シルト質粘土、2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土である。下層から遺構の南東部を中心に底面から10cm前後浮いた状態で須恵器の破片が散布。

遺物はII-4~5の杯身10点、II-1の杯蓋細片1点、II-3~4杯蓋1点、II-4~5の杯蓋5点 (焼け歪みの大きい破片2点含む)、II-5~6の杯蓋2点、II-3の提瓶口縁部細片1点、壺か壺の口縁部細片1点、横瓶、平瓶、甕、壺体部などの破片が少々あり、生焼けのものも含まれる。図82-389はほぼ完形の壺蓋で、頂部の凹んだつまみと、かえりが長く、内側についている。外面には少し灰を被っている。II型式の後半のものか。

土坑2300 (図82、写真図版20) は3Cトレンチで検出。3方を別の土坑で切られており、差し渡し0.6m分が遺存していたのみである。深さ約17cmを測る。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。遺構の法面付近で須恵器短頸壺の上半部の破片が逆位の状態では、ほぼ底面に接した状態で出土。

遺物 (図82-390) は口縁部が完存し、体部から底部は欠損している。頸部はやや細く、口頸部は短

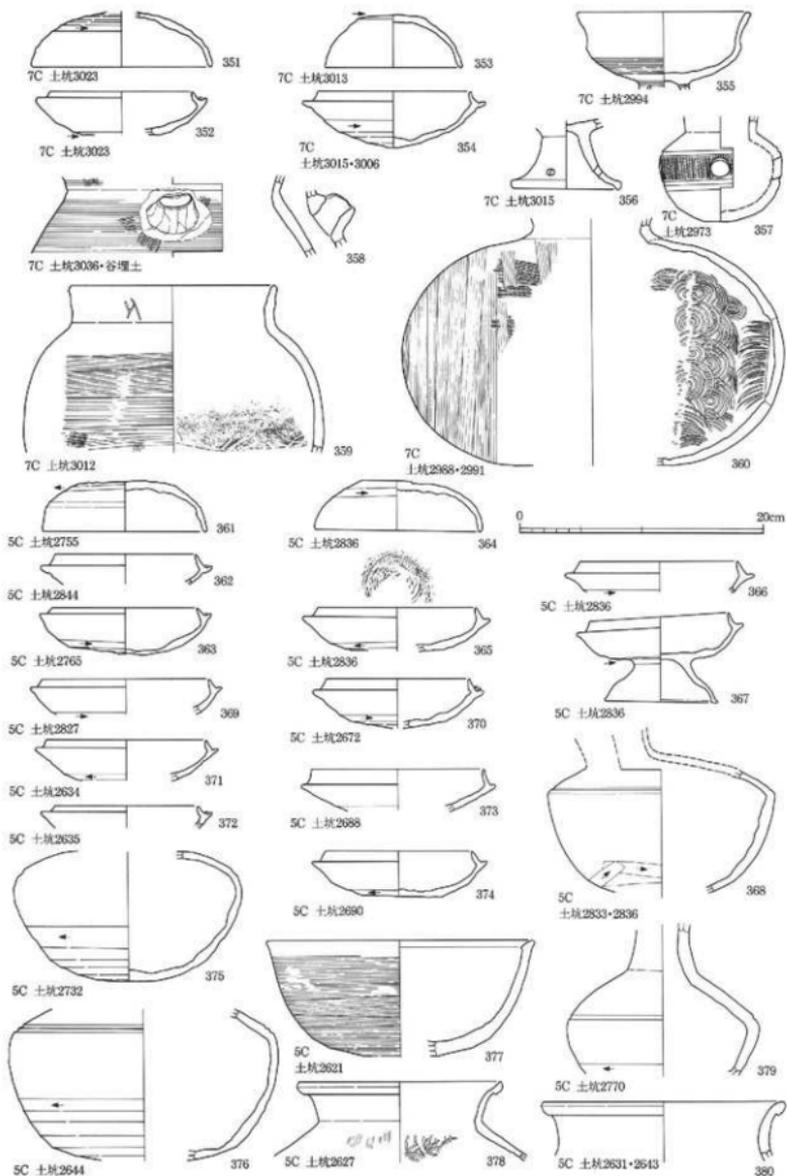


図81 7C,5Cトレンチ土坑出土遺物

く直線的に上方へのび、端部は平坦で僅かに内傾する。肩部には沈線が1条巡る。肩部直下までヘラ削りした後、なでている。体部破損面の突出部分には角を摩り落として再加工されたと思われる痕跡が見られる。II-4～6段階に属するものか。

土坑1582(図83、写真図版19・66・67)は3Cトレンチ北隅で検出された長軸2.0m、短軸1.3m、深さ8cm前後を測る不定長方形の浅い土坑。本来さらに深度をもっていたものと推定される。黄灰色シルト質粘土の埋土をもつ。須恵器の杯身、杯蓋、高杯、高杯蓋、甕、台付碗などが土坑の底面に接して密集して出土している。また土坑の範囲の外にも同様な遺物の散布が広がっている。

遺物の内訳はII-3～4段階の杯身5点、杯蓋14点、高杯蓋2点、甕口縁部4点、II-4～5段階のものでは杯身33点、杯蓋7点、有蓋高杯2点、II-5～6段階の杯蓋18点、II-4～6段階の甕口縁部2点、II型式と思われる台付き碗2点、平瓶口縁部1点、壺体部片、甕体部片、器台脚部細片1点、蛸壺片1点、無蓋高杯破片1点、不明口縁部1点、甕底部1点などの、生焼けを含む破片が大量に出土している。土師器では杯1点、高杯脚柱片1点が見られる。図化したのは図83-391～403である。

391は杯蓋口縁部細片で、口縁端部外面に幅約4mmで斜め方向のやや粗めのハケ目が見られる。口縁端部内面には凹線状の段があり、外面は灰を被っている。392は外面に灰を被った2/3個体残存の杯蓋である。口縁端部内面には段の退化して沈線となったものが一部に残る。393はほぼ完形の杯蓋で、外面に「×」のヘラ記号がみられる。内面天井部には粘土紐の巻上げた痕跡を留める。394は完形の杯身で、底部外面のヘラ削りにはカキ目が伴っている。ヘラ削りとカキ目の道具が同じものか。391～394はII-4～5段階に属する。

395はほぼ完形の高杯蓋で、頂部の凹んだつまみに、稜部は退化した沈線が1条巡る。外面は394と同じく、カキ目を伴うヘラ削りと思われるものである。外面には灰を被っている。内面には粘土紐を巻上げた痕跡を残す。口縁端部内面には沈線が1条巡る。

396は透かしの無い短脚の有蓋高杯で、約2/3個体残存する。II-4～5段階に属する。397は体部に沈線が1条巡る台付きの碗で、口縁部の焼け歪みが著しく、外面および口縁部内面の一部に灰を被っている。体部外面には溶着痕が見られる。内底面には粘土紐の巻上げた痕跡を残す。399は碗部の焼け歪みの著しい台付き碗で、4/5個体残存する。碗部内面および脚部外面は片方に著しく灰を被っている。碗底部外面には溶着痕が見られる。399は台付き碗としたが、深めの無蓋高杯の可能性もある。398は無蓋高杯口縁部破片で、体部は無文で、カキ目が施されている。口縁部上端に木目状の圧痕を留める。397～399ともにII型式の後半に属するものか。400は口縁部が水平に短く開く無蓋高杯か不明の口縁部破片で、外面に灰を被る。

401は約1/4個体残存する甕で、口頸部は短く外反し、口縁端部は外方へ粘土を貼り足し、断面長方形状を呈する。調整は外面は擬格子叩きで、一部カキ目が見られ、内面は同心円叩きである。焼成がやや不良で、軟質である。402は口縁部から肩部にかけて残る甕で、口縁部は極一部しか欠損していない。頸部外面に斜めに一筋のヘラ記号がある。口縁端部内面には浅い凹線状の凹みが見られ、端部外面は丸みを持って肥厚する。肩部外面は擬格子の叩き、内面は同心円叩きである。外面および口縁部内面に灰を被り、肩には窯壁片が数ヶ所に付着している。401、402の甕はII-4～6段階のものか。403は甕の体部から底部にかけての破片で、外面は叩きのちカキ目の後、縦方向にヘラ削りを施している。内面は同心円の当て具痕を残す。底部の蒸し孔はヘラによって粘土を削り取っている。この甕は土坑1044、1045、1100、1268、1382出土破片と同一個体である。

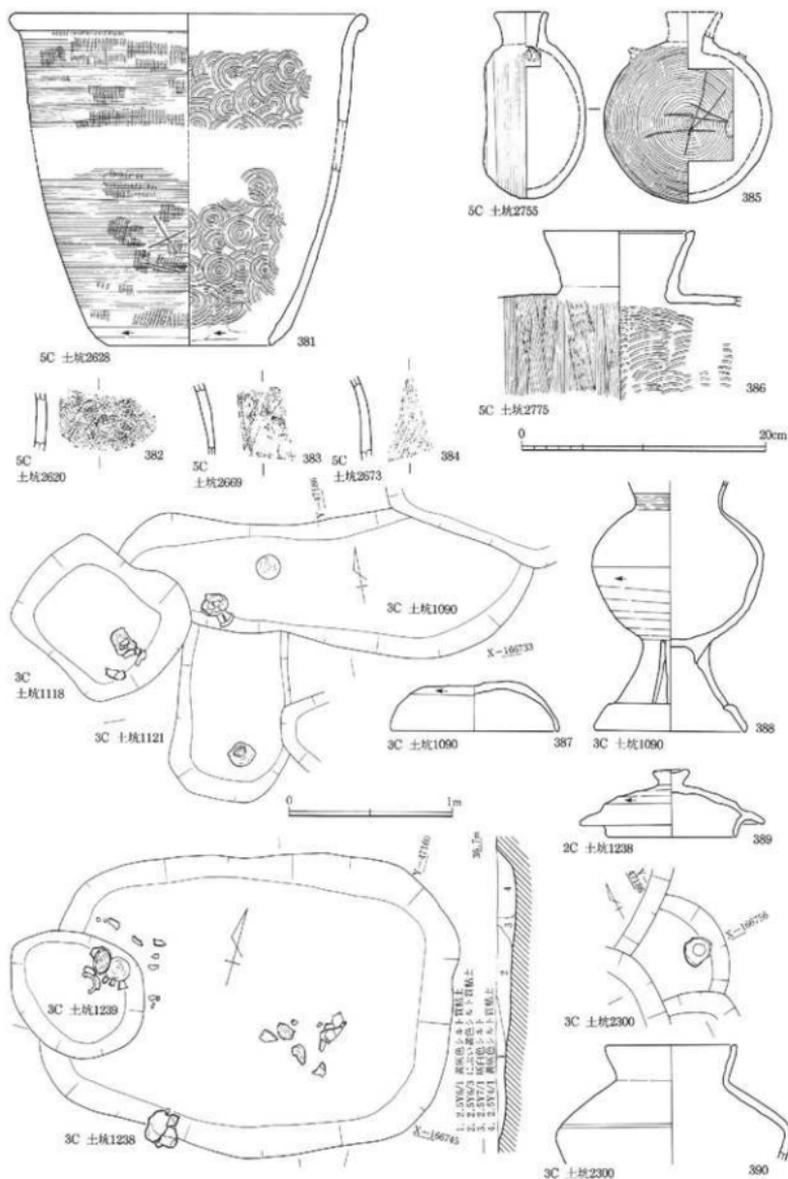


図82 土坑1090, 1118, 1121, 1238, 1239, 2300平面図および5C, 3Cトレンチ土坑出土遺物

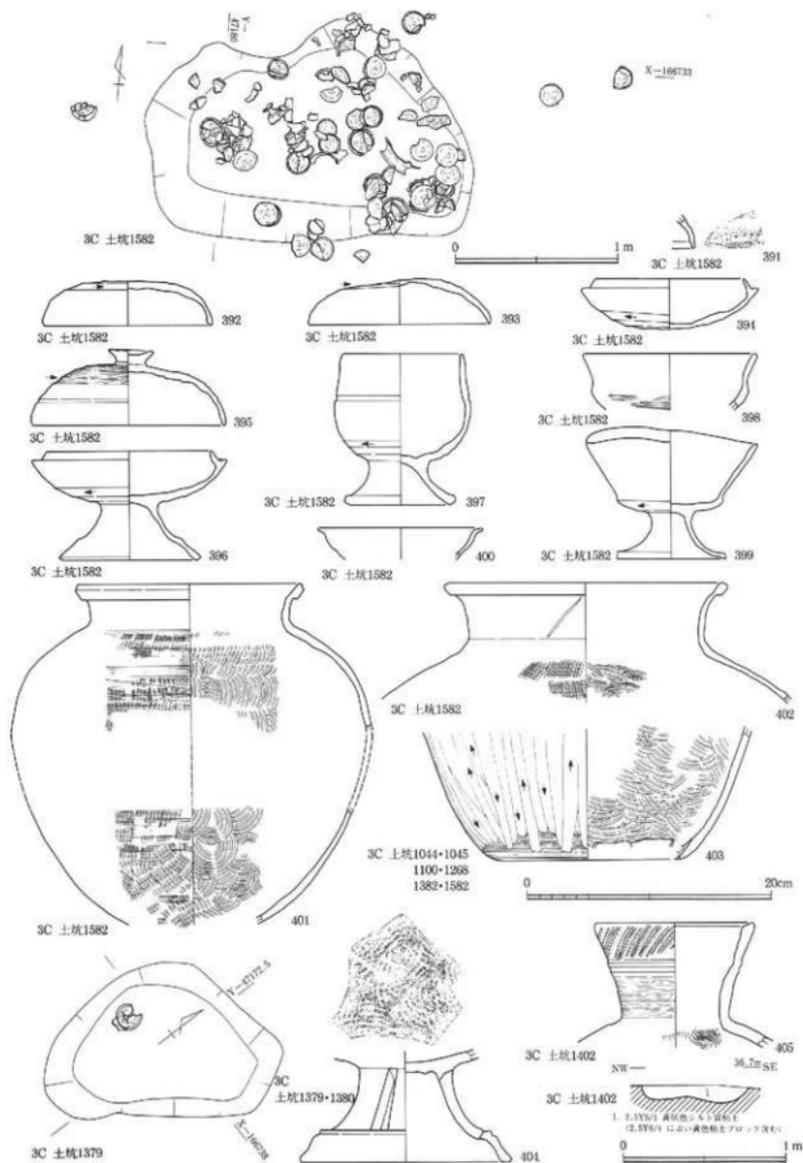


図83 土坑1582, 1379平面図、土坑1402断面図および3Cトレンチ土坑出土遺物

土坑1379(図83、写真図版19・67)は3Cトレンチで検出。長軸長約1.4m、短軸長約0.9m、深さ約14cmを測る不整三角形を呈する土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。須恵器台付壺の脚部が、土坑西部から、逆位の状態でほぼ底面に接して出土。

台付き壺(図83-404)は3方に長方形の透かしを穿ち、裾部の上方には1条の凹線を巡らす。調整は壺の底部外面にカキ目がみられ、内面には同心円叩きの後、一部ナデが施されている。脚部外内面に灰を被っている。この土器は土坑1380出土破片と接合した。II-4段階に属すると思われる。その他、I-4~5段階かと思われる、生焼けの杯身立ち上がり細片が1点出土している。

土坑1402(図100)は3Cトレンチで検出。直径0.9m前後、深さ12cmを測る円形の土坑。埋土はにぶい黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。埋土中より直口壺の口頸部の破片などが出土。

遺物(図83-405)は口縁部が1/3周残存する直口壺で、口縁部外面には斜めの列点文が1帯施されている。頸部にはにぶい凸線が1条巡り、その下方はカキ目が施されている。体部の調整は外面が平行叩き、内面が同心円叩きである。口縁部内面および肩部外面に灰を被っている。II型式に属すると思われる。その他、横瓶体部破片1点と壺ないし甕の体部破片が3点出土している。横瓶体部破片は土坑1300と1440出土破片と同一個体である。

土坑1586(図84、写真図版19・68)は3Cトレンチ中央部で検出された。切り合いが著しいが、長軸約1.7m、短軸約1.3mを測る不定方形を呈する土坑と考えられる。深さ約27cmを測り、埋土は黄灰色シルト質粘土である。遺物は南端の遺構の法面付近で須恵器甕、杯身、高杯などが底面から浮いた状態で検出されている。

遺物は把手付き短頸壺1点、II-3~4の無蓋高杯1点、II型式の杯身細片2点、高杯脚部1点、壺や甕の体部破片5点、甕体部破片1点などが出土している。甕破片は土坑1268、1382、1582、1044、1100出土の破片と同一個体である。把手付き短頸壺(図84-406)は把手と底部が欠損するが、その他は残り状態が良好である。丸い体部に短くほぼ直立する口縁部を持ち、端部は僅かに内傾した平坦面をなす。把手は提瓶の様に一對の環状をなすものか、直径約2cmの剥落痕が横に1.5cm開いて並ぶ。肩部外面に灰を被っている。調整は外面平行叩き後一部ナデ、内面は同心円叩きである。II型式のものか。

土坑1497(図84、写真図版19・68)は3Cトレンチで検出。現存長約0.9m、幅約0.6m、深さ約16cmを測る細長い土坑。埋土は粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の北西隅から須恵器平瓶が正位の状態で出土。ほぼ底面に接地した状況である。

遺物(図84-407)は口縁部が1/3欠損するが、ほぼ完形に近い平瓶1点のみである。体部は丸く、上部に一瞬溶着痕と見間違えような直径1cmのいびつなボタン状の粘土が貼り付けられている。頸部には凹線が1条巡る。調整は底部から体部下半にかけてカキ目状の筋を伴った回転ヘラ削りがみられ、体部上半はカキ目が施され、のちなでられている。底部外面には植物の茎か何か(藁?)が触れた痕跡と、体部外面にはハケ状の工具が当たった痕跡が見られる。体部上半に1ヵ所、ひび割れがみられ、口縁部から体部にかけての外面に灰を被っている。407はII-5段階に属する。

土坑1636(図84、写真図版19)は3Cトレンチで検出。長軸長約1.7m、幅約0.8m、深さ約26cmを測る楕円形の土坑。須恵器提瓶の口頸部から肩部の破片が、土坑の南東隅で、底面からかなり浮いた状態で出土。

遺物(図84-408)は提瓶1点のみである。平坦な側の体部が残存し、口縁部は全周する。肩部には環状の把手が欠損した痕跡を留める。外面および口縁部内面に灰を被っている。II-2~3段階のもの

か。

土坑1521は3Cトレンチで検出。長軸長約1.2m、短軸長約0.8m、深さ約10cmを測る土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。埋土中から須恵器杯蓋の破片1点が出土。

遺物(図84-409)は口縁部細片で、端部外面に幅4mmの斜め方向のハケ目が見られる。II-4~5段階のものか。

土坑1439は3Cトレンチで検出。長軸長約1.2m、短軸長約0.7m、深さ約13cmを測る土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。埋土中から須恵器甕体部破片が1点出土。

遺物(図84-410、写真図版77)は縄文の付いた体部細片で、縄文の上から横方向に沈線が引かれ、内面は丁寧になでられている。3Cトレンチの包含層出土破片と接合した。

土坑1255(写真図版19)は3Cトレンチで検出。長径約1.4m、短径約1.0m、深さ約21cmを測る不整円形の土坑。土坑の中央部と北東部から須恵器の壺が出土。中央部の壺は埋土の中位から出土しているが、北東に位置する短頸壺はほぼ底面に接地して検出。

遺物は短頸壺が1点(図84-411)と、生焼けの壺体部が完存するものが1点出土している。411は口縁部がごく短く直立ぎみに上外方へ立ち上がり、肩部から体部にかけて少し丸みをもつ。肩と体部の境には凹線が1条巡る。体部外面調整は静止ヘラ削りである。411はII-2~3段階に属する。

土坑1649(図84、写真図版20・67)は3Cトレンチ南西隅で検出されており、長軸1.3m、短軸1.0mを測る隅円方形の平面を呈する。深さ34cmを測り、埋土は上層中央部に明黄褐色粘質土ブロックを含んだ黄灰色シルト質粘土があり、下層部分に炭化物を含んだ黄灰色シルトがみられる。出土土器は中央やや東寄りに土坑底部に貼り付いて横瓶が検出された。横を向いており、口縁はすべて残るが、体部の半分は存在しない。

横瓶(図84-412)は生焼けで、体部の横長の寸法が若干寸詰まりである。調整は外面が擬格子叩き後一部カキ目、内面が同心円叩きである。II-2~3段階のものか。また、埋土中からII-5~6段階と思われる生焼けの平瓶の破片も1点出土している。

土坑2102(図85、写真図版20・68)は3Cトレンチで検出。長軸長2m以上、幅0.8m以上、深さ7cmを測る長細い土坑である。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。須恵器甕の破片が、底面からかなり浮いた状態で土坑内に散布している。

遺物(図85-413)はやや小型の甕で、2/5個体残存する。口頸部は短く外反し、口縁端部外面は僅かに肥厚する。調整は外面擬格子叩き後カキ目、内面は同心円叩きである。この遺物は、土坑1122、土坑1118出土の遺物と接合することができた。II-4段階に属するものと思われる。また埋土中から提瓶などの体部破片も2点出土している。

土坑1118(写真図版18)は3Cトレンチで検出。一辺1.0m前後、深さ約17cmを測る方形の土坑。土坑1121、土坑1090を切って造られる。埋土は黄灰色シルト質粘土。遺物は土坑の南部で、底面から10cm以上浮いた状態で出土。遺物の内訳は外面に灰を被ったII-4~5段階の杯蓋細片が1点と甕の体部大破片が1点出土している。この内須恵器甕は土坑2102、土坑1122出土のものと同個体(図85-413)である。

土坑1032は3Cトレンチで検出。長径約1.5m、短軸約1.0m、深さ6cmを測る土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中より須恵器甕片が出土。

甕(図85-415)は頸部内面に「+」のヘラ記号がつけられている。口頸部は短く外反し、口縁部は

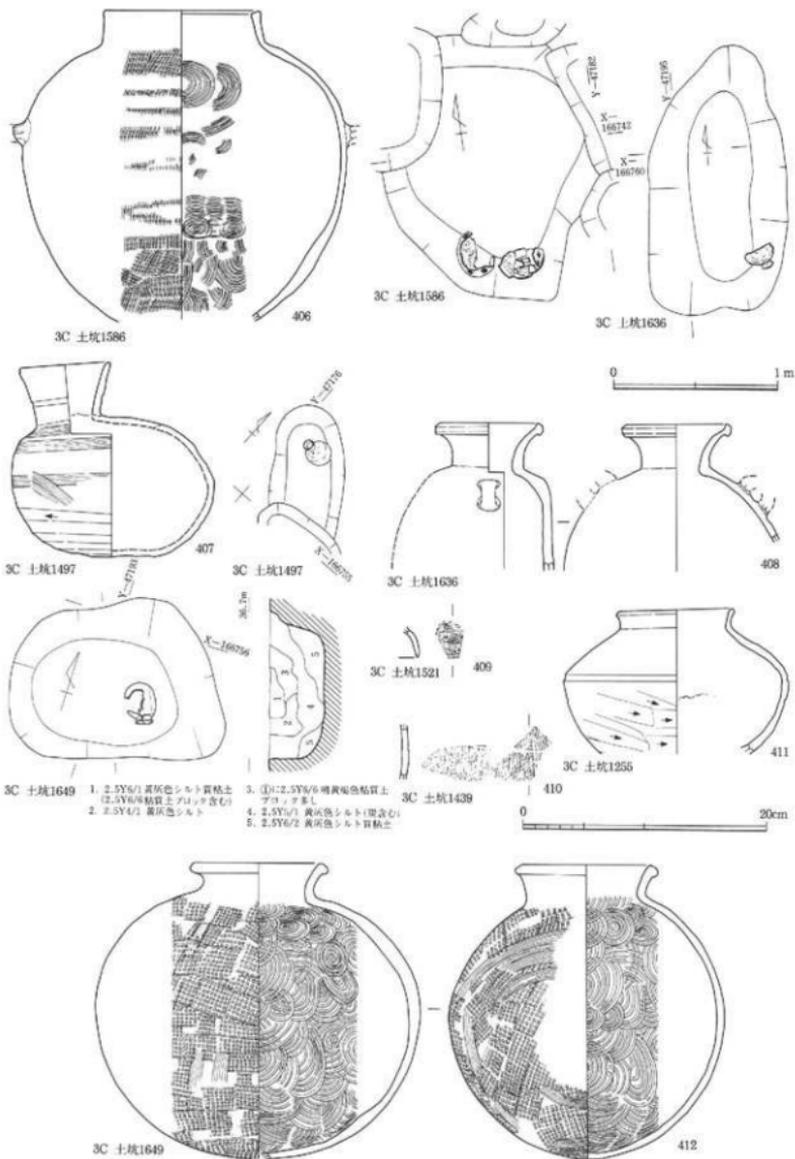


図84 土坑1586, 1636, 1497, 1649平・断面図および3Cトレンチ土坑出土遺物

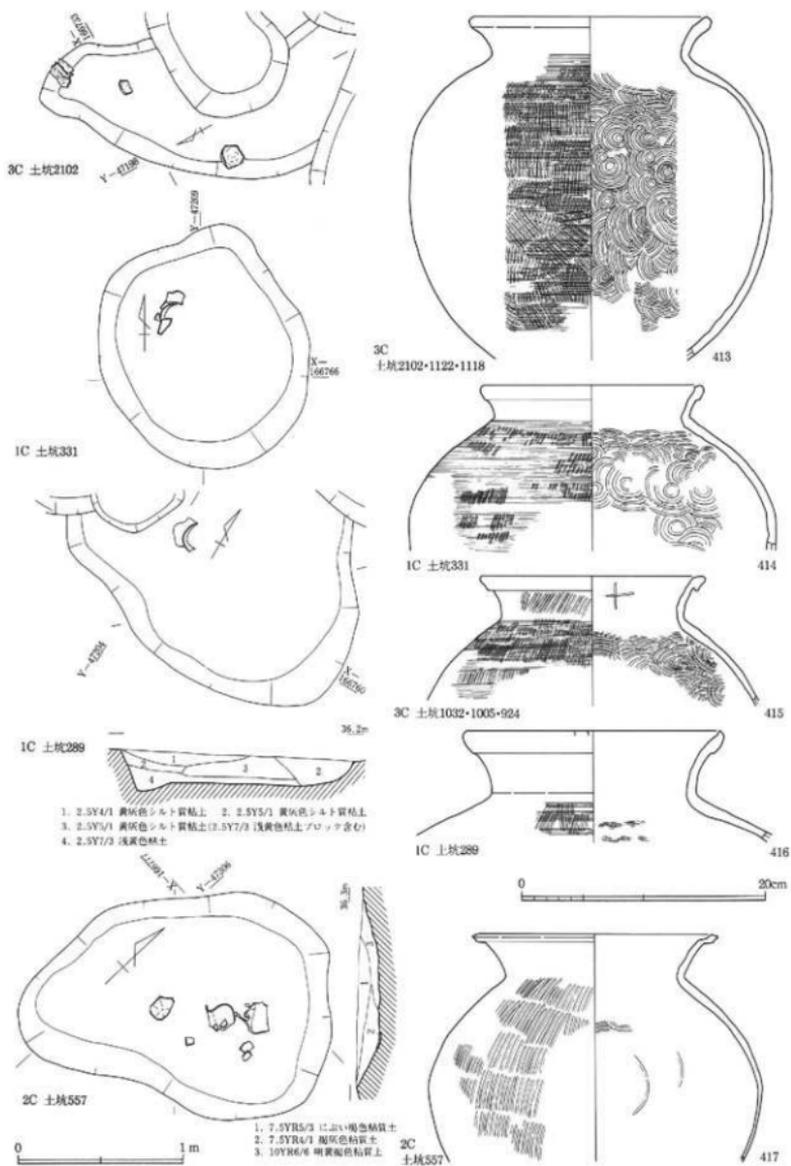


図85 土坑2102, 331, 289, 557平・断面図および3C, 1C, 2Cトレンチ土坑出土遺物

端部で外方へ折曲げ、断面四角形状を呈する。調整は外面平行叩きのちカキ目、内面は同心円叩きである。頸部外面はなでられているが、平行叩きの痕跡を留める。Ⅱ-4～6段階のものか。また、この遺物は、土坑1005出土破片と接合し、土坑924出土のものと同一体である。このほか埋土中から須恵器杯蓋の細片1点なども出土している。

土坑331(図85、写真図版20)は1Cトレンチで検出。直径1.3～1.5m、深さ約40cmを測るやや楕円形の土坑。土坑の西北部から須恵器甕の上半部の破片が逆位の状態で、底面から20cm前後浮いた状態で出土。

遺物(図85-414)は生焼けで、口頸部は短く、口縁端部内面に少し肥厚し、端部外面には帯状に粘土を貼り付けたかのように肥厚する。調整は外面平行叩きのちカキ目、内面は同心円叩きである。Ⅱ-2段階に属するものか。この他、生焼け甕の頸部から体部にかけての細片が2点出土している。

土坑289(図85、写真図版20)は1Cトレンチで検出。直径1.5～2.0m前後、深さ約25cmを測ると推定される円形の土坑であるが、北側が切られている。埋土は4層よりなり、上層の1層目は南西に堆積した2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土で、その下層には南西側に2層目の2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土が、北東側には3層目の2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックを含む2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土が、最下層の4層目には2.5Y7/3浅黄色粘土が堆積し、3・4層を切るようにして北東側に2層目の黄灰色シルト質粘土の堆積がみられる。土坑の中央部から須恵器甕の口縁部から肩部の破片が底面から15cm前後浮いた状態で出土。

遺物(図85-416)は口縁部が1/4周残存する甕で、外面全体および口縁部内面に灰を多く被っている。口頸部はやや短く上外方に開き、口縁部は端部外面に帯状に肥厚し、端部内面に僅かにつまみ出している。調整は外面平行叩きのちカキ目、内面は同心円叩きの後少しなでている。416はⅡ-5段階に属するものか。また須恵器の壺か不明の底部破片1点などが出土している。

土坑557(図85、写真図版20・67)は2Cトレンチで出土。長径約1.9m、短径約1.4m、深さ約14cmを測る不整円形の土坑。埋土は3層に分層されるが、いずれも外部から流れ込んだ状況と判断されるものである。須恵器甕(1個体)は土坑の南東部から、底面にほぼ接地した状況でまとまって出土。遺物(図85-417)は生焼けで、1/2個体残存する。口頸部は短く外反する。口縁端部は内面で凹縁状に凹み、外面で少し肥厚し、断面は小さい四角形状を呈する。調整は外面平行叩き、内面は同心円叩き後ナデである。Ⅱ-1～2段階のものか。

(2) 遺物を出した土坑(飛鳥～奈良時代)(図86～92・100～103、写真図版17・18・31～34・92～95)

土坑3006(図86、写真図版32)は7Cトレンチ北側中央部で検出。長径約1.3m、短径約1.1m、深さ14cmを測り、平面は楕円形を呈す。埋土は、シルト質粘土であり、若干の色調の違いにより上下2層に分けられる(上層:2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土、下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土)。遺物は土坑の西側から多く出土し、また出土層位も上下2層にまたがっているが、大半の遺物は上層から出土している。

出土した遺物は、須恵器の無蓋高杯、蓋杯、甕の破片などであり、Ⅱ-3～4からⅢ-3段階の須恵器が少量出土している。内訳はⅡ型式では4～5段階の杯身が4点、3～4段階の杯蓋細片が1点、5～6段階の杯蓋細片が2点、Ⅲ型式の1～2段階と思われる甕口縁部破片(生焼け)が1点、3段階の無蓋高杯(生焼け)が1点、時期不明の把手1点、土師器細片等である。図化したのは図88-846のⅡ

ー4～5段階の杯身である。他に土坑3015出土のものと同接した杯身(図81-354)がある。354は外面に灰を被った、かなり歪みの著しい杯身で、残存状態は約4/5個体強と、完形に近い。Ⅱ-4～5段階に属する。

土坑2984(図86、写真図版17)は7Cトレンチ中央部で検出。長軸約1.2m、短軸0.9m、深さ11cmを測り方形に近い平面形態を呈するが、南東辺は土坑2985に切られている。埋土は明黄褐色シルト質粘土を含む黄灰色シルト質粘土。遺物は北西隅から台付き長頸壺の体部破片が、底面にほぼ接地して出土している。

遺物(図88-847)は台付き長頸壺の口頸部と脚裾の欠損したものの1点だけである。肩部と体部の境はやや丸みをもち、体部から底部にかけてすばまり気味に丸みをもつ。肩部に沈線が1条巡る。Ⅲ-2段階に属するものか。

土坑2997(図86、写真図版32・92)は7Cトレンチで検出。現存の差し渡しが0.7m前後、深さ約16mを測る。埋土は明黄褐色粘土を含む褐色シルト質粘土。土坑の北部から台付き長頸壺が横倒しの状態で出土。底面からはかなり浮いた状態で検出。

台付き長頸壺(図88-848)は口縁部と体部が1/2残存し、台部は全部欠損している。頸部と肩部に沈線が各1条巡る。Ⅲ-2～3段階のものか。このほか生焼けの須恵器壺体部破片が1点出土している。

土坑2906(図86、写真図版92)は8Cトレンチで検出。長径約1.1m、短径約0.8m、深さ約19cmを測る。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む褐色シルト質粘土。埋土中より須恵器長頸壺の体部片が出土。

長頸壺(図88-849)は体部から脚台にかけて1/2残存する。土坑2907出土遺物と同接した。体部にはヘラ記号かどうか不明だが、縦ないし斜め方向に複数の線条がみられる。Ⅲ-2段階に属すると思われる。

土坑2907(図86、写真図版92)は7Cトレンチで検出。土坑2906に西側を切られている。現存長軸長約3.0m、現存短軸長約2.3mを測る。埋土は褐色シルト質粘土。埋土中より須恵器長頸壺の体部片(図88-849)が出土。土坑2906出土遺物と同一個体であり、Ⅲ-2段階に属すると思われる。

土坑2899(図86、写真図版18・92)は8Cトレンチで検出。長軸約1.3m、短軸0.9m、深さ15cmを測る楕円形の土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む褐色シルト質粘土。中央部より須恵器鉄鉢形鉢1点が出土している。

鉄鉢形鉢(図88-850)は焼成不良の軟質で、3/5個体強残存する。Ⅲ-2～3段階のものか。このほか埋土中からⅡ型式の灰を被った杯身の小片が1点出土している。

土坑3055(図86、写真図版32・92)は7Cトレンチで検出。長軸1.4m、短軸1.0m、深さ15cmを測り、菱形の平面形態を呈する。埋土は黄灰色シルト質粘土の上に黄褐色シルト質粘土が堆積している。遺物は中央部より、台付き広口壺一部と平瓶の一部が出土している。台付き広口壺は体部の破片が横倒しの状況で、平瓶は体部の下半分が正位の状況で検出された。いずれも底面からわずかに浮いた状態である。

台付き広口壺(図88-851)は口縁部から体部にかけて欠損したものである。外面調整は肩部と体部の境まで、体部に回転ヘラ削りが施されている。広口壺の肩部の角張りと同、平瓶(852)の平底の加減から、851、852はともにⅢ-3～Ⅳ-1段階のものか。このほか埋土中からⅡ型式の杯身の断片が1点出土している。

土坑2890(図86)は8Cトレンチで検出。長軸約1.3m、短軸1.0m、深さ15cmを測る土坑。埋土は黄褐色シルト質粘土。土坑の西端より須恵器平瓶あるいは壺の体部が、土坑の底面に密着して出土してい

る。この遺物の底部にはかえりを有する蓋（Ⅲ-3段階）の破片が付着している。

遺物（図88-853）は1/3個体弱残存し、肩から体部にかけて丸みをもった、やや扁平な体部に平底である。調整は底部外面に回転ヘラ削りが施されている。肩部外面および内面に灰がかかっている。

土坑2893（図86、写真図版18・92）は8Cトレンチで検出。長軸0.7m、短軸0.3m、深さ15cmを測り、土坑2895に切られている。埋土は灰黄色粘質土を最下層とし黄灰色粘質土、にぶい黄色シルト質粘土がレンズ状に堆積している。遺物は鉄鉢型土器が土坑全体に散乱して出土している。遺物片の中には底面に接地しているものもある。この遺物（図88-854）は、外面底部は手持ちヘラ削りを施しており、焼成時の歪みによりやや楕円形を呈している。約4/5個体が残存する。時期はⅡかⅢ型式か不明だが、図88-850の鉢の前段階に属するものか。このほかⅡ-3～4段階の杯身、杯蓋、Ⅱ-6段階か不明の甕などが少量出土。

土坑2751（図86、写真図版31・92）は5Cトレンチで検出。長軸長約1.1m、短軸長約0.9m、深さ約11cmを測る隅円方形の土坑。埋土は、にぶい黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の東隅から須恵器壺体部の下半分の破片が、正位の状態でも底面に接地して出土。遺物（図88-855）は体部から底部にかけて丸みもち、底部外面には回転ヘラ削りが施されている。体部最大径部分の直上の外面は少し凹み、その部分に左右2cm、天地1cmの布目圧痕が1ヶ所見られる。この壺底部は焼成がやや不良で軟質である。Ⅱ～Ⅲ型式のものか。

土坑2807（図86、写真図版31・93）は5Cトレンチで出土。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ16cmを測る楕円形を呈する土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土であるが、明黄褐色粘土ブロックの有無によって2層に分層できる。須恵器鉢が遺構のやや東寄りから、底面から10cm前後浮いた状態で出土している。この遺物（図88-857）は平底で、口頸部が短く外反する形態で、やや軟質であり、残存90%のほぼ完形品である。Ⅳ-1～2段階に属する。また埋土中から須恵器壺体部の生焼けの破片が1点出土している。

土坑2860（図87、写真図版32・93）は5Cトレンチで検出。長軸2.9m、短軸約2.4m、深さ約32cmを測り、河川1の西側に位置する大型土坑である。埋土は、明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の東部から須恵器壺の上半部が、土坑の底面にほぼ接地して出土している。この遺物（図89-865）は直口壺ないしは広口壺の口縁端部が欠如したような形態で、外面には体部最大径部分の直下まで回転ヘラ削りがおよび、その後、緻密なミガキが施されている。なお、この壺の破片が河川1の下層部である谷埋土から出土している。この他にⅢ-2～Ⅳ-2段階に比定される須恵器杯（図88-859）が出土している。859は約1/4個体残存し、底部外面が回転ヘラ切り未調整で、粘土紐の巻上げた痕跡を留める。上記以外に、Ⅱ型式の杯か蓋不明が1点、Ⅲ型式の杯身破片が1点、ⅢからⅣ型式の不明体部破片が1点、甕体部片が数点出土している。

土坑2849（図87、写真図版32）は5Cトレンチで検出。長径約1.7m、短径約1.4m、深さ約14cmを測る楕円形の土坑。埋土は黄灰色系のシルト質粘土であり、4層に分層できる。上層から、1層は灰黄色シルト質粘土、2層は1層の南端部分にあり、浅黄色シルト質粘土、3層はにぶい黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土、最下層の4層は北側に観察され、カルシウム質がラミナ状に入る灰白色シルト質粘土である。土坑の中央部から須恵器杯身がほぼ完形で、正位の状態でも出土。ほぼ土坑の底面に接地している。

杯身（図88-860）は約4/5個体残存する。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。Ⅲ-2～3段階のものか。

土坑2689は5Cトレンチで検出。長軸長約1.9m、短軸長約1.0m、深さ約20cmを測る土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中からⅡ型式の須恵器杯か蓋か不明破片2点、生焼けの壺体部破片1点、鉢1点が出土。

鉢(図88-856、写真図版93)は平底で、1/2個体弱残存する。外面調整は底部直上の一部にヘラ削りを施しており、他はなでている。時期はⅢ-2~3か不明である。

土坑2781(図87、写真図版31)は5Cトレンチで検出。いくつかの土坑で切られており全体の大きさは不明。現存の差し渡し長は2.0m前後、深さ13cmを測る。埋土は黄灰色シルト質粘土。土坑の東北隅から須恵器壺の下半部の破片が、底面からかなり浮いた状態で出土。遺物は台付き壺1/3個体が1点(図88-858)で、高台はやや高く、上部に円孔透かしが4方向に穿たれている。Ⅲ型式のものか。

土坑2839は5Cトレンチで検出。長軸長約1.1m、短軸長約0.8m、深さ約26cmを測る土坑。埋土は灰黄色砂質土。遺物は埋土中からⅡ-3~4段階の杯身、杯蓋が細片で数点と、壺の破片1点などが出土している。図88-861の壺は1側辺を留め、色調は灰白色を呈する。

土坑2626(図87、写真図版31)は5Cトレンチで検出。直径0.8~0.9m、深さ約12cmを測るやや楕円形の土坑。埋土はにぶい黄色の粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。須恵器長頸壺体部片が土坑の中央部から出土。ほぼ底面に接地している。この遺物(図89-862)は口頸部、底部が欠損した長頸壺で、肩部に沈線が2条施されている。沈線と肩の張りから、Ⅲ-2~3段階か。

また、埋土中からはⅡ型式の蓋か杯の細片2点、壺体部片1点、Ⅲ-2段階と思われる平瓶口縁部細片が1点出土している。

なお、この土坑については、埋土の脂肪酸分析を実施し、ヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存しているという分析結果を得た(付章第5節)。

土坑2795(図87、写真図版31)は5Cトレンチで検出。直径約1.1m前後、深さ約8cmを測る土坑。土坑の北西隅から須恵器壺下半部の破片が出土。底面にほぼ接地している。

遺物は台付き壺の体部下半3/4個体が1点(図89-863)みられ、これは高台が内端部で接地しており、Ⅲ-2~Ⅳ-1段階のものか。なお、土坑2810から同一個体の破片が出土し、接合している。

土坑2837(図87、写真図版32)は5Cトレンチで出土。長軸長約2.2m、短軸長約1.7m、深さ約21cmを測る大型の土坑。いくつかの土坑に切られている。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑中央部から須恵器長頸壺の体部片が出土している。この遺物(図89-864)は水瓶形の体部破片で、極僅かに残る頸部内面はなだらかである。Ⅳ-2~3段階のものか。また埋土中からはⅡ-2とⅡ-5~6段階の杯蓋が各1点と、生焼けの壺体部細片1点などが出土している。

土坑2857(図87、写真図版32・93)は5Cトレンチで検出。一辺1.5m以上、深さ18cmを測る。河川1の西側に位置する大型の土坑である。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。遺物はやや西寄りの場所で、底面からかなり浮いた状態で、土師器の把手付壺が1点出土している。

遺物(図89-866)は把手の欠損した土師器の壺1/2個体のみである。調整は外面が縦方向のハケ目、内面は縦方向のヘラ削りである。時期は平城宮Ⅳにあたると思われる。

土坑1000(図89、写真図版33・93)は3Cトレンチで検出。差し渡しが1.5m以上、深さ5cmを測る大型の土坑。他の土坑に大きく切られている。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の南端から須恵器平瓶底部が正位の状態で出土している。

この遺物(図89-867)はほぼ完形に近い、底部に丸みをもつ平瓶である。調整は体部下半の外面に

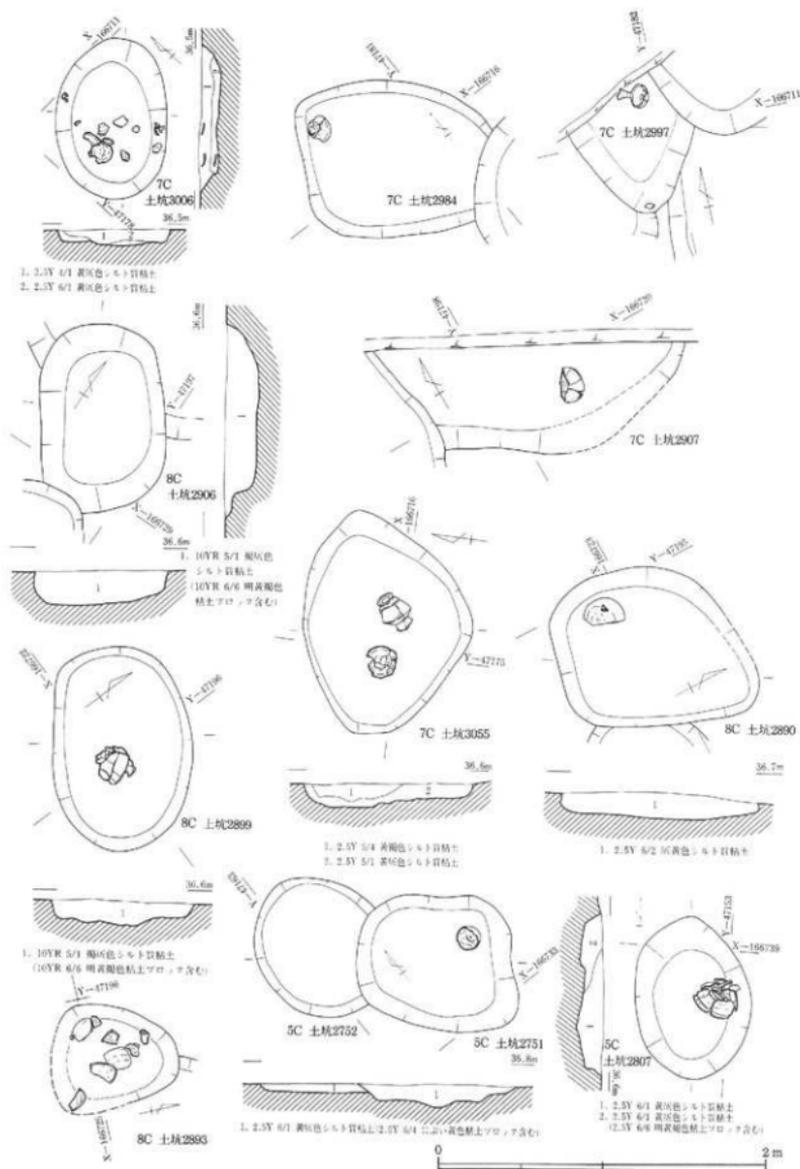


図86 7C, 8C, 5C トレンチ土坑平・断面図

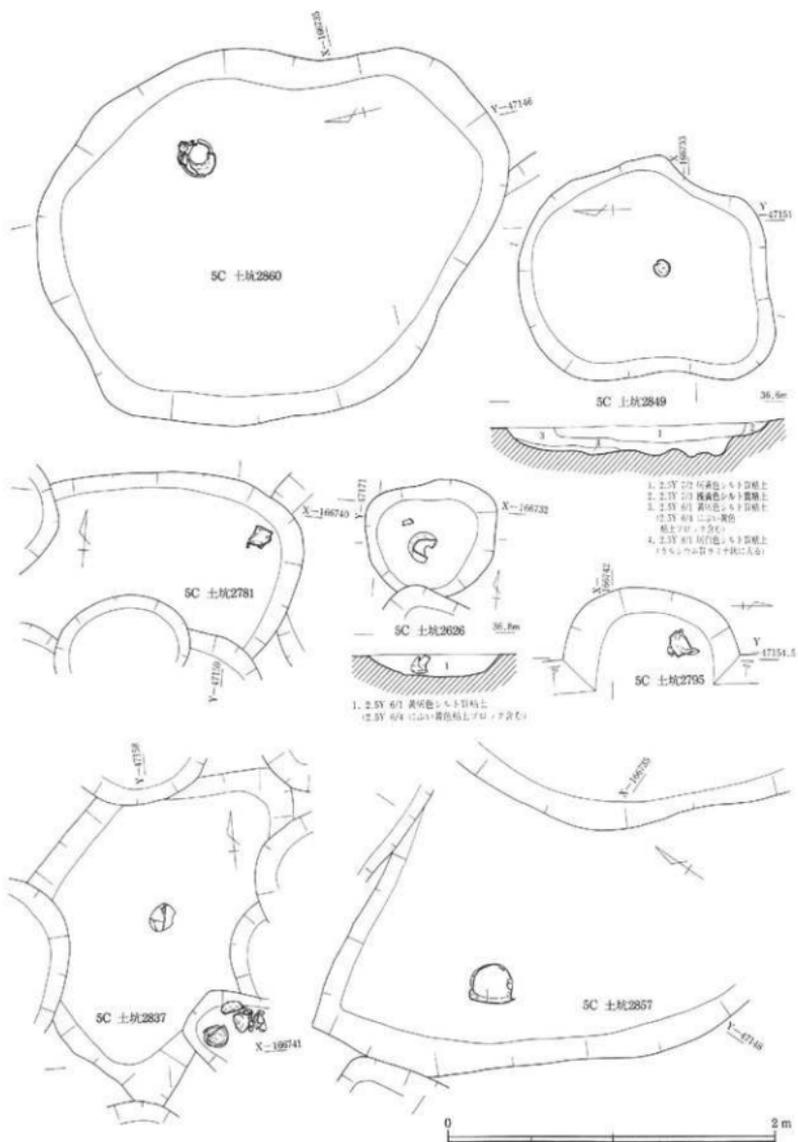


图87 5Cトレンチ土坑平・断面図

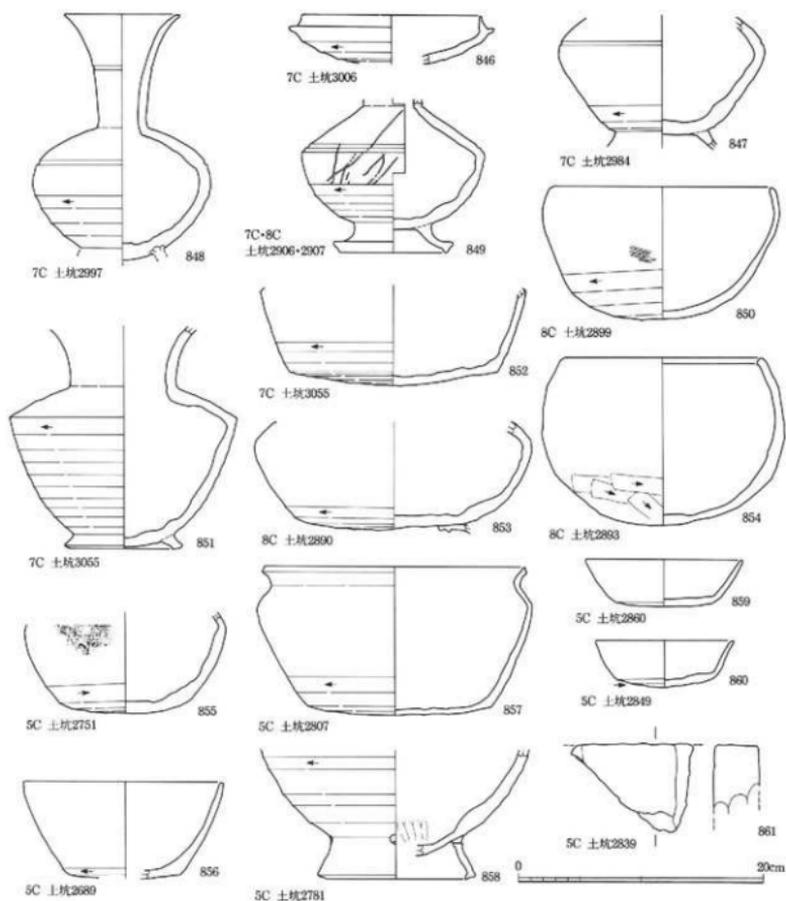


図88 7C, 8C, 5Cトレンチ土坑出土遺物

楕円形口きのち静止へら削りとナデが、体部上半はカキ目のちナデが施されている。底部は直径7.5cmの円板に粘土紐を巻上げており、外面につなぎ目を残す。底部内面には指押さえの痕跡が残る。Ⅲ-3～Ⅳ-1段階のものか。なお、この遺物と同一個体の口縁部から体部にかけての破片が土坑927から出土し、接合した。

土坑991(図89、写真図版32・93)は3Cトレンチで検出。長軸長約1.6m、短軸長約1.2m、深さ8cmを測る土坑。須恵器長頸壺が土坑の南西肩部から出土。遺物が土坑の検出面からさらに浮いた状態で検出されたことから、土坑は本来さらに上方から切り込まれていたものと考えられる。遺物は長頸壺が1点(図89-868)出土。頸部に1条と体部に1から部分的に2条の沈線が施している。底部中央は穿孔した後、摩ったかのように、破面がなめらかである。Ⅲ-2～3段階に属するものか。

土坑1249 (図89、写真図版33)は3Cトレンチで検出。長軸現存長約1.0m、短軸長約0.6m、深さ7cmを測る。埋土は黄灰色シルト質粘土。北側肩部から須恵器長頸壺の体部片が出土。土坑検出面より上位であり、土坑は本来さらに深度をもっていたものと考えられる。遺物は長頸壺の体部がほぼ完存するものが1点(図89-869)ある。Ⅲ-1~2段階のものか。なお、これは北へ約4m離れた土坑1253から同一個体の破片が出土し、接合した。

土坑1253 (図89)は3Cトレンチで検出。現存長軸長約1.1m、短軸長約0.9m、深さ約13cmを測る土坑。埋土は南東から北西にかけて3層に分層され、それらは黄灰色シルト質粘土、浅黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土、浅黄色粘土ブロックを多く含む黄灰色シルト質粘土である。土坑南部より須恵器長頸壺の体部片が底面にほぼ接して出土。この遺物は土坑1249から出土したものと同一個体(図89-869)である。

土坑2120 (図90、写真図版34)は3Cトレンチで検出。差し渡し0.8m前後、深さ約5cmの土坑。埋土は、黄灰色シルト質粘土。土坑の北西隅から須恵器横瓶の口縁部から肩部にかけての破片が出土。底面からは数cm浮いている。この遺物(図90-871)は横瓶の口縁部から肩部にかけて約1/2残存する。口頸部は短く外反し、端部は上方へ少し拡張、外面に丸く肥厚する。調整は体部外面に平行叩きのちかキ目、内面には同心円叩きが施されている。Ⅱ-6~Ⅲ型式にかけてのものか。また、埋土中からは壺体部細片も1点出土している。

土坑1632 (図90、写真図版33)は3Cトレンチ南隅で検出された一辺1.1~1.5mを測る菱形を呈する土坑。深さ約28cmを測り、埋土は黄灰色シルト質粘土である。遺物は須恵器注口付きの不明品(870)1点と生焼けの壺体部下半1点のみみられる。底面から浮いて出土。いずれも破砕している。

注口付きの不明品(870)は断面円形の注ぎ口をもち、注口部の外面調整は縦方向にヘラ削りを施している。体部外面は回転ナデである。外面には灰を被っている。肩の張り具合からⅢ-3~Ⅳ-1段階のものか。

土坑1565 (図90、写真図版33・94)は3Cトレンチで検出。直径0.7~0.9m、深さ約10cmを測る隅円方形の土坑。埋土にはぶい黄色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。土坑の中央から約1/3欠損した須恵器短頸壺が、ほぼ底面に接地して出土している。遺物(図90-872)は口縁部が極短く直立し、肩と体部の境が角張り、底部は丸みをもつ。底部中央は焼成不良の軟質で、調整は不明である。底部外周と底直上に回転ヘラ削りが施され、体部の外内は回転ナデ、底部内面は不特定方向のナデである。肩部外面に灰を被っている。872はⅢ-3~Ⅳ-2段階のものと思われる。

土坑1614 (図90、写真図版33・94)は3Cトレンチで検出。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ7cmを測る土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中からは広口壺(図90-873)が1点出土している。873は口縁部が1/4周残存し、全体ではおよそ1/2個体残存する。頸部から口縁部にかけて斜め上方へ開き、口縁部で更に外方へひらき口縁端部で丸く収められ、肩の張る体部の特徴から、Ⅳ-1段階前後のものか。

土坑1347 (図100、写真図版94)は3Cトレンチで検出。直径約1.3m前後、深さ約16cmを測る土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中より須恵器長頸壺の体部上半部の破片が出土。遺物(図90-874)は頸部、肩部に各2条の沈線が施され、肩はなだらかである。Ⅳ-2前後の段階のものか。なお、同一遺物の口縁部破片が、南へ8m離れた土坑1298から出土し、接合した。

土坑2231は3Cトレンチで検出。復元径0.4m前後の小型の土坑。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中より須恵器壺の体部片と別個体の底部片、Ⅲ-2段階かと思われる平瓶口縁部、Ⅱ-4段階かと思われ

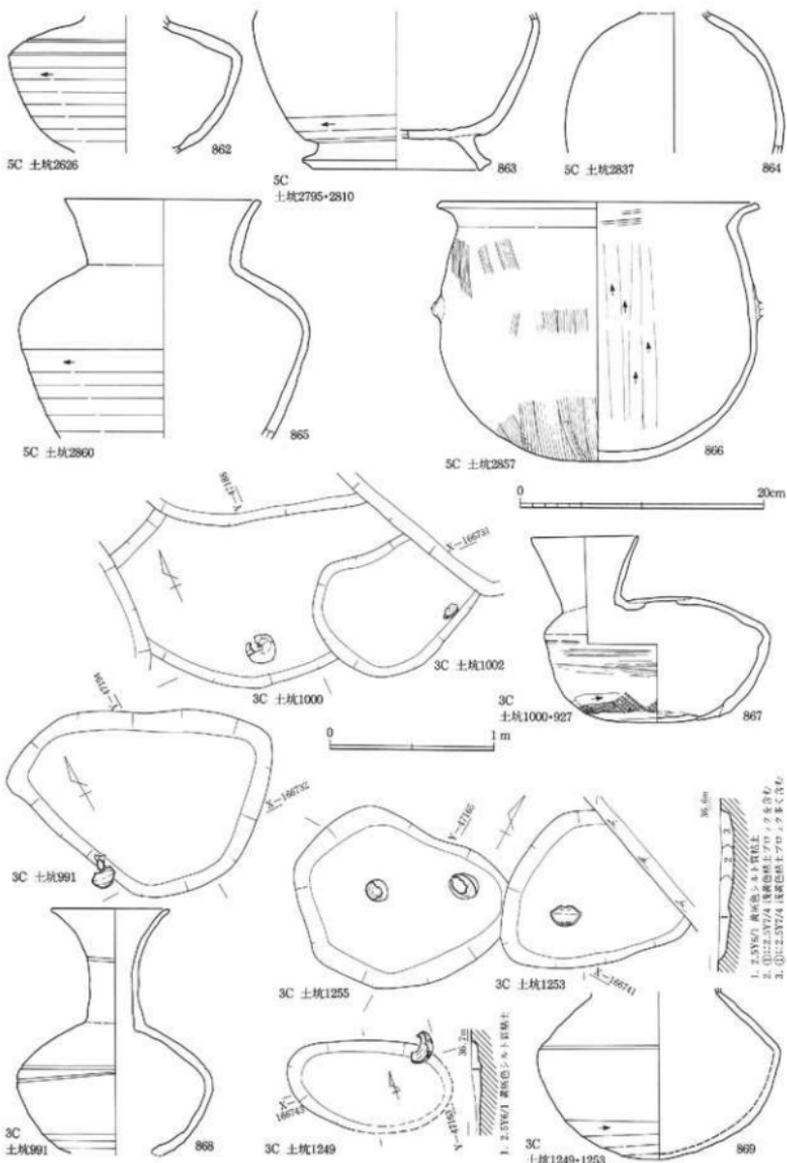


図89 土坑1000, 1002, 991, 1255, 1253, 1249平・断面図および5C, 3Cトレンチ土坑出土遺物

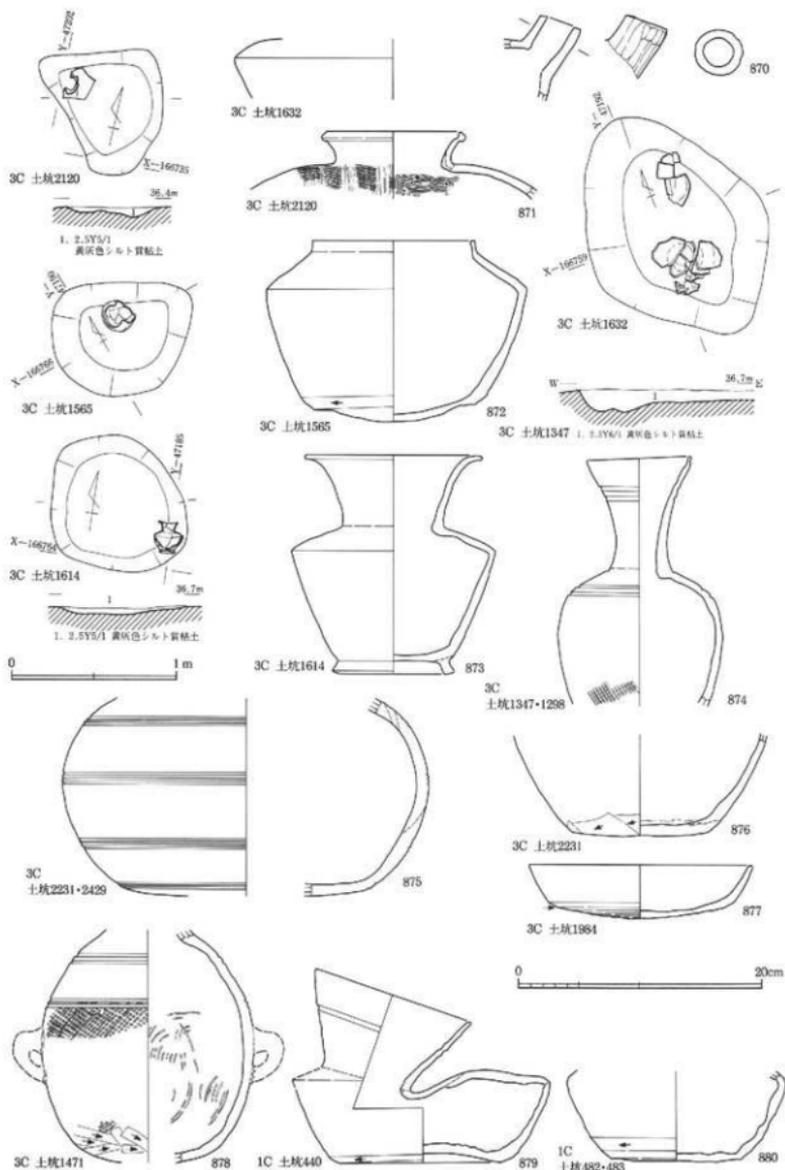


図90 土坑2120, 1565, 1614, 1632, 1347平・断面図および3C, 1Cトレンチ土坑出土遺物

る壺口縁部細片、壺体部細片などが出土。

遺物（図90-875）は体部がやや扁平で平底である。体部に櫛描直線文が4帯施されている。焼成はやや不良で軟質である。なお、体部片は西へ約6m離れた位置にある土坑2429から接合できる破片が出土している。図90-876は器種不明の体部から底部にかけての破片で、底部直上外面に静止ヘラ削りがみられる。焼成はやや不良で軟質である。875はVI型式のものか。876の時期は不明である。

土坑1984は3Cトレンチから検出。長径が残存値で1.7m、短径1.5m、深さ27cmを測る土坑。長軸はトレンチ外にのびる。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。埋土中からは須恵器の皿と思われるものが1点（図90-877）出土している。877の調整は底部外面を丁寧に回転ヘラ削りし、内面は主に一方方向になでている。焼成は不良で軟質である。877はIV-1～2段階に属すると思われる。

土坑1471は3Cトレンチから検出。直径1.3m前後、深さ12cmを測る土坑。埋土は明黄褐色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土。埋土中から須恵器の把手付き壺体部破片1点、生焼けの壺体部大破片が1点出土。壺体部片（図90-878）は1/3個体残存し、調整は体部外面に格子叩きのち回転ヘラ削り、その後横方向になでられ、底部には静止ヘラ削りが施されている。肩から体部にかけて各1条の沈線が巡る。肩はなだらかで、体部には縦方向の半環状把手の剝落した痕跡が1ヶ所に残る。おそらく双把手付きであろうと推測し、図化している。IV-2段階前後のものか。

土坑440は1Cトレンチで検出。長軸長約2.5m、短軸長約1.8m、深さ約22cmを測る土坑。埋土中から須恵器平瓶が出土。遺物は歪みの著しいほぼ完形の平瓶が1点（図90-879、写真図版94）だけである。肩と体部の境は角張り、平底である。頸部に沈線が1条巡る。III-2～3段階のものと思われる。

土坑482は1Cトレンチで検出。長軸長約1.4m、短軸長約0.9m、深さ約13cmを測る土坑。埋土中より須恵器壺の体部下半部から底部の破片、生焼け壺体部細片などが出土。遺物（図90-880）は肩から体部にかけてやや角張り、底部は平らである。底部外面に回転ヘラ削りが施されている。III型式の平瓶体部破片か。なお、同一個体の破片が土坑483からも出土し、接合している。

土坑307（図91、写真図版94）は1Cトレンチで検出。長軸長約1.9m、短軸長約1.0m、深さ約22cmを測る長方形を呈する土坑。黄灰色系のシルト質粘土を埋土とし、遺構の外側から流入したようなあり方で3層に分層することができる。遺物は、須恵器杯身が土坑中央部の西よりで正位の状態で出土し、土坑の南部には須恵器長頸壺の体部片が散乱した様子でみられた。いずれも底面より10cm前後浮いて検出。

遺物はII-5段階の杯身完形1点（図91-881）と、横線の体部破片1/2個体が1点、台付き長頸壺の1/3個体が1点（図91-882）ある。882は肩部に沈線が1条巡り、体部下半の外面に静止ヘラ削りがみられる。III-3段階前後のものか。なお、長頸壺の破片は東へ約72m離れた土坑1351、土坑1351からさらに北東へ約16m離れた土坑2677から出土した土器片と接合した。

土坑465は1Cトレンチで検出。長軸長約2.4m、短軸長約1.8m、深さ約29cmを測る土坑。埋土中から須恵器横瓶の破片が出土。遺物（図91-883）は口縁部全周と体部1/2の破片が1個体分みられる。口頸部は短く外反し、端部で外内に僅かに肥厚する。口縁部端面は外傾の平坦面をなす。調整は外面が平行叩き後まばらなカキ目、内面は同心円叩きである。体部に別個体破片の溶着が1ヶ所に見られる。同一個体の破片が土坑465を切る土坑485からも出土しており、接合した。883はIII-2段階かと思われる。

土坑343（図91、写真図版34）は1Cトレンチで検出。直径1.1～1.4m、深さ約0.3mを測る円形の土坑。埋土は黄灰色系のシルト質粘土が上下2層みられ、いずれも外部から流入したと推定される堆積状況を示す。須恵器杯身の底部片2個体分と蓋7個体分、IV-1～2段階か不明の皿かと思われる底部1

点が出土。土坑底面に接地して出土した遺物もある。遺物はかえりの消失した杯蓋（図91-884~890）と高台付きの杯身（図91-891、892）である。杯蓋は残存状態がやや良好なものが多く、2/5個体から7/10個体までみられる。杯身は1/3~1/2の残存である。891は焼成がやや不良で、軟質である。杯身は高台の接合部分が底部の端寄りにつけられていることから、杯蓋とともにⅣ-1~2段階のものか。

土坑357は1Cトレンチで検出。直径0.8~0.9m前後、深さ約14cmを測る土坑。埋土中より須恵器杯身の破片が出土。遺物（図91-893）は高台付き杯身で、2/5個体残存する。Ⅳ-1~2段階のものか。

土坑290は1Cトレンチで検出。直径1.0~1.2m、深さ約9cmを測る。埋土中より須恵器の鉢形土器1点、壺体部破片1点などが出土。壺（図91-894、写真図版94）は1/2個体残存する。底部は平底で、底部から体部は上外方に開き、口縁部で少し内湾する。体部には沈線が1条巡る。調整は底部直上の体部にヘラ削りが施されている。底部外面には1.5~1.8×5.8cmの四角い圧痕がみられるが、乾燥段階で底部に圧痕がついたものと思われる。Ⅲ-3~Ⅳ-1段階のものか。

土坑455は1Cトレンチで検出。直径1.0~1.2m、深さ約18cmを測る土坑。埋土中から須恵器杯身の破片が出土。遺物は高台付きの杯身が1点（図91-895）のみで、高台から体部にかけての細片である。Ⅳ-2~3段階のものか。

土坑538は1Cトレンチで検出。直径0.8~1.1m、深さ約26cmを測る。埋土中より須恵器の鉢形土器が出土。鉢（図91-896、写真図版95）は口縁部が1/2欠損し、焼け歪みがみられる。器形は平底で、内湾する口縁部よりなる。調整は底部から底部直上の体部にかけて回転ヘラ削りがみられ、体部から口縁部にかけては回転ナデにより、一部ミガキ状を呈する。896はⅢ-3~Ⅳ-1段階のものか。

土坑356は1Cトレンチで検出。直径0.6~1.0m、深さ約21cmを測る。埋土中より須恵器杯身の底部3個体が出土。遺物は高台付きの杯身（図91-897~899）で、口縁部は欠損し、高台部分が1/7から1/4残存する。Ⅳ-2~3段階のものか。

土坑401（図92、写真図版34・95）は1Cトレンチの東端で検出。長軸1.6m、短軸0.9mを測る長楕円の平面を呈する。深さ21cmを測り、埋土は黄灰色シルト質粘土である。須恵器鉄鉢型土器がほぼ中央部に上向きに据えられていた。土坑底面からわずかに浮いている。遺物（図92-900）の口縁部1/3は欠損している。口縁部径24.6cmを測り、底部は平底であり、体部下部1/3は回転ヘラ削りが施されている。口縁部は内湾し、端部は丸く取めている。Ⅲ-3~Ⅳ-1段階のものか。また、埋土中から壺と壺の小片も各1点出土している。

土坑310（図92・101）は1Cトレンチで検出。長軸長約2.9m、短軸長約1.7m、深さ43cmを測る。土坑321、土坑315を切って造る。最下部に灰白色粘土ブロックを含む黄灰色シルト質粘土が堆積し、その上層は黄灰色から灰黄色系のシルト質粘土が外側から流入したと推定される堆積状況を示す。木棺などを埋納した可能性をもつ堆積状況である。埋土中から須恵器壺の破片が出土。この遺物は口頸部がやや長く直立した短頸壺（図92-901）で、頸部に1条の沈線が巡る。調整は外面は平行叩きのちカキ目、内面は同心円の叩きである。焼成は不良で軟質である。Ⅳ-1段階のものか。また、Ⅲ-3段階かと思われる生焼けを含む壺体部破片が2点出土している。

土坑313（図92・101、写真図版95）は1Cトレンチで検出。差し渡し1.8~2.0m、深さ約22cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粘土。埋土中より須恵器の鉄鉢形鉢1点と平瓶などの破片が出土。遺物は口縁部の一部欠損した鉄鉢形鉢が1点（図92-902）と、口縁部から体部にかけて欠損した平瓶が1点（図92-903）、壺や壺の体部細片が各1点見られる。902の外面調整は体部から底部にかけて回転ヘラ削りの

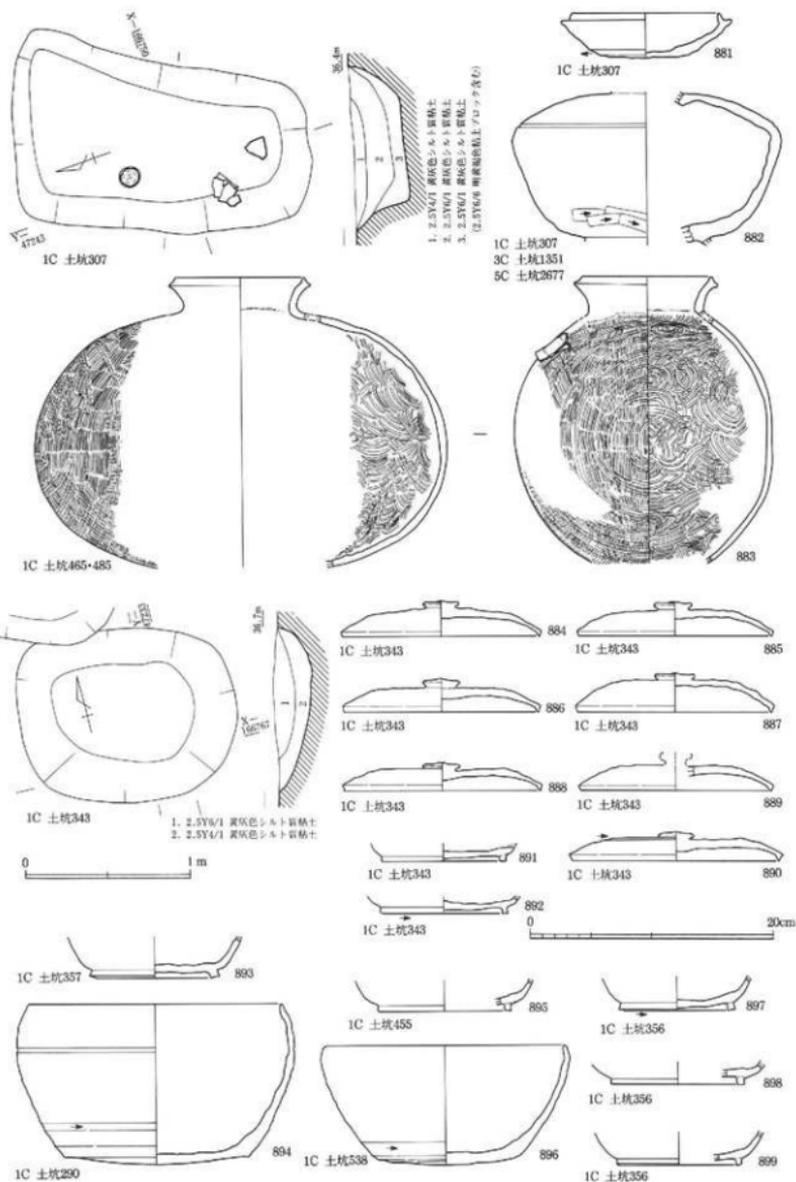


図91 土坑307, 343平・断面図およびICトレンチ土坑出土遺物